

高志の国
文学館

KOSHINOKUNI
Museum of Literature

高志の国文学館 紀要

第1号

平成27年度高志の国文学館 紀要 第1号

目次

I
〔資料紹介〕 高志の国文学館所蔵 芥川龍之介宛片山廣子書簡軸

芥川龍之介と片山廣子 —— 一九二四年夏、軽井沢

芥川龍之介宛片山廣子書簡軸 翻刻と注釈

関口 安義
綿引 香織

4

6

II
〔論文〕 北陸本線開通による東岩瀬の飛び団子由来譚の再構成とその受容

小林加代子

40

—— 大井冷光「史実お伽飛だんご」をめぐって

III
〔企画展概要〕

(1) 企画展「あの日、青い空から——久世光彦の人間主義」

小林加代子

64

(2) 企画展「山の湯の詩情——田中冬二へのいざない」

綿引 香織

69

(3) 企画展「松本清張を魅惑した北陸——ミステリー文学でたどる——」

大川原竜一

73

(4) 企画展「夢二の旅——たまき・翁久允とのゆかりにふれつつ」

小林加代子

76

I
〔資料紹介〕 高志の国文学館所蔵 芥川龍之介宛片山廣子書簡軸

芥川龍之介と片山廣子 —— 一九二四年夏、 軽井沢

関口 安義

芥川龍之介宛片山廣子書簡軸 翻刻と注釈

綿引 香織

芥川龍之介と片山廣子

——一九二四年夏、軽井沢

関口 安義

一九二四（大正一三）年夏、芥川龍之介は仕事と休養をかねて、避暑地として知られる長野県の軽井沢町に滞在した。七月二十二日早朝、上野駅を発ち、八月二十三日までの約一ヶ月、芥川は軽井沢の老舗旅館つるやの離れを借り、同世代の室生犀星をはじめ、山本有三や田中純、それに彼を慕う若い堀辰雄などと交流した。はじめての軽井沢滞在であった。この時、出会い、交わりを深めたのが、芥川が「才力の上にも格闘できる女」と「或阿呆の一生」（遺稿）で表現した片山廣子である。

今般、高志たかしの国文学館（館長中西進）では、所蔵する「芥川龍之介宛片山廣子書簡」全十四通を『高志の国文学館年報・紀要』に翻刻公開することになった。廣子の芥川宛書簡が当館に収まった経緯は、本誌の別項に、綿引香織「高志の国文学館所蔵 芥川龍之介宛片山廣子書簡軸 翻刻と注釈」があり、詳細が記されているので参照されたい。これは書誌や注のしつかりした労作である。

それにしても、いかに一級資料であろうと、手紙や日記の類は、個人情報扱いとして公開には慎重を期せざるを得ない面がある。特に関係者やご遺族が生存中には、慎重を要する。単なる興味本位からの扱いでは、まま問題を生じることがあるからだ。資料公開にも時がある。他方、公共の文学館や資料館は、一級資料を秘匿し、保存するだけでは意味がない。当の資料の所蔵を公開し、時を待って翻刻なり、写真公開なりすることによって、はじめてそれまでの保存の努力が評価されるといってよいのである。公表されたものは、当の作家や歌人に関心を持つ読者共有の財産ともなる。

今年、二〇一七（平成二九）年は、芥川龍之介没後九十年という区切りの年にも当たる。そうした折に、当館が所蔵していた資料「芥川龍之介宛片山廣子書簡」十四通を、関連する廣子の「追分のみち」（短歌十八首）と併せ

て翻刻・公開するのは、右に述べたような意味からして、壮挙としてよい。もはや時効との文学館の判断は正しい。見事な対応と言えよう。

以下、本資料の意味を簡潔に述べることにする。片山廣子は歌人であり、アイランド文学の翻訳家としても知られる存在であった。翻訳や随筆を発表する際には、松村みね子の筆名を用いていた。彼女は一八七八（明治一一）年二月十日生まれなので、芥川龍之介の十四歳年上にあたる。

龍之介は片山廣子の名を早い時期から知っていた。愛読した短歌雑誌『心の花』で廣子の歌を眼にしていたからである。彼女の歌集『翡翠』（かわせき）（竹柏会出版部、一九一六・三）を龍之介が第四次『新思潮』で採り上げたのは、彼の二十五歳の時であった。が、二人が親しく接したのは、龍之介の一九二四年の軽井沢行きが最初である。時に、片山廣子四十六歳、他方、龍之介は三十二歳になっていた。龍之介は以後、この聡明な女性を「越び」と呼び、その詩や小説にも登場させることになる（旋頭歌「越し人」「相聞」、小説「尼提」など）。

廣子は日銀理事となる片山貞次郎と結婚し、一男一女（達吉・總子）を得たが、夫とは五年前の一九二〇（大正九）年に死別し、未亡人となり、やや淋しい生活を余儀なくされていた。が、四十代半ばを過ぎても彼女の精神は若かった。しかも、洗練された物腰、ことばは少ないものの、的を射た言いは、芥川龍之介好みのタイプの女性、知的婦人であった。好奇心旺盛な廣子は、若い詩人や小説家などの交わりを好んだ。

彼女は軽井沢で夏を過ごすことが多く、つるや旅館に滞在した。廣子はこの別荘地を好み、後には夫の残した遺産で、別荘を購入するほどの肩入れであった。廣子と龍之介は、この地で顔を合わせ、互いに強く引かれるものを感じたのである。

軽井沢滞在中、龍之介は犀星や廣子の娘總子らと四人して追分まで散歩したり、つるや旅館の主人佐藤不二男も加わって、碓氷峠に月見に行ったりしている。犀星は八月十四日に金沢に帰るが、以後も龍之介は廣子と交流を深め、「なにやら分からぬ愁心」（室生犀星宛書簡、一九二四・八・二六付）を抱くようになる。

従来、芥川龍之介と片山廣子との関係は、その年齢差からして、龍之介の

一方的恋情と思われていたが、本資料を最初に手にした芥川研究の先達吉田精一により、むしろ廣子の方が積極的であったとの見解が出された（『芥川龍之介の恋人』『中央公論 歴史と人物』一九七・一一）。以後、芥川研究者から二人のかかわりを示す、廣子書簡の公開が強く求められるようになる。吉田氏没後、片山廣子の芥川宛書簡は、歌人の辺見じゅんの手に渡り、「芥川と『越し人』」（『朝日新聞』夕刊、一九九二・九・一一）などが書かれた。これらの廣子書簡（一九二四年九月から翌年十二月にかけて書かれたもの）は、二〇一一年九月二十一日に、辺見氏が亡くなった後、ご遺族から当館に寄贈された。

芥川宛全十四通の片山廣子書簡は、廣子の全集には見られず、今回が最初の全文翻刻となる。近代日本の知識人である男女二人の、年齢を超えた優れた知性の交流を、読者は確かめることが出来る。堀辰雄の小説にモデルとして登場する片山廣子は、風雅に優れた慎ましい貴婦人という印象が伴う。が、これら書簡から読者は、十四歳も年下の小説家に心ひかれる知的婦人の実像を発見するだろう。これまでざわりの部分に限られていた資料の全文が読めるようになったことを喜びたい。

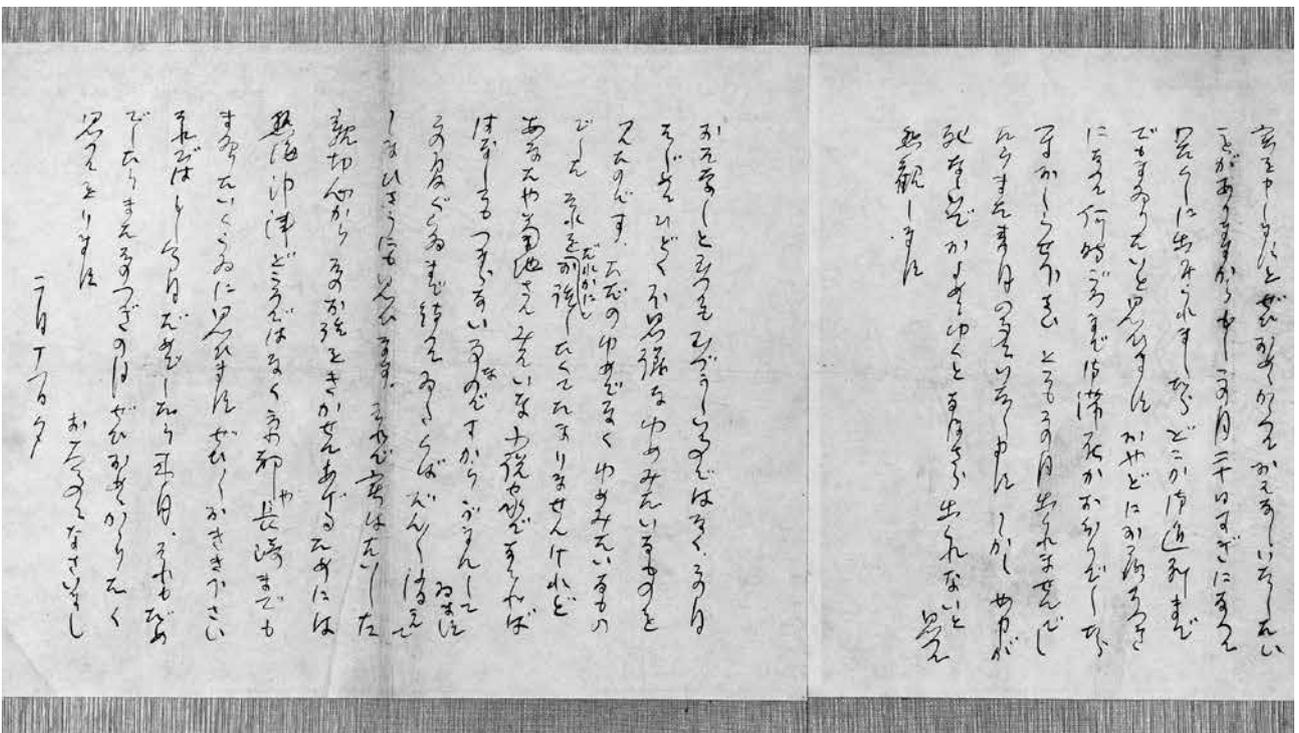
（都留文科大学名誉教授）



田端の書齋で執筆中の芥川龍之介（1924年7月）
写真提供：日本近代文学館



片山廣子
（『現代短歌全集 第19巻』
改造社、1931年より）



芥川龍之介宛 片山廣子書簡（1925年2月11日付）

綿引 香織

はじめに

ここに翻刻紹介するのは、当館所蔵の芥川龍之介宛片山廣子書簡軸（芥川龍之介宛片山廣子書簡および片山廣子歌稿）である。片山廣子（一八七八～一九五七）が芥川龍之介（一八九二～一九二七）にあてた書簡十四通（大正十三年九月～大正十四年十二月にかけて書かれたもの）と、そのうちの一通に同封されていたと思われる廣子の歌稿「追分のみち」から構成される資料で、現在は全三巻の卷子本に仕立てられているために書簡軸と呼ぶものがある。

これらの書簡については、旧蔵者である吉田精一氏および辺見じゅん氏により、その著作の中で書簡本文が部分的に引用されているもの、片山廣子の著書、全集等には含まれておらず、これまでに全文紹介がなされたことはなかった。しかし、芥川龍之介が「越びと」（越し人）と呼んで思いを寄せたとされる歌人・翻訳家の片山廣子（松村みね子）が、晩年の芥川龍之介と軽井沢で交流を深めた時期に書いた書簡であり、軽井沢および東京での二人の交流の様子がうかがえることから注目度は高く、吉田氏・辺見氏の論文を通じて諸氏の論にとりあげられてきた。なお、これらの書簡に対する芥川からの返信は残っていない。³⁾

また、第三巻の末尾に貼付されている歌稿「追分のみち」は、短歌十八首と追伸文からなる。廣子が『三田文学』第一巻第五号（大正十五年八月）に発表した歌作「日中」と共通する歌が多いが、語句の異同だけでなく、採用されている歌そのものにも違いがある。未発表とおぼしき短歌が数首含まれることから、片山廣子の短歌を研究する上でも重要である。

当館では、本県ゆかりの歌人・作家である辺見じゅん氏（一九三九～二〇一一）のご遺族より、当該資料の寄贈を受け、開館一周年特別展「辺見じゅんの世界」（平成二十五年八月十日～十一月十一日開催）において本資料の一部を展示した（同展図録参照）。今回はその後の調査をふまえ、ここに全文の翻刻紹介を行うものである。

以下、資料について詳しく見ていきたい。

一、書誌

まずは資料の形状について述べる。全三巻の卷子本で、それぞれの題簽に「片山廣子（一）」「片山廣子（二）」「片山廣子（三）」と毛筆で書かれている。表紙には黄檗色の地に浅黄色の牡丹唐草文様が入った裂（きず）が使われている。全体の法量は、第一巻が縦二四・五cm×全長三三三・九cm（見返し、軸付部を除く。以下同じ）、第二巻が縦二四・五cm×全長三五五cm、第三巻が縦二三・六cm×全長三七〇・九cm。

本紙を見ると、書簡には鳥の子色または薄卵色の無地の和紙（無野紙）、歌稿には原稿用紙が使われており、ともにペンで書かれている。書簡はほぼ年代順（一部例外あり。後述）に貼り付けられており、各書簡の冒頭には、年月日を墨書した白色の短冊状和紙が見出しとして貼付されている。どの書簡も便箋のみで、封筒はついていない。見出しに書かれている年月日の筆跡は、書簡や歌稿の本文とは別筆であり（封筒からの切り取りではない）、卷子本に仕立てたときに付されたものであろう。書簡本文に出てくる日付と一～二日程度のずれがあるものや、日付の後に「？」が付されているものがあることから、封筒にあった消印を採用した年月日（「？」は消印が薄いなどで読みにくかったことを示すものか）だったのではないかと推測されるが、封筒が現存しない今、詳細は不明である。また、いつの段階で便箋と封筒が分離されて卷子本に仕立てられたのかは明らかでない。そして第三巻の巻末には、三越製の原稿用紙に書かれた歌稿が配置されている。

各巻の内容および本紙の法量（縦×横、単位はcm）は次の通りである。貼付されている順番に丸数字で通し番号を付し、見出し項目については、各書

簡冒頭の短冊に書かれている年月日および歌稿のタイトルで示した。

「片山広子（二）」：書簡全四通

①大正十三年九月一日

書簡本文の冒頭には「八月三十一日夕」と書かれている。全三紙（二・三・×二七・八、二・三・×二八・〇）。

②大正十三年九月五日

全三紙（二・三・×二七・九、二・三・×二八・〇、二・三・×二八・〇）。

③大正十三年九月二十三日

全三紙（二・三・×二七・九、二・三・×二七・六、二・二・×二七・五）。

④大正十三年九月二十五日

全四紙（二・二・×二七・五、二・二・×二八・〇、二・二・×二八・〇、二・二・×二七・七）。

「片山広子（二）」：書簡全五通

⑤大正十三年十月三十一日

全三紙（二・三・×二六・八、二・二・×二七・八、二・二・×二七・七）。

⑥大正十三年十一月五日

全二紙（二・二・×二七・七、二・一・×二七・三）。

⑦大正十四年二月十一日

全三紙（二・一・×二七・二、二・一・×二七・四、二・二・×二七・二）。

⑧大正十四年六月一日

全三紙（二・二・×二七・七、二・二・×二七・二、二・二・×二六・七）。

⑨大正十四年六月二十四日

全三紙（二・一・×一八・二、二・一・×一八・四、二・三・×一七・八）。

「片山広子（三）」：書簡全五通および歌稿

⑩大正十四年八月三十日

全二紙（二・〇・四×二三・五、二・〇・四×二四・五）。

⑪大正十四年九月二十九日

全二紙（二・〇・三×二七・〇、二・〇・四×二七・四）。

⑫大正十四年十一月十一日

全三紙（二・〇・四×二七・四、二・〇・四×二七・四、二・〇・三×六・六）。

⑬大正十四年十二月八日

全一紙（二・〇・三×二七・九）。

⑭大正十四年九月二十五日（？）

（？）はママ。書簡本文の後付には「九月二十三日」と書かれている。

全二紙（二・〇・四×二四・六、二・〇・四×二五・一）。

⑮追分のみち

三越製の二百字詰原稿用紙全七枚（各二・〇・五×一八・五）。短歌全十八首に短い文章（追伸）が添えられている。原稿用紙右端にクリップ留めの鏝跡あり。

右の一覧に示したように、第一巻と第二巻では書簡が日付順に整理されているが、第三巻では一部順番が変えられていることがわかる。

⑭の大正十四年九月二十五日（九月二十三日）付の書簡および⑮の歌稿は、順番からすれば⑩と⑪の間にくるはずのものであり、内容から見てもそれが妥当である。つまり、作成順で並べるならば、①～⑩、⑭、⑮、⑪～⑬の順番になる。この錯簡はおそらく、歌稿⑮を体裁上最後に持ってきたために、それとセットである書簡⑭の位置が、本来の順番とは異なる位置に移動されてしまったために生じたのであろう。翻刻にあたっては、資料の現状に即して書簡および歌稿に通し番号を付すこととし、あえて順番は正さなかった。読解にあたっては右の事情に留意されたい。

二、筆者・片山廣子について―芥川龍之介との関連を中心に

この書簡の筆者（発信者）である歌人・翻訳家の片山廣子（一八七八～一九五七）は、明治十一年に外交官・吉田二郎の長女として東京麻布に生まれた。六歳から英国人教師について正式に英語教育を受ける。明治二十一年に東洋英和女学校予科に編入し、本科、高校科へと進み、明治二十八年に卒業するまで、すべて洋式の寮生活を送り、厳格なしつけと聖書に基づく宗教教育を受ける。明治二十九年に佐佐木信綱のもとに入門し、短歌や古典を学

ぶ。「竹柏会」が結成された明治三十二年、大蔵省勤務（のちに日本銀行理事）の片山貞次郎と結婚。翌年、長男達吉（筆名・吉村鐵太郎）が誕生。明治三十九年、東京府荏原郡入新井村（のちに大森新井宿）に転居。明治四十年には長女總子（筆名・宗瑛）が誕生。夫の貞次郎は大正九年に死去している。

廣子の作品は明治三十年から確認されており、結婚前は吉田廣子（ひろ子）、結婚後は片山廣子（ひろ子）の名で短歌、雅文、新体詩、翻訳を『心の花』等に発表。大正二年から、「松村みね子」の筆名を主に散文、翻訳に使った（本名も併用されている）。大正五年、第一歌集『翡翠』を上梓（芥川龍之介が『新思潮』に書評を書いている）。また、鈴木大拙夫人ビアトリリスに指導を受けてアイルランド文学に親しみ、大正四年にはショウの戯曲『船長ブラスバオンドの改宗』を翻訳。ほかにレディ・グレゴリー、シング、ダンセイニ、イエイツなどの翻訳があり、特にフィオナ・マクラオドの『かなしき女王』は名訳と言われる。廣子の翻訳は森鷗外、上田敏、菊池寛をはじめとする文学者や英文学者にも高い評価を受けた。また廣子は、大正十二年に長谷川巳之吉が第一書房を創立するにあたって資金援助を行ったことでも知られている。

芥川龍之介は初期の短歌の多くを『心の花』に発表しており、歌作を通じて廣子と接点があった。『翡翠』の書評以降、書籍の送付や見舞い等のやりとりが時折あったことがわかるが（芥川が廣子に宛てた、大正六年六月十日付書簡、同年七月二十四日、大正八年二月二十八日付書簡）、両者の交流が決定的に深まったのは、大正十三年七月に軽井沢つるや旅館で同宿して以来のようである。この時、廣子は四十六歳、芥川は三十二歳。滞在中は、室生犀星、片山總子、つるや旅館主人とともに碓氷峠に月見に行ったり、追分で美しい虹を見たりしている。大正十三年秋（軽井沢から帰京後）から翌年末にかけての間に展開された二人のやりとりと、その間の廣子の心の動きは、今紹介する書簡十四通のなかにその一端をうかがうことができる。

これらの書簡に対する芥川の返信は残っていないが、友人である小穴隆一や室生犀星らにあてた書簡（大正十三年八月十九日付小穴隆一宛書簡「もう一度廿五才になったやうに興奮してゐる」、同年八月二十六日付室生犀星宛書簡「何やらわからぬ愁心」、あるいは廣子をモチーフにしたと考えられて

いる関連作品のなかに、間接的にその心情をうかがうことができる。大正十四年三月の『明星』第六卷第三号に発表した「越びと」旋頭歌二十五首や「相聞」等の抒情詩には、廣子への恋情が歌われており、昭和二年四月に発表された『三つのなぜ』の「(二)なぜソロモンはシバの女王とたつた一度しか会はなかつたか？」⁷では、芥川自身をソロモンに、廣子を年上の「珍しい才女」であるシバの女王に擬していると言われる。そして、遺稿となった『或阿呆の一生』の「三十七 越し人」では、次のように書いている。

彼は彼と才力の上にも格闘出来る女に遭遇した。が、「越し人」等の抒情詩を作り、僅かにこの危機を脱出した。それは何か木の幹に凍った、かきやすい雪を落すやうに切ない心もちのするものだった。

風に舞ひたるすげ笠の／何かは道に落ちざらん

わが名はいかで惜しむべき／惜しむは君が名のみとよ。

また、芥川の遺書の一通にある次の言も参考になる。

僕は三十歳以後に新たに情人をつくつたことはなかつた。これも道德的につくらなかつたのではない。唯情人をつくることの利害を打算した為である。（しかし恋愛を感じなかつた訳ではない。僕はその時に「越し人」「相聞」等の抒情詩を作り、深入りしない前に脱却した。）

昭和二年七月二十四日の芥川の死は、廣子に大きな衝撃を与えた。同年六月末には、芥川は堀辰雄の案内で廣子宅を訪れていたという（昭和二年八月七日付山川柳子宛片山廣子書簡）。廣子はこの頃のことを回想して、「もう二十何年前、昭和の初めごろ、私は急に自分の生活に疲れを感じて何もかもいやになつてしまつた。それまで少しは本も読み、文学夫人といふやうな奇妙なよび名もつけられてゐたけれど、そんな事ともすつかり縁をきつて、ぼんやりと庭の草取りなぞして日を暮すやうになつた。文筆の仕事ばかりでなく、外に出ることも面倒になり、（中略）何年かのさういふ生活は精神的な脳溢血の病人みたいな容体であつたかと思はれる。」と述べている（隨筆集『燈火節』あとがき、昭和二十八年刊行）。

そうしたなか、昭和三年には、山川柳子、渡辺とめ子、栗原潔子、村岡花子らとともに雑誌『火の鳥』を創刊し、企画・編集に関わつた。昭和六年頃には軽井沢に別荘を購入。戦局の悪化に伴い、昭和十九年、大森の家から杉

並区浜田山に転居。昭和二十年には長男達吉を失い、疎開先の軽井沢で終戦を迎えた。同年には弟の東作、翌年には妹の次子を相次いで失っている。その後、昭和二十八年には、随筆集『燈火節』（のちに第三回エッセイスト・クラブ賞受賞）、翌年には第二歌集『野に住みて』が上梓される。廣子は昭和三十一年に脳溢血に倒れ、翌年、七十九歳で死去した。

芥川について多くを語らなかつた廣子だが、芥川との思い出についてふれた随筆に、「黒猫」（昭和三年五月発行の『若年』第四巻第五号に発表）、「芥川さんの回想（わたくしのルカ伝）」（『婦人公論』昭和四年七月号に発表）、短歌では「しろき蛾―つるや旅館・もみぢの部屋にて」（歌集『野に住みて』昭和二十九年所収）等がある。また、堀辰雄の小説「ルウベンスの偽画」「聖家族」「物語の女」「楡の家」「菜穂子」等には、廣子や芥川、廣子の娘・總子らをモデルとした人物が描かれている。

三、伝領関係について

当館所蔵の書簡十四通と歌稿について、発信者である片山廣子から受信者である芥川龍之介のもとに届いた後、どのような経緯をたどって伝領され、どの時点で卷子本に装幀されたのかなど、詳細には不明な点が多い。そのなかで、本人の言により、旧蔵者であることがわかっているのは、今のところ吉田精一氏と辺見じゅん氏である。

吉田精一氏（一九〇八―一九八四）は、「芥川龍之介と最後の恋人―片山広子の書簡―」（『ブッククラブ情報』第二巻第一号、昭和四十六年一月。以下、吉田①）において、「昨年入手した彼女（片山廣子―引用者注）の芥川あて書簡」、「私がこのたび入手したのは、松村みね子の側からの大正十三年以後二年間にわたる十数通（傍線は引用者による。以下同じ）である。（中略）この十数通もこの間の往復文のすべてでなく、遺漏の多かるべきことは、それらを解読することで知り得る。」と述べ、書簡の一部を引用しながら、その内容について論じている（吉田②で引用している箇所と重なるが、分量は少ない）。吉田氏の「みね子の手紙は何れも相当の長文であり、婉曲な言い回しのうちに、クレバアな頭脳と、ブリリアントな才気のひらめきが見える。」

との指摘は、廣子の書簡文の特徴を言い当てているように思う。

そして同年に発表した「芥川龍之介の恋人」（『中央公論 歴史と人物』昭和四十六年十一月初出。以下、吉田②）では、「大正十三年九月以降のみね子の芥川あて書簡」を「三年前に入手した」と述べ、歌稿⑮（全十八首）から三首、書簡②から約二十二行分（約三十七％）、書簡⑤から約七行分（約十五％）、書簡⑦から約八行分（約十九％）、書簡⑧から約二十七行分（約五十七％）、書簡⑨から約十一行分（約三十五％）、書簡⑫から約八行分（約二十一％）を引用（または要約）し、書簡から読み取れる廣子の心情を分析しつつ、芥川と廣子の関係性を考察している。この引用部分が当館蔵の書簡・歌稿の本文とほぼ一致し、未見のものは含まれていないことから、吉田氏がここで紹介している資料と当館蔵の資料は、同じものであると考えることができる。

なお、吉田②を収録した『吉田精一著作集第二巻 芥川龍之介Ⅱ』（桜楓社、昭和五十六年）のあとがきには、「芥川の最後の恋人片山広子の芥川あて書簡を二十通ほど手に入れた」と書かれており、この時点で吉田氏が所有していた書簡が、当館蔵の十四通よりも数が多かった可能性は残るものの、吉田①②に引用された箇所と当館蔵の書簡の本文とを比べた際に、大きな違いや未見の部分などはないため、「二十通ほど」というのは、別途入手して角川版芥川龍之介全集に収めたという書簡二通を加えて換算した数字なのかもしれない。

辺見じゅん氏（一九三九―二〇一一）は、「芥川と『越し人』」（『朝日新聞』平成四年九月十一日付夕刊初出）のなかで、「数年前、私は廣子の芥川あての十数通の書簡を手に入れた。それは、大正という時代を背景にした美しい恋文であり、互いが文学的にも影響し合っていたことを感じさせた。」と述べ、書簡②から約十三行分（約二十二％）を引用しながら、廣子と芥川の関係性について述べている。この論に先立って『短歌』昭和五十三年九月号に発表された「ロマネスク・片山廣子」では、片山廣子の短歌について、与謝野晶子と比較しながら論じている。このなかで辺見氏は、「私はこの十数年、一人の女の精神史を書いて見たいと片山廣子に執して来た。」とも述べており、廣子への並々ならぬ思い入れをうかがうことができる。

本書簡は、平成四年に富山大和八階ホールで開催された第三回富山県芸展（富山県芸術文化協会・富山県教育委員会・富山新聞社主催）において辺見氏により特別出品され（平成四年八月二十九日付『富山新聞』朝刊には、書簡①の翻刻（抜粋）が写真付きで掲載されている）、平成十八年に月曜社から刊行された片山廣子／松村みね子『野に住みて 短歌集＋資料編』の口絵には、書簡の一部がカラー写真で掲載されている（卷子本の状態）。

片山廣子の芥川龍之介宛書簡の存在およびその内容は、吉田氏の論文により広く知られるようになった。吉田論文の発表以降、芥川と廣子の関係性について論じられる際には、この書簡が利用されることも多いが、その引用のほとんどは吉田論文、あるいは辺見論文をベースにしていると考えられる。

注

(1) 吉田精一「芥川龍之介と最後の恋人―片山広子の―書簡」(ブッククラブ情報)第二巻第一号、昭和四十六年一月)、同「芥川龍之介の恋人」(中央公論 歴史と人物)昭和四十六年十一月初出、『吉田精一著作集第二巻 芥川龍之介Ⅱ』所収。桜楓社、昭和五十六年)、辺見じゅん「芥川と『越し人』」(朝日新聞)平成四年九月十一日付夕刊初出、『桔梗の風 天涯からの歌』所収。幻戯書房、平成二十四年)。

(2) 近藤富枝『信濃追分文学譜』(中央公論社、平成二年。初出は昭和六十三(平成元年)、阿部光子「ひとつの樹かげ」(『その微笑の中に』新潮社、平成四年所収。初出は平成二年)、松本寧至『越し人慕情 発見芥川龍之介』(勉誠社、平成七年)、関口安義『芥川龍之介とその時代』(筑摩書房、平成十一年)、川村湊「相聞歌―芥川龍之介と片山廣子」(物語の娘 宗瑛を探して)講談社、平成十七年) など。

(3) 昭和三年一月十九日付の堀辰雄宛片山廣子書簡(谷田昌平・池内輝雄編「資料紹介」片山廣子・達吉・總子の堀辰雄宛書簡)『昭和文学研究』二十六号、平成五年)には、「御申しこしの芥川さんの手紙のことは承知いたしました。なるたけたくさんおめにかけたいのですが、實はあなたがおいで下すつた時すこし読んでいただいでその上のことと思つ

てゐたのでした」とあり、この時点では、廣子の手元に芥川からの書簡が少なからず存在していたことがうかがえる。のちに、廣子の告別式が行われた昭和三十二年三月二十二日の夜、娘の總子の手によって芥川からの書簡のすべてが裏庭で燃やされたという。この時の總子の言葉は、兄達吉の妻であった和子氏の談話として、秋谷美保子編『片山廣子全歌集』(現代短歌社、平成二十四年)巻末の片山廣子年譜に記されている。

(4) 藤田福夫「三訂・片山広子年譜」(『相山国文学』十三号、平成元年)では転居を明治四十三年としているが、秋谷美保子編『片山廣子全歌集』(現代短歌社、平成二十四年)収録の「片山廣子年譜」の記述によった。

(5) 「越びと」は、三章に分かれ、一章三首が『越路のひとの年ほぎのふみ』を手にした新年の日、二章十三首が軽井沢での夏の日々、三章九首が軽井沢から帰京後の初秋から冬の情景を詠い一章に還る構成になっている。(関口安義・庄司達也編『芥川龍之介全作品事典』勉誠出版、平成十二年の「旋頭歌」の項目の解説(平野晶子執筆)による)。なお、廣子は堀辰雄宛書簡(昭和三年一月十九日付)のなかで、「越びと」の歌を一つ抜きたいと堀に依頼しているが、その一首とは、「ひたぶるに昔くやしも、わがまかずして、垂乳根たらちねの母となりけむ、昔くやしも。」の歌であろうか。

また、同書簡において、ある友人から「芥川氏の小説の中にある『越しびと』といふのは片山さんではないのですか」と聞かれた廣子は「さむくおもひ」、「自分でもさうかとも思ふがさうでないかも知れない、よく分からないと返事しました」と述べている。

(6) 昭和五十三年刊行の『芥川龍之介全集』第九巻「詩歌二」には、生前未発表の「相聞」と題する抒情詩三篇が掲載されているが、原資料の所在は不明だという。うち一篇(「相聞二」)は『或阿呆の一生』の「三十七 越し人」に書かれている詩と共通する。大正十四年四月十七日付の室生犀星宛芥川龍之介書簡には、「相聞三」を含む詩二篇が書かれている(「歎きはよしやつきすとも／君につたへむすべもがな。／越

のやまかぜふき晴るる／あまつそらには雲もなし。」「また立ちかへる水無月の／歎きをたれにかたるべき。／沙羅のみづ枝に花さけば、／かなしき人の目ぞみゆる。」(後者は「相聞三」と共通)。

(7) シバの女王は美人ではなかった。のみならず彼よりも年をとつてゐた。しかし珍しい才女だった。ソロモンはかの女と問答をするたびに彼の心の飛躍するのを感じた。それはどういふ魔術師と星占ひの秘密を論じ合ふ時でも感じたことのない喜びだった。彼は二度でも三度でも、——或は一生の間でもあの威厳のあるシバの女王と話してゐたいのに違ひなかつた。

けれどもソロモンは同時に又シバの女王を恐れてゐた。それはかの女に会つてゐる間は彼の智慧を失ふからだつた。少くとも彼の誇つてゐたものは彼の智慧かかの女の智慧か見分けのつかなくなるためだった。ソロモンはモアブ人、アンモニ人、エドミ人、シドン人、ヘテ人等の妃たちを蓄へてゐた。が、彼女等は何といつても彼の精神的奴隷だつた。ソロモンは彼女等を愛撫する時でも、ひそかに彼女等を軽蔑してゐた。しかしシバの女王だけは反つて彼自身を彼女の奴隷にしかねなかつた。

ソロモンは彼女の奴隷になることを恐れてゐたのに違ひなかつた。しかし又一面には喜んでゐたのにも違ひなかつた。この矛盾はいつもソロモンには名状の出来ぬ苦痛だつた。彼は純金の獅子を立てた、大きい象牙の玉座の上に度々太い息を漏らした。その息は又何かの拍子に一篇の抒情詩に変わることもあつた。(以下略)

(8) 吉田①において、岩波版芥川全集に収められている芥川の廣子宛書簡二通のほかに、「以後私は別に二通を発見し、紹介して、角川版の芥川全集におさめたが、それらはすべて何気ないものにすぎなかつた。」と述べている。

(9) 注(2) 参照。

四、資料翻刻

【凡例】

・卷子に貼り付けられている順番に丸数字を付した。見出し項目については、各書簡の冒頭に貼付の短冊に書かれている年月日を記した。歌稿については、タイトルをそのまま記した。

・翻刻にあたっては、原文の記載、形式をできるだけ再現することに努めた。

・旧漢字、仮名遣い、送り仮名、拗音・促音、清濁、おどり字、句読点、括弧、傍点、記号などは原文の表記通りとした。

・変体仮名は現行の仮名表記に改めた。

・改行は原文の通りとした。

・不明な文字、判読不能文字については、字数に従つて□で示したが、字数が不明な場合には「」で示した。推定による判読箇所については網掛けで示した。

・用紙の継ぎ目は「」で示した。

・今日の観点から見ると差別的な表現が見受けられるが、歴史的な背景に鑑みて原文のままとした。

・原著者(片山廣子)が書き誤った文字を自らペンでぬり消し、右側に新たな文字を書き入れている場合には、訂正されていることへの注記はしなかつた。文字をぬり消したままになっている場合には【数文字分抹消】と示した。

・誤字、脱字、衍字と思われる箇所には「ママ」と振った。

・語句の右下に「*」が付されている部分は、適宜注釈をつけた箇所である。

「五、注釈」を参照されたい。

【付記】

解題・翻刻・注釈については当館主任(学芸員)の綿引香織が担当した。翻刻にあたり、当館主任(学芸員)の小林加代子、大川原竜一の協力を得た。

このたびの資料紹介にあたってご協力いただいた関係各位に心よりお礼申し上げます。

「片山広子（一）」 ※書簡全四通

①大正十三年九月一日

八月三十一日夕

先だつてはお手紙をありがとうございました
わたくしたちは二十八日のあさひき上げてまゐり
ました あちらではいろいろとおせわさまになり
ました それにおいそがしいお仕事のお邪魔
をしたこともたびたびでございましたでせうと大
へんに恐縮に思つてをります

假宿の地所の事は孝一氏が東京へ電報

でとひあはせてくれたのですが先方の主人が
旅行中といふ事でそのまゝになつてしまひまし
しかし不二男氏がこの秋ひまになつてから自分
で出張してくはしくしらべてくれますさうでもし
よいところでしたらばわたくしたちに来年の春
わか葉時分にも見に来てくれといふ事でもかたく
約束してまゐりました もしその時分にお心持
が変わりませんでしたら どうぞあなたも御検分
下さるやうお願ひ申します

それからもう一つ、追分へおさそひ下さつた時
車をわたくしにも持たせていたゞくつもりで
出かけたのですが あとでお帳場の方では
すつかりあなたから頂戴したと申しますので
不二男さんにあんまりたのみがひのない人だと
怒りましたがとにかくあとから御送りいたす
のは失禮だとあの人が申しますので たうとう
わたくしがお客さまにならせていただきます
なんとなく西洋婦人のづうづうしさを感じて

しかたがございません ほんとにいろいろありがたう
ございました

またよい時候になりましたら あるひはおめもじ
出来る日もあることかとすこしたのしみにいたし
てをります

もう一つ書きたい事がありますけれども長く
なりますからやめます 御禮までに かしこ

ひろ子

芥川様 御もとに

②大正十三年九月五日

二十三日におわかれする時にもう當分あるひは永久におめに
かゝる折がないだらうと思ひました それはたぶん来年は
つるやにはおいでがないだらうと思つたからです わたくし
がアすこにあるといろいろうるさくお感じになるかもしれない
と思つたのでした それでたいへんにおなごりをしくおもひ
ました 夕方ひどくぼんやりしてさびしく感じました
御はんすぎ子供たちが何か言ひはじめで喧嘩になり二人
とも散歩に出ないといひはじめました わたくし一人で
火星を見に出かけました 星がひくいところにたいそう赤く
見えました 空からだか山からだか夜かぜがひやつこく吹
いて来ました自分がたいへんにとしよりらしく力なく感じ
ました

二十四日たいそうよく晴れてゐましたもみぢの部屋がらんと
して風がふきぬいてゐました 通りがかりにあすこの障子際
にステツキが立つてゐないのを見るとひどくつまらなく感じ
ましたそしてつるやちゆうが静かになつたやうでした夜に
なつてお帳場ちかくに【数文字分抹消】不二男さんとはなしをしてゐ
た時あなたの噂が来ました わたくしはあんな大切なめん
だうなお客さまの接待やくをして上げたからつるやさんから

御はうびが出てよいはずだと云ひました 御はうびは何がよろしいでせうときゝますからあめがいゝでせうと云ひました

(帰宅後みすゝあめが小包で届きました すつかり)

恐縮してそれでもいまだに毎日それをたべてゐます)

その日でしたか翌日でしたかわたくしはもみぢに背なかをむけて腰をかけて考へごとをして自分がこのなつ前に思つたほど

よくやすまなかつたやうに感じました これからでもやすまうと思ひましたその後つくづく静養といふものつまらなさをしりました

二十八日帰つて来ましたらうちの中はにぎやかでした 大工がはいつてゐたり 田舎の客が泊りこんでゐたりして 静かすぎても軽井澤へかへりたいと思ひました

二日か三日の夜でした 気分がわるくてすこし早くねました星が先夜ほどではなくそれでもめについて光つてゐましたふいとあなたの事を考へて今ごろは文藝春秋の小説学の講

義でもかいていらつしやるかしらと思ひましたそれから何も考へずにしばらくねてゐましたがそのあとでとんでもなく遠い

ことを考へました それは(おわらひになつては困ります)むかしソロモンといふえらい人のところへシバの女王がたづねて行つて二人でたいへんに感心したといふはなしはどうしてあれつきり

になつてゐるのだらうといふうたがひでした しばらく考へて見報告書はこれでをはり。ふざけて長く書いたのでは

なくて正直ものがめんくらつてまじつてゐるために長くになりました その辺はおふくみ願ひます

報告とはまるで別ですが わたくしたちはおつきあひができないものでせうか ひどくあきあきした時におめにかゝつてつまらないおしやべりができないものでせうか あなたは

今まで女と話をして倦怠を感じなかつたことはないとおつしやいました* わたくしが女でなく 男があるひはほか

のものに、鳥でもけものでもかまひませんが 女でないものに出世して

おつきあひはできないでせうか これはむりでせうか またしばらくお留守になさるさうですからお返事を

いまいただかうとは思ひませんがこの報告書がほかのたぐさんの手紙の中にはいつて例のカマハラ氏*にでも先生の代理によんでいただいてはすこし困ると思ひます

から 御帰京になりました上これをおよみになつたらば一寸そのむねお返事願へばさいはひに存じます わたくしのながつたらしい手紙についての御批評はうかゝひたくはありません

失禮な事をたくさん書きましたおゆるし願ひます

③大正十三年九月二十三日

いま紙がなくなりましたからこんなとんきよな紙にかきます

たいそう秋らしくなりました先日はお約束の御本*をありがたうございましたまるでふだんのあなたにおめにかゝるやうな気持でうれしく拝見いたしました

さて十月号改造の犀屋老の明文*をごらん

になりましたらうか ふさ子があれをよみましてたいへんにふんがいてしまひました ふさ子が

いひますには室生*さんはあんまりおゆきさんのことばかり書きたかつたのであんなでたらめを書いたのでせう あたしはまだうまれてから一度だつて

かあさんのことをおかあさまといつた事はありません 一度だつてかあさんにだきつくなんてきざ

なまねをしたことありませんと、それはわたくしだつてふさ子がわたくしのことをおかあさまといつたら

たまらなくすぐつたいだらうと思ひますもし わたくしにあの子がだきついたら「よその子!

あついでよ」といつてやるかもしれません。ふさ子はおやつ

にあれをよんでばん御飯までふんがいてそれから

金沢へはがきを書くといひました。がわたくしが

とめました。あんな好い方をおどろかしてはいけない

と言つて、それからよなべに自分で讀んでみたの

ですがなるほどふさ子がきのどくになりました

それで誠にすみませんが、あなたはこのなつ中

すつかりあの子を見ていらつしやいましたからせめて

あなたからでもふさ子にはがきを書いて下さい

ませんか。つまりふさ子がかあさんをかあさんと呼び

だきつくなんて奇妙なまねは一度もしなかつた、

室生さんの文はすこしちがつてゐる、その証人になる

といふこと、誠にそれいりますが金沢にないしよ

で一つお願いいたします。ふさ子は總子とかき

ます

もみぢの家にすむ人みやこにかへる

日ちかくなつて満月といへる菓子*

おくられるにかへし

やがて来むさびしき夜々もおもひ

やり みちたる月をわびまてるかな*

うたはでたらめ お菓子はたいそう

けつこうにいたゞきました

御禮のみ かしこ

④大正十三年九月二十五日

先だつてのお手紙ありがとうございました。たいへんにむづかしいので学問いたしました。それについて

一つうたがひが起つて来ました。それを書いてよろしい
でせうか。長くなりますからお忙しければ今およみ
下さらないでけつこうです。

わたくしはまるで原始時代の人間みたいのをささない
心を持つてゐますから自分の思つてゐることを人に
いつてしまつて何ともおもはないのです。つまりあの方は

まるであんなにみたいだとかあの方は壁みたいだ
とかあの方は神さまみたいだ（ほめるのではなく）とか

そんな事はどんく風にながれてしまひます。ですから
反対にもし *admiration** を感じたらばわたくしは

あなたをアドマイヤしますとそれに相當したほかの
言葉でそれをいひあらはすことはなんともない事だと

おもつてゐました。もしも二人の人間が一つやどに落ちあつて
ひと月のあひだころよく *entertain** されあつたらば

その禮をいひあつたところであつてふしぎはないと思ひ
ました。今でもさう信じようとしてゐるのですが

さてあなたのリディキュラスのお講義をうけた
まはつて以来すつかりおそれを感じ出しました

あなたのお言葉を定理としてうけいれてさて一つ
心配な事ができました。この世にもつともうぬぼれ

のつよい二人の人たちが二人とも揃つてもつともリディ
キュラスな真似をしたとしてそれを知つてゐる

のは當の二人だけなのです。さうするとその人たちは
自分自身ををかくと思ふと同時に先方でも

自分をわらつてゐるだらうといふやうなおそれを
持ちはじめはしないでせうか。そのおそれが何かの

まぎらかして消化されてしまへば無事です。が
それでなければ互に相手を鬼門として見るや

うになりませう。
さてよの中に鬼門はざらにあることだから一つくら

るよぶんに出来たところで【数文字分抹消】恐れないとお思

ひになりますか わたくしは今のところほかに鬼門

のころあたりは一軒も無いのですから たつた

一軒でもあつたらばさぞ怖いだらうと思ひます

あなたのやうなちゑ者に伺つたらば何かよけと

いふやうなものは教えていたゞけないものでせうか

おそれもかなしみと同じやうに時が経つたらば

ほんやりとした都合のよいものになり得ませうか

それも伺ひたいのです たいそう長くなりました

わたくしはこれから筆の節理を学ぶ必要があります

こないだころから時々本をよみました いろんなものを。

それはあなたからいろいろクレバアな有益な(?)

お話を伺ふくせがついてそれつきりおめにかゝる折

がなくならしましたから これはA氏の代りに本を

友人とすれば同じやうな clever friend が持て

るわけだと思ひついたので す それから新古とり

ませ いろんなものをよみ散らして 一大発見を

しました これはほかの人には用だたない事

なのですが 本には顔がないといふ事を見いだ

したので す 一つ一つに別の顔があるのでせう

けれど わたくしは想像力がたりないので す

顔がないといふことはまるでめくらになつたやう

につまりません またすこしリディキユラスかも

しれませんがかういふ事をあたらしく見いだして

一人でおもしろがつてゐますから書きました

それではふさ子のために証人になつていただきます*

だんだん冷えてまゐりますからくれぐれも御身

御大切にといのります

かつてな手紙おゆるし下さい 早々かしこ

「

九月二十五日 廣子

芥川様 御もとに

「片山広子(二)」

※書簡全五通

⑤大正十三年十月三十一日

芥川様 御もとに 十月三十一日 ひろ子

昨日はお手紙と切符をありがたう ぜひまゐり

たいとたのしみに思つてをります 當日は

七時二十分に東京を立つ人を見おくりまゐ

りますからそれをすましてからまゐります

それゆゑ食事にお待ち下さいませんやうに

願ひます それからもし雨でもふりましてひどく

おさむうございましたら けつして御むりなさいま

せんやうに わたくしは一人でもすこしもかまひま

せん 物たりなくともかぜはひかないやうにきをつけ

てまゐりますから

先だつてあんなに長いお手紙をいたゞいてたいへんに

すみませんでした あなたはお忙しいのですから

けつしてつまらない禮をお守りにならないやうに

くれぐれも願ひいたします つるやのふうちゃん*

にもみぢを見ろといふのなら代りに原稿をかきに

来てくれとおつしやいましたさうですね すつかり

報告がありました わたくしにもそのくらゐの

常談をおつしやつたところで怒りはいたしません

それからいつぞやおそれるといふ事についてつまら

ない事を申あげましたがその後気分轉回

すつかりさつぱりいたしました 鬼門も消滅いたし

「

ことを申し上げたいと思いましたがつひそのまゝになりました つまりわたくし一流のかつてな考へなので
おわらひぐさですが自分が自分をわらふといふ事は
はとくにある人々にのみめぐまれたるもつとも温かい
あまにがい気分の休息であるといふ事に極めて

しまひました 人が自分をわらふといふ事はもしその人
が自分の尊敬する人の場合であれば無線電

話*もちがひますが何かの波動を感じてたいへんに
めづらしい遊戯味のある幸福*にちがひないと

さういふ事にとりきめました それですつかり自信
だかうぬばれだかが返つて来ましたので今後

何處でおめにかゝつたところでのこの代はりもない
お時儀*をすることができるとよろこんでゐました

こんどぜひわたくしの幸福なお時儀を御らん下
さい

それから一つきゝずてにならない事は特殊有閑階
級*とかいふ言葉ですがもしさういふ言葉を考へ

出した人があつたにしてもそれをあなたがなぜお使ひになる
のでせう よる十二時すぎに下の座敷で眞わたを

のばしてゐる叔母さんの話があなたの随筆の中
にありましたがわたくしはその方と親類だと思つて

涙ぐましくも思つてゐましたのに、あの言葉はたいへ
んにしやくにさはりました胃のわるい貴族趣味

のとのさまなんぞとは絶交してしまはうかと思ひました

⑥大正十三年十一月五日

十一月五日 午後

先夜はいろいろありがたうございました* そのせつ

おはなしの戯曲の事くはしく伺ひそこねまし

たがエリザベス何といふ作家でございましたらう

お落手のせつお教へ願ひます

なほ又有楽町でたいへんに悪趣味なことを
申しましたやうにおぼえますがそれはある

としのわかい女がさういふ場合にはさういふ気持
になるだらうといふだけの事で自分の事であり

ませんのでたいへんらくにさういふ事が口から
出ましたのでせう ふだんわたくしは上品ぶつて

ゐる人間ですからそんなやうな突飛な事をくち
にいひ得るはずはないのですがをさないのろくさい

心の反對にひどく先きばしりするわたくしのあた
まが何でも物の極端まで行つて見て来なければ

承知しないのでせうと思ひます さういふ事を
めづらしさを失ふものだと信じてゐましたしかし

もし三越*にたいへんにめづらしい帯があつてそれがほ
しいと思つたら見るたびにほしくなつて切りがない

でせう 見ないであるためづらしさも興味も感じる機
会がないので自然にわすれることができませう

それはただ帯だけの場合にさうでせうか 見るのと見
ないのとどちらがめづらしさを失ふか考へてゐると

ひどくこんがらかつてしまひます 御意見がうかが
へるでせうかわたくしは自分だけの事を考へてさういふ

事を伺ふのです あるひはあなたにもお分りにならない
かもしれませぬ

こんな悪趣味な手紙はどうぞすぐおやぶり下さい*
いま庭の木の葉が散つてたいへんに静かですうちの

中に自分一人だとひどく幸福に感じます
先夜のおわびのみにかしこ

廣子

芥川様 御もとに

⑦大正十四年二月十一日

芥川様 御もとに

ひろ子

きのふ朝お手紙を拝見しました わたくしの

とゆきちがひになつた事とをかしくおもひました
もうおよろしく*どこかにお出かけになるといふ事*

殊にけつこうでございます わたくしも何処かへまゐ
りたく思つてをりましたがいろいろな主婦むき

な用事がむらむら出来いたしてどうにもまだ

うごけません 例を申しますと三年も使つた女中

がよめにゆくのをいやがつて毎日泣いてゐますそこへ

親が毎ばんときおとしにまゐります お金があつて

兄弟がたくさんある家なので當人はお金は

いゝけれど女の兄弟のたくさんあるところへゆくくらゐなら

死ぬ方がけつこうだといふくらゐな決心なのですが

一寸その方が決着するまで見すてゆくのが気のどく

でわたくしまで力をいれてうちにかまへてをります

そのほか妹の病気がますます快方に向いても當分

は六度七八分ぐらゐの熱でも時々死ぬつもりになる

のでわたくしも時々相手にならなければなりませんし

その他の一大事がむやみとたくさんあつてこまつてしまひ

ました

實を申しますとぜひおめにかゝつておはなしいたしたい

ことがありますからもしこの月二十日すぎになつて

わたくしに出かけられましたらどこか御近所まで

でもまゐりたいと思ひます おやどにお落ちつき

になつて何時ごろまで御滞在をお分りでしたら

一寸おしらせ下さい とてもこの月出られませんでしたし

たらまた来月の事にいたします しかし女中が

死なゝいでおよめにゆくとなほさら出られないと思つて

悲観します

おはなしと云つてもむづかしい事ではなく、この月
はじめてひどく不思議なゆめみたいなのを*

見たのです、ただのゆめでなくゆめみたいなもの

でした それをだれかにお話したくてたまりませんけれど

あなたや菊池さん*みたいな小説家でなければ

はなしてもつまらない事なのですからがまんしてゐます

この夏ぐらゐまで待つてゐたらば*だんく消えて

しまひさうにも思ひますそれで實はたいした

親切心からそのお話をきかせてあげるためには

熱海沖津*どころではなく京都や長崎までも

まゐりたいくらゐに思ひます ぜひくおきき下さい

それではもし今月だめでしたら来月、それもだめ

でしたらまたそのつぎの月ぜひおめにかゝりたく

思つてをります

お大事になさいまし
二月十一日夕

⑧大正十四年六月一日

六月一日午後三時

なほく、メリメエの手紙*とかおよみのよろしく

おたのしみな事と存じます 無学なものは日本人

の手紙しかよめませんこのごろよみました日本人の

手紙*つまりませんでした 短かい文の中にど

うしたことかアタミアタミアタミと書いてありま

したアタミにどういふ恨があるのか只今とり調

べ中です

昨日いただいたお手紙はあまり皮肉でした何のため

にわたくしごとき善良な人間にそんな根性わる

の外國の人たちのはなしをおきかせになるのです

わたくしがクリスチャンなら泣いておいのりして神よ

この友だちにすなほな心をあたへたまへといふでせう

わたくしが歌人なら十首ぐらゐうたをよみませう
どちらでもないわたくしはだまつて手紙をにらみ

つけました あの手紙はアタミよりよつばどのばせました
先頃修善寺からお書きになつた時*東京にかへれば
いそがしくて手紙を書いてはゐられないから…と
ありましたこれは此方から手紙をあげてもわ

るいのだらうとお察しいたしてお禮状さへ書かず
にがまんして失禮してゐましたそれをきつと
何とか奇妙におとりになつたのでせうどのくらゐ
努力してふで不精にしてゐるかお分りですか

あなたのやうな方はそのメリメエの友だちとかいふ人
とおつきあひなさるとようございます*

それからアタミには渡辺とめ子といふ後家さんが
ゐますがこれはたいそうあなたを崇拜してゐる人
ですからもういちどアタミとおつしやればすぐに

渡辺さんを誘つてあなたのおうちを御訪問いたし
ます 夫人は大山さんの令嬢であのほととぎす

の浪子*の妹です 西洋人たちの中では神さまとそれ
から藝者との中間ぐらゐに大事にされてゐます

日本人の中でもこの人のチャーム*をふせぎ得る人はない
でせうと思はれますあまり物騒なので御遠

りよ申してゐましたけれどもし「あの字」を又
おつしやるやうなれば明日にも countess*は同伴
おたづね申上げます

日本人の手紙だけよんでそれで満足してゐるもの
のためにはもうすこし意地わるでない、ためになる、手紙を
お書き下さい わたくしだけ怒つてのばせてゐても
つまりませんからあなたがお怒りになりさうな事
を書きたいと思ひましたが心のよいものはどうして
もわるい事は書けませんこれはきつとわたくしが

始終おいのりをしてゐるためでせうと思ひます

いづれそれではおめにかゝつて
けさのしんぶん*にあなたと菊池さんがたいそう御にこやか
におうつりになつてゐましたアタミなんぞよりの
くらゐおたのしみな文でせうか

ひろ子

龍之介様 御もとに

⑨大正十四年六月二十四日

急に手紙をあげることを思ひ立ちました犬養さんが*

渡辺とめ子さんの命のためにあなたのお出席を願ひに*

おいでになりましたらうかもしおいでになりましたらせひ
おききいれ下さい 渡辺さんのためにもわたくし自身のた
めにもお願ひします

先だつて非常に不愉快な気分の方に自制心がなく
なつて不愉快な詩をおめにかけた事をすまなく思つて

をります 自分の気持がどんなであつてもそのために
あなたのお気持まで不愉快にする必要はなかつた

のですが、ただその時わたくしは支那人*になりたいたさへ
おもふほどに悲観してゐたのでした

わたくしほどに自尊心のつよい人間が支那人になる事を
祈つたと想像して御らんになつてあの不愉快な詩を

おゆるし下さい ちひさいお子さんがたにおめにかゝつた時
にあなたのおぐしの一すぢもあのお子さんがたのためには

全世界よりも大切なものだとしみじみおもひました

さうおもひながらあなたのお心持をいためるやうなあんな
詩を考へた事はわたくしもよほどめぢやな人間です

すべて流していただけるものなら流していただきたいとお
もひます そしておわびをいふ機会をあたへていただければ

うれしいとおもひます いまわたくしは非常にじりじり

してゐますこんな気持では死ぬのもはぢです生きる
のもはぢです一日も早くほんたうの老年の静かな心が
来るやうにそればかりをいのりませ 軽井澤でおめに
かゝつてゆつくりいろいろなお話を申し上げたいとそればかり
考へてをりましたがけふはそんなに遠いことを考へてゐられなく
なりました明日を待たずに今夜この手紙をかく方
がいゝやうにおもひましたから書きます
なほまたわたくしからお願ひした事は犬養氏にはない
しよに願ひますさきまはりしたと思はれる事は
つらうございますから

六月二十四日夜十時

ひろ子

龍之介様 御もとに

「片山広子(三)」

※書簡全五通、歌稿、短文

⑩大正十四年八月三十日

出立の時あまりあわてましたので みなさんが
おわらひになつたらうと思つてあとではすこし
恐縮いたしましたしかし何もながくは考
へてゐられないほどあつうございましたうつらく
ゐねむりしながら帰つてまゐりました帰つてか
らも 今年はじめの夏の気持にあつう
ございますこのあつさはまだ中々つゞきませ
うからなるべくゆつくりそちらにおいでなのやう
おすゝめいたします
いまちやうど二時半ぐらゐる庭のせみの聲がや
かましくて机のそばの時計の音もすこしもき
こえませんしかし庭の樹のかけはやつぱり
自分のうちのせるか 静かな気持がしてうれ
しうございます

今朝電話で一寸の間望翠楼とはなしを

しましたその時の話では先だつての高島屋の
内見には菊池さんもよばれていらしたさうです
さうして見ると菊池さんの方が逃げたあなた
よりは 晶子さんに親切のやうにおもひます
そんな事はいつでもかまひませぬすゝしくなつた
らおめにかゝつてまたむだばなしをさせていただ
きます 先日途中でゐねむりをやめて一首
よみました「しらぬ間に月のあかるき夜と
なりて山なきくににいまかへり来し」「いや
はてに浅間の山をかへりみてうつし身をたま
ははなれゆきけむ」
電話ではおはなしが出来ないでもお手紙がいただ
きたいとおもひます 八月三十日午後

芥川様 御もとに

ひろ子

⑪大正十四年九月二十九日

九月二十九日

こなひだはお手紙をありがたう ちやうどその前日
あたりうたをおめにかけたが* 御落手下さい
ましたかしら ひらき封なのであるひはくづかごに入
れておしまひになつたかもしれないとおもひます ど
の雑誌にも出さうとおもひませんでしたもうすこしほん
にしろうとになり切ればよいのですがまだくさいところ
がたくさんありましたからただふさ子女史に批評を
たのんだだけでした
堀口、岸田両氏の訳文よりもわたくしのゝ方が上品
だといふおはなし上に鼻をたかくして教授にかけ
るつもりでしたがあいにく一人は房州一人は小石川

の久世山とかに越してしまひました

それから三上氏*におくつた本があなたのお手許まで廻つ

ていきました由わたくしは鮭の禮にもみかんの禮

にもあるひは山のいもの禮にも本を贈りました

(シング*だけは送らなかつたやうです) 今後も

どんなところにわたくしの本があるか分かりません

よそにおつしやるひまになぜわたくしにおつしやらな

いのだらうとすこしおうらみに思ひます但し三上氏

にはお菓子や山のいもの禮でなくモントクリストの

禮に送つたものとおもひます

先夜わたくしのゆめにオバルチン*が現はれてぜひ

ぬれぎぬをほしてくれといひましたジンマシンは

おいしいのみものから来るものでなくうつるものですタロ

から傳染したのださうです

けふゆくりなく聖書*の中でひどいことを發見しました

ソロモン*ほどの人がひどいことをいふと思つてふんがいし

ました(わがなほ尋ねて得ざるものは是なり、われ

千人の中には一箇*の男子を得たれども、その数の中

には一箇の女子をも得ざるなり。傳道の書七二八)

あんなに三千人からの女の世話になつたくせにずるぶん

不親切ですね、ソロモンよりはダビデ*の方がすぐれて

ゐます女と神さまとを大切にする点に於て

病人のために病院まはりをして一兩日ひどくつかれました

芥川様 御もとに

⑫大正十四年十一月十一日

龍之介様 御もと

ひろ子

けふのやうに雨がふり木の葉が散る日に庭

を見てゐますと句のできないのが残念にな

りますその代りに手紙をかくのをもかしいや

うですがそんな事を云つて手紙をかきます

このごろもうすつかりおせきはおなほりになり

ましたか 昨夜九條夫人の芝居を見物させ

られました蓮月*のすまゐがたいそう静かであうら

やましく思ひましたしかしあの草屋にすめと

いはれてもひとり御飯*ごしらへができませんれば*

それほど幸福でもあるまいとなにかにつけても

めんどくさい自分をきのどくがりました かへりみち

道ぶしん*のためにまはりみちをしました 去年の

今ごろ歩いたことのあるみちでした ゆうべはあたたか

でした 一人で歩きながらたつた一年のあいだに一

世紀もとし老いたやうな気がしました 知ると

いふ事ほど人をとしよらせるものはありませんね

わたくしはもういちど百年前の秋の夜にかへる

ためにはいのちも何もかもすてたく思ひながら歩き

ました ひどく感傷的な気持ではなかつたのでした。

あなたのおつしやつたあのグリーンアイド、モンスタア*に

わたくしもいろんな事を教へられましたよ それまでは

計算ちがひをしてゐたのでしたそれまでわたくしは十二

のものを人に與へたいとおもふ時自分だけ與へて満足

できると思つてゐましたが モンスタアの教へによつて

自分が人に與へようとするだけのものを人からも求めてゐる

といふ事が分りましたそれですらどうしてあんなに不愉

快になりませうそれと同時にモンスタアでないものが教

へてくれました。人から十二あるひは十のものを要求する

のはその人をほろぼすものだ。わたくしはさむくなつて

一度に一世紀もとしりました。かはいさうに去年から

自分で考へてゐた事は一種の慈善事業だつたと思

ひましたらひどくすまなくなりました その後うたは

できません 追分にゆかないので、残がないのでやめます

十一月十一日

支那遊記はまだ出ませんね。

わかい人が書いた文のおけいこみたいなこんな手紙は紙くづかごのそこにあることさへもはぢます 俳句の代りになりませんもの。あなたは常識家でいらつしやるからもつといゝところに沈めて下さるでせうね

⑬大正十四年十二月八日

こなひだは「支那遊記」をありがたうござ

いました ふさ子に先きによまれたもの

ですからつひお禮を申おくれしてしまひました

先夜堀さんが見えて皆さまお丈夫との事

うかゝひましたまだ小説でおいそがしうござい

ませう けふめづらしく静かな心持でうちに

をりますのでとりあへずいろけのみ申上げます

十二月八日

あらゝかしこ

廣子

芥川様 御もとに

⑭大正十四年九月二十五日(?)

先だつてからおちつくひまもなく追ひまは

されてくりましたのでお見まひも申上げ

ませんでしたその後如何でいらつしやいま

すかたいていおよろしうございますか

つるやのタロチャンがジンマシんとかいふのをやつて

ひどくかゆがつてゐましたからたぶんあれを

ひきうけておいでになつたのかとおもひます

さう思ふとすこしをかしくなりました こん

な事をお見まひに書くのは失禮なのですが、

こなひだ堀さんが見えてのおはなしでは

だいぶその後もおいそがしかつたさうでだぶん

もう軽井澤もおこりになりましたせうとおも

ひます あれからわたくしはあんまりあつのおも

ひをしましたのでこの夏からもう何年も経つた

やうな気がします

信州のうたすこしお見まひにおめにかけます

先日ある人にこのなつのうたですと云つて見せ

ましたところうたといへるのはまづ一首しかない

いはれましたので大にがつかりしてしまひました

しかししろうとはなんでも愉快になつてゐさ

へすればいいのだとおもひました

小石川の方の病人がまだそのまままきまりがつきま

せんで電話になやまされてくらしをります

なにか愉快な事でもございましたらおきかせ

下さいまし それではどうぞお大事に

御見まひまで

九月二十三日

早々

芥川様 御もとに

ひろ子

⑮追分のみち

追分のみち*

沓掛の橋わたるとき見る川はうづまき泡だ

つにごり水なり*

しみじみとわれは見るなり午前あさの日のひか

りさだまらぬ浮洲うきすのなつぐさ*

とほ山にしろき巻ぐもたちなびきけさの朝
かぜにすみたる秋ぞら*

「 1

ただ一羽つばめのとぶを見たりけり車はし
りて杳掛をすぐ*

草土手の花ぐさの中のしろひつじほそき眼
をしてわれらを見たり*

はろかにもさびしくありけり浅間嶺は知る
らめやけふのわれらのころ*

「 2

かげもなくしろき路かな信濃なる追分のみ
ちのわかれめに来つ*

遠きやま空にかさなる信濃路のいづくにも
蝉のこゑなかりけり*

われら三人影もおとさぬ日中に立つて清水
のながれを見てをる*

「 3

しづかにもまろ葉のみどり葉うつりたりこ
れは山路とおなじことをいふ*

土橋わたる土橋はゆらぐ草土手をおり来て
みれば野びろし畑は*

さびしさに壓されてひとは眼をあはずもろ
こしの葉のまひる日のひかり*

傘さしここに待つなり油屋のふるきかど出
でて人来たるかと*

「 4

日のてりに路ねむるなりみちなかの馬糞の
うへの青き蝶のむれ*

四五本の樹のかげにある腰かけ場ことしも
きたり腰かけて見る*

しろじろとうら葉のひかる木々ありて浅間
のかぜに吹かれたるかな*

「 5

ひとびとは言ふこともなくながめたり村の
なかよりひるの鐘鳴る*

友だちら別れむとして草なかのひるがほの
花を見つけたるかな*

「 6

なほこのほかに馬のうたが二首ありまし
たがどうもおちつきがわるくもつと考へるこ
とにいたしました

「 7

五、注釈

【凡例】

・四に掲出した翻刻のなかで、右下に「*」を付した語句について適宜注釈をつけた。

・注釈の作成にあたって使用した引用文献および参考文献については、巻末に記した。注のなかで文献名の略称を用いているのは、「日国」(『日本国語大辞典』)、「全歌集」(『片山廣子全歌集』)である。各参考資料の詳しい情報については、巻末の引用文献および参考文献の一覧を参照されたい。

【書簡①】 大正十三年九月一日

わたくしたちは二十八日のあさひき上げて： この年の片山廣子一家は、

七月二十七日～八月二十八日までつるや旅館に滞在していた(大正十三年

七月二十八日付室生犀屋宛芥川龍之介書簡参照)。

假宿の地所の事 假宿は現在の軽井沢町長倉借宿。中山道追分宿と沓掛宿の間にあり、宿場町の面影を残す。

室生犀屋宛芥川龍之介書簡 (大正十三年八月二十六日付) には、「追分の近く仮宿と云ふ所に坪一円五十銭の地所あり林間の地にて、もしよければ山梔子夫人も買ふよし僕も買ふ気なり君は如何」と書かれている。

「山梔子夫人」は室生犀屋と芥川が密かにつけた廣子のあだ名。実際には地所の購入は実現しなかったようである。

孝一氏 未詳。

不二男氏 つるや旅館主人の佐藤不二男氏。遺稿集『軽井沢物語』(軽井

沢書房、昭和五十一年)がある。

追分へおさそひ下すつた時 追分は浅間山南麓の標高千メートルの地で、

中山道と北国脇往還の分岐点(追分け)にあたる。かつて浅間三宿の一つとして栄えた追分宿があった。明治以降は、軽井沢のように新しく避暑地に再開発されることもなく、また、中軽井沢の沓掛宿のように温泉地や観光地となることもなく、信越線が宿場から離れたところに敷設されていることもあって急速に寂びれ、ひっそりとしていた(小川和佑『文

壇資料 軽井沢』参照)。

室生犀屋宛芥川龍之介書簡(大正十三年八月十九日付)には、「けふ片山さんと『つるや』主人と追分へ行つた非常に落ついた村だった北国街道

と東山道との分れる処へ来たたら美しい虹が出た」とある。なお、この虹のエピソードは、堀辰雄の小説『物語の女』に取り入れられている。同日付

の小穴隆一宛書簡には、「もう一度廿五才になつたやうに興奮してゐる事によると時候のせるかも知れない。事によると、何か書けるかも知れない」とある。八月十三日の碓氷峠への月見行き(この時は、芥川、廣子・總子母娘、犀屋、つるや主人が同行。自動車で行った)に続いての外出である。

なお翌十四年にも、廣子と芥川は仲間とともに追分に遊んでおり、その時のものと思われるエピソードが片山廣子「芥川さんの回想(わたくしのルカ伝)」(『婦人公論』昭和四年七月号)につづらられている。歌稿⑤はこの時のことを詠んだものと思われる。

お帳場 商店、旅館、料理屋などで帳付けや勘定をする所。勘定場(日国)。

【書簡②】 大正十三年九月五日

二十三日におわかれする時 室生犀屋宛芥川龍之介書簡(大正十三年八月

二十六日付)から、芥川が八月二十三日に帰京したことがわかる。同書簡には「軽井沢土産は男もち麻の手巾一打、(中略)その外は何やらわからぬ愁心のみ」と書かれている。

つるや 江戸時代初期に中山道軽井沢宿の旅籠として創業した老舗旅館。

旧軽井沢銀座通りに面しており、明治末以降、多くの文学者たちが滞在した。廣子一家は大正十一年頃から夏の避暑地として軽井沢を訪れており、昭和六年頃につるや旅館裏手に別荘を購入するまでは、つるやを定宿としていた。大正十三年は七月二十七日～八月二十八日、翌年は七月三十一日

～八月二十八日までつるやに滞在(大正十三年七月二十八日付室生犀屋宛芥川龍之介書簡、大正十四年八月十二日付佐佐木信綱宛片山廣子書簡および同年八月三十一日付山川柳子宛片山廣子書簡等参照)。芥川は大正十三年七月二十二日～八月二十三日、翌年は八月二十日～九月七日までつるやに滞在。その間、室生犀屋、堀辰雄、萩原朔太郎らとの親しい交流があった。

昭和四十六年の火災で焼失する前のつるや旅館の建物には、芥川が残した落書きがあったといい、滞在中の様々なエピソードが伝わっている。

子供たち 片山達吉と總子。この時、長男の達吉は東京帝国大学法学部在

学中の二十四歳。長女の總子は聖心女子学院在学中の十七歳。達吉のち

に吉村鐵太郎のペンネームで、總子は宗瑛のペンネームで文筆活動を行った。昭和四十六年の火災で焼失する前のつるや旅館の建物には、芥川が残した落書きがあったといい、滞在中には様々なエピソードがあるという。

星がひくいところにたいそう赤く見えました 芥川が大正十四年三月に『明星』に発表した「越びと」旋頭歌二十五首のうちの一首に、「秋づける夜を赤赤と天つたふ星、東京にわが見る星のまうら寂しも。」という歌がある。

もみぢの部屋 つるや宿泊時に芥川が泊まった部屋のうちのひとつ。廣子の歌集『野に住みて』（昭和二十九年）には、「しろき蛾―つるや旅館、もみぢの部屋にて」の題で六首の歌が収録されており、うち一首には「亡き友のやどりし部屋に一夜寝て目さむれば聞こゆ小鳥のこゑこゑ」と詠まれている。

ステッキ 芥川が愛用していたステッキ。

みすゞあめ 明治末頃から売られている、長野県名菓の果汁入り乾燥ゼリー菓子。株式会社飯島商店の商品。

二十八日帰つて来ましたら 廣子がつるや旅館から八月二十八日に帰京したことがわかる。

文藝春秋の小説学の講義 文藝春秋社は大正十三年九月、翌年五月にかけて『文芸講座』全十四冊を編集・発行した。芥川は「文芸一般論」と「文芸鑑賞講座」を合わせて八回にわたり掲載している。本書簡が書かれた時期と発行日が近いのは、大正十三年九月二十日刊行の第一号に掲載された「文芸一般論」第一回、同年十月十日刊行の第二号に掲載された「文芸鑑賞講座」第一回。

むかしソロモンといふえらい人のところへシバの女王が… 『旧約聖書』

「列王記上」第十章、「歴代誌下」第九章に見られる、シバの女王がソロモンの宮殿を訪ねた説話を指す。ソロモンの名声と国の繁栄の様子を聞き、宮殿を訪ねたシバの女王は、壮麗な宮殿を見て目を見張る。難問を用意して彼の知恵を試そうとする女王に対し、ソロモンはすべての問いに答えた。女王は彼に感服して多くの贈り物をし、ソロモンも返礼に財宝を贈り、女王は帰国したという。『旧約聖書』にはここまでしか書かれていないが、

後世には世界各地でさまざまな伝説が作られ、シバの女王訪問の場面は絵画にも描かれている。

芥川龍之介が昭和二年に発表した「三つのなぜ」のうちの「(二)なぜソロモンはシバの女王とたつた一度しか会はなかつたか？」の内容には、本書簡に書かれた話題のほか、ソロモン王が多くの妻妾を有していたこと（大正十四年九月二十九日付の廣子の書簡⑩を参照）、ソロモンが作ったとされる雅歌（『旧約聖書』「雅歌」各章）のことも関わっており、作品の成立には廣子の示唆が関わっていることをうかがわせる。

作中のソロモンには芥川自身の姿が、「珍しい才女」とされるシバの女王には廣子の姿が投影されていることが指摘されており（吉田精一「芥川龍之介の恋人」、同じくソロモンとシバの女王の話にふれる片山廣子の随筆「乾あんず」（昭和二十三年九月に『美しい暮しの手帖』第一号に発表、「燈火節」所収）の記述と併せて読むと興味深い。ソロモンとシバの女王のモチーフは、廣子と芥川の関係を象徴する話として重要な意味をもつようである。

あなたは今まで女と話をして倦怠を感じなかつたことはないとおつしやいましたが 「わたしはどんなに愛してゐた女とでも一時間以上話してゐるのは退屈だつた。」（芥川龍之介「侏儒の言葉」）。一方、「三つのなぜ」では、「ソロモンはかの女と問答をするたびに彼の心の飛躍するのを感じた。（中略）彼は二度でも三度でも、――或は一生の間でもあの威厳のあるシバの女王と話してゐたいのに違ひなかつた。」とあり、「珍しい才女」であるシバの女王は特別な存在として描かれている。

カマハラ氏 蒲原春夫（一九〇〇～一九六〇、小説家）か。長崎に大正八年、十一年と来遊した芥川と親しくなり、同郷の渡辺庫輔とともに上京。芥川邸の近くに住んで書生のような役割を果たした。芥川の死後は長崎に帰郷した。

書簡③ 大正十三年九月二十三日

こんなとんきよな紙 「頓狂」は、だしぬけで（間がぬけて）調子はずれであるさま。書簡②までは鳥の子色のやや厚手の紙を使用しているが、書

簡③はやや黄色味がかつた薄卵色の薄手の紙（無地）を使用している。書簡④も同じ紙を使用。

お約束の御本 九月十七日には新潮社から芥川の随筆集『百艸』が、去る七月には同社から短編集『黄雀風』が刊行されている。東洋英和女学院に寄贈された廣子の旧蔵書のなかには、献辞・署名入の両書がある（『東洋英和女学院史料室だより』No.67参照）。

十月号改造の犀星老の明文 『改造』大正十三年十月号に発表された室生犀星の随筆「碓氷山上之月」をさす。大正十三年八月三日〜十四日の軽井沢での日常風景を描いたもので、予（犀星）、澄江堂（芥川）、松村さん（廣子）、お嬢さん（總子）、坊ちゃん（達吉）、堀辰雄らが実名で登場。のちに『魚眠洞随筆』に収録されて大正十四年に刊行。

ふさ子 廣子の長女・總子（一九〇七〜一九八二）。昭和三年から宗瑛のペンネームで『山繭』『文学』等に小説を発表。官僚（のちに実業家、アイヌ地名・文化研究家）の山田秀三と昭和八年に結婚し、文筆活動から離れた。

室生さん 室生犀星（一八八九〜一九六二）。犀星は大正九年から、貸別荘に移る十五年まで毎夏つるやに逗留。同じ田端に住んでいた芥川とは大正七年から親交があった。廣子とは軽井沢で大正十二年から話をするようになる（「碓氷山上之月」）。つるやでの芥川、廣子らとの交流の様子は、廣子の随筆「黒猫」にもうかがうことができる。犀星と廣子の交遊は、芥川や堀辰雄の没後も続き、昭和二十九年に刊行された廣子の第二歌集『野に住みて』には犀星が帯文を寄せている。

おゆきさん 「碓氷山上之月」に登場する女中・お雪と同じ人物か。色白で白い浴衣を着ている彼女に、犀星と芥川は「百合」のあだ名をつけた。叱られて泣いている姿が繰り返し描かれる。

おかあさま 「かみなりはやまなかつた。稲光りがするごとに松村さんのお嬢さんが、『おかあさま、大丈夫？』」怕さうにさう言った。（室生犀星「碓氷山上之月」）

かあさんにだきつくなんてきざなまね 「峠へは登り道ばかりで、松村さんは少し着い顔をして、『恐うございますね。』と言った。お嬢さんは十七

であるのに、お母さんにしつかり抱きついてゐた。」（「碓氷山上之月」）
金沢へはがきを書く 大正十二年九月の関東大震災後、犀星は同年十月から十三年末までの間、金沢に転居していた。

もみぢの家にすむ人 つるや旅館のもみぢの部屋に芥川が宿泊していたことからの連想か。

満月といへる菓子 京都の和菓子屋「満月」では、明治初期から「満月」という名の菓子を販売。明治三十三年には九條家御用達となった。同店の商品として阿闍梨餅が有名。芥川は大正十三年九月十二日付の室生犀星宛書簡で、京都旅行の案内を書き送っているが、これと関係があるのだろうか。

ちなみに、廣子が最初に取り組んだアイルランド文学の翻訳は、グレゴリー夫人の「満月」である。

やがて来む… 満月を題材に詠んだ、『全歌集』に未収の歌。

書簡④ 大正十三年九月二十五日

admiration 賞賛

アドマイヤ 感嘆すること。賞賛すること。

もしも二人の人間が一つやどに落ちあつて… この年輕井沢つるやに芥川と廣子が約一か月間同宿したことを指すか。

entertain もてなす。接待する。

リディキュラス ばかげた。滑稽な。途方もない。

片山廣子宛芥川書簡（大正十五年二月八日付）にも「リディキュラス」の語が登場する（「何を書く気も何を読む気もせず、唯徳富蘇峰の織田時代史や豊臣時代史を読んで人工的に勇気を振り起してゐる次第、何とぞこのリディキュラスな所をお笑ひ下さい。」）。

この世にもつともうぬぼれのつよい二人の人たちが… 廣子と芥川を指していると思われる。

鬼門 行くのがいやな所。一般的に、その人にとっていやな、苦手な人・場所・事柄についてもいう。（日国）

何かよけといふやうなもの 魔除け、厄除け、お守り、お札等の類。

節理 物事の道理。ことわり。すじみち。(日国)

本をよみました 廣子の旧蔵書は、洋書が日本女子大学、和書が東洋英和女学院に寄贈されている。

A氏 廣子は芥川について、随筆「芥川さんの回想(わたくしのルカ伝)」で「A氏」、随筆「黒猫」で「Aさん」と書いている。

clever friend 芥川を指す。
ふさ子のために証人になっていただきます 書簡③を参照。

書簡⑤ 大正十三年十月三十一日

切符 書簡⑥の内容から考えると、観劇のチケットのことか。

ぜひまゐりたいと… 書簡⑥から、十一月四日頃に有楽町方面と一緒に出かけたことがうかがえる。

つるやのふうちゃん 未詳。

常談 「冗談」に同じ。

いつぞやおそれるといふ事について… 書簡④の内容をさすと思われる。

無線電話 空間に発射された電波を用いる通信。日本では、大正元年に通

信省技師の鳥潟右一らがTYK式無線電話機を発明し、大正五年には日本

初の公衆無線通信が開始された(世界大百科事典)。大正十二年には三越

で無線電話の実験が行われている。

遊戯味のある幸福 「遊戯味」は造語か。なお、廣子の随筆「迷信の遊戯」

(『文化生活』大正十二年一月号に発表)では、おみくじを引いて楽しむこ

とを「遊戯」と表現している。また、自身の翻訳書『いたづらもの』(シ

ング著)の註解・あとがきのなかで、Playboyの語訳を「いたづらもの」

と表記するか、「遊戯児」に「プレイボーイ」とふりがなをつけて表記す

るかで苦心したことを述べている。

お時儀 大正十二年十月の『女性』に発表された芥川の小説「お時宜」(後

に「お時儀」の題で『黄雀風』に収録。大正十三年七月刊行)をふまえた

表現か。内容は、主人公堀川保吉が、とある避暑地の停車場で見かけるお

嬢さんと交わしたお時儀をめぐる話。

特殊有閑階級 「有閑階級」は、多くの資産があつて、生活のために職業

につく必要もなく、閑暇を趣味、娯楽などで費やしている階級(日国)。
文脈から、芥川が廣子を評して用いたと考えられる。

よる十二時すぎに下の座敷で眞わたをのぼしてゐる叔母さんの話

大正十三年二月の『女性』に発表された芥川の随筆「霜夜」を指す。深夜に仕事を終えて階下に降りていくと、霜の降りる寒さの中、伯母フキがいまだ起きて古い綿を伸ばしていた。最後にその光景をもとに詠んだ俳句が添えられた作品。

芥川の実母フクの姉であり、養父道章の妹であるフキは、芥川にとつて伯母にあたる。実母フクの発病後、フキは母親代わりとなって芥川に愛情を注いだ。大正八年三月以降、龍之介・文夫妻は田端の芥川家に帰り、養父母および伯母フキと同居していた。

胃のわるい貴族趣味のとのさま 芥川の主治医・下島勲は、芥川の持病として、胃アトニー、痔疾、神経衰弱を挙げている。なお、芥川の書簡には、胃腸不良のことがたびたび書かれている(大正十四年二月二十一日付清水昌彦宛書簡、大正十五年二月八日付片山廣子宛書簡等)。

書簡⑥ 大正十三年十一月五日

先夜はいろいろありがたうございました 書簡⑤に書かれている内容と関連すると思われる。

戯曲の事／エリザベス何といふ作家 未詳。

有楽町で… 戯曲の話題が出ていることから、有楽町界限で観劇をしたのではないかと推測される。十一月三日～五日にかけて、帝国ホテル演芸場

では、岸田國士作の戯曲「チロルの秋」が上演されている(伊沢蘭奢主演、新劇協会。『近代日本芸能年表上』参照)。

ちなみに帝国劇場では、帝劇改築記念興行として、史劇「神風」、浄瑠璃「紅葉宴衛士白張」、世話劇「両国巷談」、「梅蘭芳支那劇」(十月二十五日～十一月四日)が上演されている(帝国劇場100年のあゆみ)参照)。

三越 明治三十七年に日本初の百貨店となった三越呉服店は、大正三年には日本橋にルネッサンス様式地上六階地下一階の新館を構え、東京の都市文化を牽引する存在となる。「今日は帝劇、明日は三越」の宣伝文句は有名。

なお、大正二年に三越呉服店が開催した文芸コンテストに、廣子は松村みね子の名で小説「赤い花」を応募し、一等当選している（大正三年刊行の作品集『文藝の三越』に収録）。作品中には、三越で振袖や帯などの婚札衣装をあつらえる場面が描かれる。

こんな悪趣味な手紙はどうぞすぐおやぶり下さい　書簡⑫にも類似するところが書かれている。

書簡⑦　大正十四年二月十一日

わたくしのとゆきちがひに：　書簡⑥（大正十三年十一月五日）と書簡⑦の間に、手紙のやり取りがあったことをうかがわせる。

もうおよろしくて：　芥川は大正十四年一月下旬から二月上旬まで、感冒のため床にしていた（一月三十一日付室生犀星宛芥川書簡、二月十四日付和氣律次郎宛芥川書簡等参照）。

どこかにお出かけになるといふ事　芥川からの書簡に、どこかに静養に出かける旨が書かれていたということか。

妹の病氣　「若い時から中年までの私の仕事はおもに病氣と闘ふことであつたから（自身の病氣でなく、良人の父の病氣、良人の長い病氣、義妹の長い病氣、義弟の病氣、それにもなふ経済上の努力、私はまるで看護婦の仕事をしに嫁に来たのだと、それを一種の誇りにも思つて殆ど一生そんな方面の働きばかりしてゐた。）」（片山廣子「地山謙」、「燈火節」所収）ひどく不思議なゆめみたいなもの　未詳。

菊池さん　菊池寛（一八八八～一九四八）。早くからアイルランド文学に傾倒していた菊池は、大正六年に『時事新報』の記者として翻訳家・松村みね子（片山廣子）を訪ねた。以来親交は続き、廣子は翻訳やアイルランド文学について菊池に相談していたという。菊池は大正十年刊行の廣子の翻訳書『ダンセニイ戯曲全集』には序文を寄せている。廣子は随筆「菊池さんのおもひで」（『燈火節』所収）を書いている。

また菊池は、第一高等学校で同級だった芥川と長年の友人であり、長男比呂志の名前は菊池の名前「寛」からつけたという。芥川の葬儀の際には友人総代として弔辞を読んでいる。昭和十年には「芥川龍之介賞」を創設。

この夏ぐらゐまで待つてゐたらば　夏に軽井沢のつるや旅館で会うまで待つていたら。

沖津　静岡県清水市の興津。古くは息津・沖津・奥津とも書いた。興津宿は東海道の宿場町で、古くから交通の要衝であった。南を駿河湾に面する。当地で東海道から分岐し、身延道も通っていた。明治四十三年一月十三日付の佐佐木信綱宛書簡には、廣子が子ども連れて興津に行っていたことが書かれている。

もし今月だめでしたら来月：　芥川は二月、三月とも忙しくて出かけられなかった。四月十日になって病氣療養のため修善寺温泉に赴き、新井旅館に五月三日まで滞在した。この間、室生犀星宛の四月十七日付書簡に、廣子のことをよんだと思われる詩二篇を同封している。

書簡⑧　大正十四年六月一日

メリメエの手紙　プロスペル・メリメ（一八〇三～一八七〇）はフランスの小説家、歴史家、考古学者、言語学者、官吏。作品には『コロンバ』『カルメン』、書簡集『未知の女への手紙』（『知られざる女性への書簡集』『ある女への手紙』とも）などがある。メリメに強い関心を持っていた芥川は、作品中で言及することも多く、作品への影響関係も指摘されている。メリメの書簡集はいくつか刊行されているが、ここでいう「手紙」は、『未知の女への手紙』（芥川は『誰かわからない女に宛てた恋愛書簡集』と訳出）を指すと思われる。これはメリメが一八三二年から一八七〇年にかけてある女性にあてて書いた三三三通の書簡集であり、「手紙の形式を借りた美しい小説」（岩波文庫版『ある女への手紙』の江口清氏の解説）との評がある。芥川は「文芸的な、余りに文芸的な」の「十八　メリメエの書簡集」のなかで、書簡集に書かれた二つの挿話を挙げて論じ、また小説「歯車」の第四章では、カフェで『メリメエの書簡集』を読む場面を描き、彼の小説と同様に閃く鋭いアフォリズムを書簡集のなかに見出し、「この影響を受け易いことも僕の弱点の一つだった」と書いている。

なお、堀辰雄「聖家族」には、主人公河野扁理が、亡くなった九鬼の蔵書であるメリメの書簡集に、女の筆跡らしい手紙の切れ端が挟まっている

のを発見する場面がある（のちに細木夫人の筆跡であることが暗示される）。河野は堀、九鬼は芥川、細木夫人は廣子をモデルにしているといわれる。

このごろよみました日本人の手紙 未詳
先頃修善寺からお書きになった時 芥川は大正十四年四月十日から五月三日まで修善寺温泉の新井旅館に滞在。

そのメリメエの友だちとかいふ人 『未知の女への手紙』でメリメエが手紙を書いた相手であるジェニイ・ダカン（ジャンヌ・フランソアーズ・ダカン、一八一〜一八九五）を指すと思われる。文学好きで英語・ドイツ語・ギリシャ語にも通じた才媛であったが、「学問を鼻にかける点や、理屈っぽさや、皮肉ずき」はメリメエにとって好ましくなく、「気まぐれと自尊心からくる彼女のコケツトリイは、しばしばメリメエをひきずりまわし」悩ませたという（岩波文庫解説）。

渡辺とめ子（一八八二〜一九七三） 詩人、歌人。陸軍大将大山巖の四女。明治三十四年に銀行員の渡辺千春と結婚したが、大正七年死別。のち「心の花」に加わり、片山廣子のすすめと資金援助により、山川柳子、村岡花子らと昭和三年に『火の鳥』を創刊。筆名は竹島きみ子。

大正十四年七月の『文化生活』第五巻第七号に、廣子は短歌「一つのつばめ（熱海に渡邊夫人を訪ふ）」十二首を発表している。

あのほととぎすの浪子 空前のベストセラーとなった長編小説「不如帰」は、徳富蘆花の名声を確立した作品。主人公浪子は、陸軍中將で子爵である片岡毅の長女であるが、大山巖の先妻の娘信子をモデルにしたとされている。

チャーム 魅力
Countess 伯爵夫人。渡辺とめ子を指すか。
けさのしんぶんには… 未詳

書簡⑨ 大正十四年六月二十四日

犬養さん 犬養健（一八九六〜一九六〇）か。犬養は小説家・政治家で、父は政治家の犬養毅。芥川とは大正十二年から交流があった。

渡辺とめ子さんの命のためにあなたの御出席を願ひに： 片山廣子「芥川さんの回想（わたくしのルカ伝）」（『婦人公論』昭和四年七月号）では、ある年（「たぶん震災よりもあとだった」との廣子の記述あり）の七月七日の夜に、「W伯爵夫人」の歌集出版の記念会が催され、「A氏」も招かれて出席していたことが書かれている。

不愉快な詩 詳細不明だが、書簡⑧の内容と関連するものと想像される。
支那人 中国人
ちひさいお子さんがた 芥川の長男比呂志（一九二〇〜一九八二）、次男多加志（一九二二〜一九四五）。三男の也寸志（一九二五〜一九八九）はこの年の七月に誕生。
めちや まったく筋道のたたないこと。非常に度はずれていること。（日国）

書簡⑩ 大正十四年八月三十日

出立の時 山川柳子宛片山廣子書簡（大正十四年八月三十一日付）には、廣子が軽井沢から（八月）二十八日に帰京したことが書かれている。芥川はこの年、八月二十日〜九月七日までつるやに滞在していた。

望翠楼 大正元年から昭和十一年頃まで大森新井宿（現大田区山王）にあった望翠楼ホテル。横浜の生糸問屋・若尾財閥の若尾幾太郎が経営。文化人の投宿も多く、「大森丘の会」（廣子も参加していた）の会場にもなった。同じく大森新井宿に居を構える片山家とは近所だった。

高島屋の内見 高島屋百選会のことか。大正二年に発足した本会は、着物の新図案の創造、展示会の開催、PR雑誌や趣意書・標準図案集の発行、講演会の開催などを主な活動内容とした。毎年春と秋（大正十三年以降は夏も加わる）に新図案の商品の陳列・販売が顧客を中心に行われた。与謝野晶子は会の顧問の一人であり、選定色や製品の名称の考案、百選会製品や入選作をモチーフにした作歌を行った。それらの歌は展覧会場や案内状等に掲載された。堀口大學（顧問の一人）、吉井勇、北原白秋、谷崎潤一郎など、詩や短歌の制作で参加した文学者は多い。（山本真紗子「戦前期の高島屋百選会の活動」参照）

晶子さん 与謝野晶子（一八七八〜一九四二）。芥川は大正八年五月に鉄幹・

晶子夫妻に初めて会い、以降、自作への教示や原稿の依頼、歌会への出席や座談会での同席などを通じて交流をもった。大正十四年二月十四日付の晶子宛書簡では、旋頭歌「越びと」を同封して『明星』への掲載を依頼している。

しらぬ間に： 『全歌集』に未収の歌。
いやはてに： 『全歌集』に未収の歌。

書簡⑩ 大正十四年九月二十九日

うたをおめにかけました： 大正十四年九月二十三日付（見出しは

「二十五日?」）の書簡⑭、歌稿⑮「追分のみち」を指すと思われる。

ひらき封 封をしないこと。完全に封をしない郵便物。（日国）

ふさ子女史 娘の片山總子。

堀口、岸田両氏の訳文 「堀口」は詩人・翻訳家・歌人の堀口大樹（一八九二～一九八一）、「岸田」は劇作家・小説家・翻訳家の岸田國士（一八九〇～一九五四）。いずれも翻訳はフランス文学を対象としている。堀口は大正十三年から翌年にかけて、レニエ『燃え上る青春』、モーラン『夜ひらく』『夜とさす』などの小説を翻訳して評価され、大正十四年に第一書房から刊行した訳詩集『月下の一群』は詩壇に大きな影響を与えた。大正十二年には『シヤルル・ルキ・フィリップ短編集』を刊行している。岸田は大正十三年から翌年にかけて発表した「古い玩具」「チロルの秋」、「ぶらんこ」「紙風船」の戯曲が評価され、劇作家としての地位を築いた。翻訳書としては、春陽堂から「フランス文学の叢書 劇の部」として、ルノルマン『落伍者の群』『時は夢なり』、ルナル『別れも愉し』、エルヴィユ『炬火おくり』等を刊行。大正十四年九月には『岸田國士戯曲集』を第一書房から刊行した。

わたくしの、方 廣子の翻訳はアイルランド文学を中心としており、レディ・グレゴリー、シング、イエイツ、ダンセイニ、マクラオド、シヨウなどの戯曲、物語、詩を翻訳し発表している。大正文壇におけるアイルランド文学への関心は高く、多くの文学者が関わっていた。そうしたなかで、廣子の翻訳は文学者、研究者に高い評価を受けている。廣子が大正十四年

三月に第一書房から刊行した『かなしき女王』は、フィオナ・マクラオドの短篇十二篇を翻訳したものであり、同書は優れた訳文と言われている。

房州 岸田國士は大正十四年七月に房州（千葉県）館山に出かけたが、旅先で発病し数か月間闘病生活を送っていた。

小石川の久世山 文京区小日向にある鷺坂上の高台が「久世山」と呼ばれている。呼称は江戸幕府の老中を務めた旧関宿藩主、久世大和守の下屋敷があったことに由来する。堀口大樹は外交官の父に従って明治四十四年から海外と日本を行き来していたが、大正十四年春に帰国後、日本に腰を落ち着け、久世山に父とともに住んだ。

三上氏 作家の三上於菟吉（一八九一～一九四四）。当時の流行作家であると同時に、膨大な読書量に支えられた豊かな教養の持ち主として知られていた。

シング ジョン・ミントン・シング（一八七一～一九〇九）はアイルランドの劇作家。廣子は、シングの作品を翻訳した『いたづらもの』（大正六年）、『シング戯曲全集』（大正十二年）を刊行している。

モントクリスト 三上於菟吉が谷崎精二との共訳で刊行した、アレキサンダー・デュウマ『モントクリスト伯爵』前編・後編（新潮社、大正八年）。オバルチン 栄養剤、調整粉末牛酪乳（後藤直良『新版 作家と葉』参照）。

なお、塚本八洲宛芥川龍之介書簡（大正十四年八月二十八日付）には、塚本からオバルチンを送られた礼が述べられている。

タロ 大正十四年九月二十三日付（見出しは「二十五日?」）の書簡⑭に、「つるやのタロちゃんがジンマシンとかいふのをやってひどくかゆがつてゐました」との記述がある。

聖書 廣子は六歳から英国人教師について英語教育を受け、東洋英和女学校入学後は、キリスト教に基づく宗教教育を受ける中で、聖書を読む楽しさを知ったという（『全歌集』巻末の年譜を参照）。廣子は聖書について「私には深いなじみのもので、おそらく私の体臭の一部分ともなつてゐるだらう。ミツシヨンの女学校だからとはいへ、聖書は教へられ過ぎたやうだ。」「私たち生徒が何も読む物のないとき、聖書でも、読まないよりは読む方が愉快だった。どこでも手あたり次第で、こんなところを読んだと言つた

ら先生がたは驚いたらうが、一さい何も言はなかつた。」と述べている(身についたもの)、『燈火節』所収)。芥川も聖書への関心が高く、聖書に取材した作品は多い。

ソロモン ダビデとバテシバ(バトシエバ)の子。紀元前十世紀頃に在位したイスラエル王国の王。王国の諸制度を確立し、対外交易による経済発展と軍備の強化を図り、エルサレムに宮殿や神殿を建造するなど、王国の繁栄を築いた。しかし栄華を極めた生活は国民の不満を生んだ。ソロモンは賢者としても知られ、『旧約聖書』の「箴言」「コヘレトの言葉(伝道の書)」「雅歌」や『旧約聖書統編』の「知恵の書」は、作者をソロモンに仮託している。

書簡②(大正十三年九月五日付)でも、廣子はソロモンとシバの女王の話についてふれている。

傳道の書 『旧約聖書』の一書で知恵文学に属する。「人間社会の不条理と矛盾、労働の空しいこと、避けられない運命と死についての洞察にみちた観察と見解を箴言の形で表したものを集め、整理したもの」(世界大百科事典)。作者はソロモンに仮託されているが、成立は紀元前三世紀頃と考えられている。引用部分は文語訳旧約聖書による。明治以来「伝道の書」と呼ばれていた本書は、新共同訳(昭和六十二年刊行)から「コヘレトの言葉」と呼ばれるようになった。

あんなに三千人からの女の世話になつたくせに 『旧約聖書』「列王記上」第十一章では、ソロモンは七百人の王妃と三百人の側室を擁するハーレムを所有していたと伝える。「三千人からの女」は、白居易「長恨歌」の「後宮佳麗三千人」を意識した表現か。

ダビデ イスラエル王国の王。ソロモンの父。南方のユダと北方のイスラエルを統治し、エルサレムを首都に定め、イスラエル王国最大の支配地域を築いた。行政、軍事、祭祀制度を整えるなど、内政の充実に力も注いだ。後世には王の模範と称えられた。その波乱万丈の生涯は『旧約聖書』の「サムエル記上下」、「列王記上」一、二章、「歴代誌上」十一、二十九章に詳しい。「詩篇」の作者に擬される。

女と神さまとを大切にする点に於て この二点について「ソロモンよりはダ

ビデの方がすぐれて」いると言っているのは、前者については、ソロモンに千人の妻妾がいたとされるためか。後者については、ソロモンが異教徒の王妃たちの影響を受けて他の神々に心を向け、「彼の父ダビデのように一途にヤハウェに従うことはなかった」(「列王記上」)とされるためか。廣子は「ピアスの詩と戯曲」(『劇と評論』大正十一年八月号に発表)のなかで、「私がピアスに好きなのところは、彼がたいそう女にやさしいことである。(中略)ピアスはすべての女に対して自分の母に対するのと同じやうな親切な心を持つてゐる。」と述べており、本書簡と共通する考え方がうかがえる。

病人 義妹または義弟をさすと思われる。大正十四年二月十一日付の書簡⑦には、義妹の病気について書かれている。

書簡⑫ 大正十四年十一月十一日

九條夫人の芝居 九條武子作の戯曲「洛北の秋」。大正十四年十一月に帝國劇場で上演された。舞台装置は鳥居清忠。

九條武子(一八八七―一九二八)は大正二年頃から佐佐木信綱主宰「竹柏会」に入会し、『心の花』に短歌を発表。社会事業家としても知られる。

廣子とは同門の関係。廣子の随筆「銀座で」には、武子の思い出が書かれている(『心の花』第三十二卷第三号、九條武子夫人追悼篇、昭和三年三月)。

蓮月 「洛北の秋」の主人公である尼僧。京都西賀茂に庵を結んでいる。ひとりで御飯ごしらえができなければ… 廣子は掃除や洗濯は苦ではな

かったが、料理には苦手意識があったようで、「私はとても料理が下手で、自分の手でめんどうなお料理をこしらへてたべる愉しみを知らない。」と述べている(「身についたもの」、『燈火節』所収)。

道ぶしん 道路の新設や修繕の工事。道路工事。(日国)

去年の今ごろ歩いたことのあるみち ちょうど一年前にあたる大正十三年十一月五日付の書簡⑥の内容と関連するならば、去年芥川とともに有楽町

近辺を歩いたことを思い出しながら、一人で歩いているということになる。百年前の秋の夜 「洛北の秋」の舞台は幕末の京都で、季節は晩秋。「百年

前の秋の夜に帰りたい」の文意は、直接的には「洛北の秋」の物語の時代

に帰りたいということになるが、直前に「たった一年のあいだに一世紀もとし老いたやうな気がしました」と書かれていることを考えると、今のよ
うな苦しみはなかった一年前に戻りたい、という思いを述べていると考え
られる。

グリーンアイド、モンスター シェイクスピアの戯曲「オセロー」に登場す
るイアーゴのセリフ「O,beware, my lord, of jealousy; It is the green-
eyed monster which doth mock The meat it feeds on. (以下略)」「ね
え將軍、嫉妬にはご注意下さい。あいつは緑色の目をした怪物です、あ
いつは餌食にする食べ物をじらして弄ぶ。」に由来する（傍線は引用者によ
る）。本作はシェイクスピアの四大悲劇の一つで、「嫉妬」が重要な要素と
なっている。

人から十二あるひは十のものを要求する… 自分が与えたものと同等、あ
るいはそれに近い見返りを相手に求めることは、その人を破滅させる、と
いうこと。

支那遊記 大正十四年十一月に改造社から刊行された芥川龍之介の紀行文集『支
那遊記』。大阪毎日新聞社の海外視察員として、大正十年三月末〜七月上
旬にわたって中国に派遣された芥川の、中国に対する印象記。「上海遊記」
「江南遊記」「長江遊記」「北京日記抄」「雑信一束」からなる。

書簡⑬ 大正十四年十二月八日

こなひだは「支那遊記」をありがたう… 東洋英和女学院に寄贈された廣
子の旧蔵本にも『支那遊記』は含まれている。（『東洋英和女学院史料室だ
より』No.67参照）

堀さん 堀辰雄（一九〇四〜一九五三）。室生犀星の紹介で芥川龍之介の
知遇を得る。芥川が自殺するまでの約四年間師事し、その文学と人生に強
い影響を受けた。大学の卒業論文は『芥川龍之介論―芸術家としての彼を
論ず』。大正十三年夏に芥川・犀星とつるや旅館に一泊した際に片山廣
子に出会い、翌年には一夏滞在して、芥川・廣子・總子・犀星・萩原朔太
郎と親しく交際した。廣子の長男達吉ともこの夏出会う。堀は芥川と廣
子の姿を間近に眺め、自身では廣子の娘の總子に特別な感情を抱いたとい

われる。この時の体験を美化して小説にしたのが「ルウベンスの偽画」で
あり、その後この主題は深化して「聖家族」「物語の女」「菜穂子」などの
物語を生んだ。

いろけ ここで言う「色気」は、愛嬌、愛想。

書簡⑭ 大正十四年九月二十五日（？）

その後如何でいらつしやいますか… 芥川は九月上旬から二十日頃まで、
軽井沢から持ち越した感冒により熱を出し、床に伏していた（九月七日付
斎藤茂吉宛書簡、九月二十二日付得能文宛書簡等参照）。

つるやのタロチヤン 大正十四年九月二十九日付の書簡⑩にも同様の記述
がある。つるや旅館主人不二男氏の子息太郎氏（大正十年生まれ）を指
すか。

信州のうた 歌稿⑮「追分のみち」の十八首を指すと思われる。のちに大
正十五年八月の『三田文学』第一巻第五号に「日中」の題で発表された。

歌の末尾に「去年八月末、軽井沢から沓掛を経て追分に遊んだ時の日記」
と記されている。歌集『野に住みて』（昭和二十九年）には、「日中―信濃
追分にて」の題で収録されている。

廣子の随筆「芥川さんの回想（わたくしのルカ伝）」（『婦人公論』昭和
四年七月号）では、この歌が作られるきっかけとなった追分行きの様子が
つづられており、歌の風景の注釈として読むことができる。

山川柳子宛片山廣子書簡（昭和二年八月七日付）には、芥川についての
話題のなかで、「十一月ごろ追分のうたのしたかきをお見まひのつもりで
お送りしましたらあなたはアララギがきらひのくせにアララギそつくり
ですとひやかされました」と書かれている。

ある人 不明。歌の師である佐佐木信綱あるいは知人、家族のいずれかで
あろう。

大にがっかりしてしまひました 大正十五年に『三田文学』に発表した「日
中」十八首は、歌稿⑮から推敲を重ね、三分分を入れ替えている。その後
もさらに推敲を重ねたことがうかがえる（歌稿⑮の注、および「六、歌稿
『追分のみち』異同一覧」参照）。

小石川の方の病人 未詳。大正十四年九月二十九日付の書簡⑩の「病人」と同一人物であろう。

書簡⑩ 追分のみち

追分のみち のちに「日中」と改題され、『三田文学』第一巻第五号（大正十五年八月）に十八首を発表（A）。その後、『現代日本文学全集 第三十八篇』（昭和四年）には十六首（B）、『現代短歌全集 第十九卷』（昭和六年）には十九首（C）の歌が同じ題で収録されている。歌集『野に住みて』（昭和二十九年）には、「日中 信濃追分にて」の題で十七首（D）が収録されている。

語句の異同の詳細については、後掲の「六、歌稿『追分のみち』異同一覧」を参照。

沓掛の…の歌 A・C・Dでは「晴れやかに沓掛の町の屋根を見るこの川のほとり人なく明るし」（漢字と平仮名の表記の違いについては問題にしない。以下同じ）。Bには該当する歌なし。

沓掛の橋 沓掛は現在の中軽井沢にあたる。かつて中山道浅間三宿の一つである沓掛宿があった。草津道・大笹道の分岐点に位置し、下仁田道にも通じる交通の要地。ここでいう川は湯川か。

しみじみと…の歌 「午前」は、A・Bでは「あさ」、C・Dでは「朝」と表記。ほかはほとんど異同なし。

とほ山に…の歌 A・Dとも「風あらく大ぞらのにこり澄みにけり山々にしろき巻雲をのこし」。

ただ一羽…の歌 A・Bには該当する歌なし。C・Dでは「板屋根のふるび静かなる町なかにただ一羽とぶつばめを見にけり」。

草土手の…の歌 A・Dのいずれにも該当する歌なし。

はろかにも…の歌 A・Dとも「さびしさの大なる現はれの浅間山さやかなりけふの青ぞらのなかに」。

かげもなく…の歌 A・Dとも異同なし。

遠きやま…の歌 A・Dのいずれにも該当する歌なし。

われら三人…の歌 A・Dとも異同なし。

われら三人 堀辰雄は、大正十四年九月一日付の片山廣子宛書簡において、

四人で追分村にドライブしたことにふれている。また堀は「父への手紙」のメモに、廣子の「日中」の歌について、「夏の末、片山夫人令嬢、芥川さんと一しよに追分にドライブした折の作」と書いている。一方、廣子の「芥川さんの回想（わたくしのルカ伝）」では、追分と一緒にいた人物として、A氏（芥川）、H（堀辰雄）、M（文科の学生）、K氏を挙げている。

しづかにも…の歌 「うつりたり」はA・Dでは「映るなり」。

土橋わたる…の歌 「土橋わたる」はA・Dでは「土橋をわたる」。

さびしさに…の歌 「まひる日の」はA・Cでは「まひるの」。Dには該当する歌なし。

傘さし…の歌 A・Dでは「日傘させどまはりに日あり足ものほそながれを見つつ人の来るを待つ」。

油屋 中山道の追分宿で脇本陣をつとめた歴史ある旅館。昭和初期には堀辰雄や立原道造らが投宿した。堀辰雄「風立ちぬ」にも登場する。昭和十二年に焼失したが、翌年再建された。

日のでりに…の歌 A・Dでは「日の照りのいちめんにおもし路のうへの馬糞にうごく青き蝶のむれ」。

芥川が大正十四年三月に『明星』に発表した「越びと」旋頭歌二十五首のうちの一詩「うつけたるころをもちて街ながめをり。日ざかりの馬糞にひかる蝶のしづけさ。」と対応しているか。

四五本の…の歌 A・Dとも異同なし。

しろじると…の歌 「木々」はA・Dでは「樹々」（樹樹）。「浅間のかげ」はA・Dでは「山すその風」。

ひとびとは…の歌 「ひとびとは言ふこともなく」はA・Cでは「おのおの言ふことなく」。B・Dには該当する歌なし。

友だちら…の歌 「見つけたるかな」は、Bでは「見いでたるかな」。他は異同なし。

馬のうたが二首 詳細未詳。なおA・Dには、「追分のみち」にはない一首「われわれも牧場のけものらとおなじやうに静かになりて風にふかれつつ」がある。「六、歌稿『追分のみち』異同一覧」を参照。

六、歌稿「追分のみち」 異同一覧

※歌の前に付したアルファベットは、A『三田文学』第一巻第五号（大正十五年八月）所収の「日中」十八首、B『現代日本文学全集 第三十八篇』（昭和四年）所収の「日中」十六首、C『現代短歌全集 第十九卷』（昭和六年）所収の「日中」十九首、D歌集『野に住みて』（昭和二十九年）所収の「日中」信濃追分にて」十七首を表す。

※歌の後に付した（No.1）等の表示は、A、Dの作品中での順番を表す。

沓掛の橋わたるとき見る川はうづまき泡だつにこり水なり

- A 晴れやかに沓掛の町の屋根を見るこの川のほとり人なく明るし（No.1）
- B なし
- C はれやかに沓掛の町の屋根をみるこの川のはとり人なく明るし（No.1）
- D はれやかに沓掛の町の屋根をみるこの川のはとり人なく明るし（No.1）

しみじみとわれは見るなり午前の日のひかりさだまらぬ浮洲のなつぐさ

- A しみじみと我は見るなりあさの日の光さだまらぬ浮洲の夏ぐさ（No.2）
- B しみじみと我は見るなりあさの日の光さだまらぬ浮洲の夏ぐさ（No.2）
- C しみじみとわれは見るなり朝の日の光さだまらぬ浮洲の夏ぐさ（No.2）
- D しみじみとわれは見るなり朝の日の光さだまらぬ浮洲の夏ぐさ（No.2）

とほ山にしろき巻ぐもたちなびきけさの朝かぜにすみたる秋ぞら

- A 風あらく大ぞらのにこり澄みにけり山々にしろき巻雲をのこし（No.3）
- B かぜあらく大ぞらのにこり澄みにけり山々にしろき巻雲をのこし（No.1）
- C 風あらく大ぞらのにこり澄みにけり山々にしろき巻雲をのこし（No.3）
- D 風あらく大空のにこり澄みにけり山山に白き巻雲をのこし（No.3）

ただ一羽つばめのとぶを見たりけり車はしりて沓掛をすぐ

- A なし

- B なし
- C 板屋根のふるび静かなる町なかにただ一羽とぶつばめを見にけり（No.4）
- D 板屋根のふるび静かなる町なかにただ一羽飛ぶつばめを見にけり（No.4）

草土手の花ぐさの中のしろひつじほそき眼をしてわれらを見たり

- A なし
- B なし
- C なし
- D なし

はろかにもさびしくありけり浅間嶺は知るらめやけふのわれらのこころ

- A さびしさの大なる現はれの浅間山さやかなりけふの青ぞらのなかに（No.4）
- B さびしさの大なる現はれの浅間山さやかなりけふの青ぞらのなかに（No.3）
- C さびしさの大なる現はれの浅間山さやかなりけふの青ぞらのなかに（No.5）
- D さびしさの大なる現はれの浅間山さやかなりけふの青空のなかに（No.5）

かげもなくしろき路かな信濃なる追分のみちのわかれめに来つ

- A かげもなくしろき路かな信濃なる追分のみちのわかれめに来つ（No.5）
- B かげもなくしろき路かな信濃なる追分のみちのわかれめに来つ（No.4）
- C かげもなくしろき路かな信濃なる追分のみちのわかれめに来つ（No.6）
- D 影もなく白き路かな信濃なる追分のみちのわかれめに来つ（No.6）

遠きやま空にかさなる信濃路のいづくにも蝉のこゑなかりけり

- A なし
- B なし
- C なし
- D なし

われら三人影もおとさぬ日中に立つて清水のながれを見てをる

- A われら三人影もおとさぬ日中に立つて清水のながれを見てをる（No.6）

- B われら三人影もおとさぬ日中に立つて清水のながれを見てをる (No. 5)
 C われら三人影もおとさぬ日中に立つて清水のながれを見てをる (No. 7)
 D われら三人影もおとさぬ日中に立つて清水のながれを見てをる (No. 7)

しづかにもまる葉のみどり葉つたりたりこれは山路とおなじことをいふ

- A しづかにもまる葉のみどり葉映るなり「これは山路とおなじことを言ふ (No. 7)
 B しづかにもまる葉のみどり葉映るなり「これは山路」とおなじことを言ふ (No. 6)
 C しづかにもまる葉のみどり葉映るなり「これは山路」とおなじことを言ふ (No. 8)
 D しづかにもまる葉のみどり葉映るなり「これは山路」と同じことを言ふ (No. 8)

土橋わたる土橋はゆらく草土手をおり来てみれば野びろし畑は

- A 土橋をわたる土橋はゆらく草土手をおり来てみればのびろし畑は (No. 8)
 B 土橋をわたる土橋はゆらく草土手をおり来てみればのびろし畑は (No. 7)
 C 土橋をわたる土橋はゆらく草土手をおり来てみればのびろし畑は (No. 9)
 D 土橋を渡る土橋はゆらく草土手をおり来てみればのびろし畑は (No. 9)

さびしさに壓されてひとは眼をあはすもろこしの葉のまひる日のひかり

- A さびしさに厭されてひとは眼をあはすもろこしの葉のまひるのひかり (No. 9)
 B さびしさに厭されて人は眼をあはすもろこしの葉のまひるのひかり (No. 8)
 C さびしさに壓されて人は眼をあはすもろこしの葉のまひるのひかり (No. 10)
 D なし

傘さしここに待つなり油屋のふるきかど出でて人来たるかと

- A 日傘させどまはりに日あり足もとのほそながれを見つつ人の来るを待つ (No. 11)
 B 日傘させどまはりに日あり足もとのほそながれを見つつ人の来るをまつ (No. 10)
 C 日傘させどまはりに日あり足もとのほそながれを見つつ人の来るを待つ (No. 12)
 D 日傘させどまはりに日あり足もとの細ながれを見つつ人の来るを待つ (No. 11)

日のてりに路ねむるなりみちなかの馬糞のうへの青き蝶のむれ

- A 日の照りのいちめんにおもし路のうへの馬糞にうごく青き蝶のむれ (No. 12)

- B 日の照りのいちめんにおもしみちのうへの馬糞にうごく青き蝶のむれ (No. 11)
 C 日の照りのいちめんにおもし路のうへの馬糞にうごく青き蝶のむれ (No. 13)
 D 日の照りの一めんにおもし路のうへの馬糞にうごく青き蝶のむれ (No. 12)

四五本の樹のかげにある腰かけ場ことしもきたり腰かけて見る

- A 四五本の樹のかげにある腰かけ場ことしも来たり腰かけて見る (No. 13)
 B 四五本の樹のかげにある腰かけ場ことしも来たり腰かけて見る (No. 12)
 C 四五本の樹のかげにある腰かけ場ことしも来たり腰かけてみる (No. 14)
 D 四五本の樹のかげにある腰掛場ことしも来たり腰かけてみる (No. 13)

しろじろとすら葉のひかる木々ありて浅間のかげに吹かれたるかな

- A しろじろとすら葉のひかる樹々ありて山すその風に吹かれたるかな (No. 14)
 B しろじろとすら葉のひかる樹々ありて山すそのかぜに吹かれたるかな (No. 13)
 C しろじろとすら葉のひかる樹々ありて山すその風に吹かれたるかな (No. 15)
 D しろじろとすら葉の光る樹樹ありて山すその風に吹かれたるかな (No. 14)

ひとびとは言ふこともなくながめたり村のなかよりひるの鐘鳴る

- A おのおのは言ふことなく眺めたり村のなかよりひるの鐘鳴る (No. 16)
 B なし
 C おのおのは言ふことなく眺めたり村のなかよりひるの鐘鳴る (No. 17)
 D なし

友だちら別れむとして草なかのひるがほの花を見つけたるかな

- A 友だちら別れむとして草なかのひるがほの花を見つけたるかな (No. 17)
 B 友だちら別れむとして草なかのひるがほの花を見いでたるかな (No. 15)
 C 友だちら別れむとして草なかのひるがほの花をみつけたるかな (No. 18)
 D 友だちら別れむとして草なかのひるがほの花を見つけたるかな (No. 16)

《本歌稿の十八首とは類似する部分がない歌》

- A 『三田文学』第一巻第五号 (大正十五年八月)

あかるすぎる野はらの空気真なつ日の荒さを持ちてせまりくるなり(No.10)
われわれも牧場のけものらとおなじやうに静かになりて風にふかれつつ(No.15)
をとこたち煙草のけむりを吹きにけりいつの代とわかぬ山里のまひるま(No.18)

B 『現代日本文学全集 第三十八篇』(昭和四年)

あかるすぎる野はらの空気真なつ日の荒さを持ちてせまりくるなり(No.9)
われわれも牧場のけものらとおなじやうに静かになりて風に吹かれつつ(No.14)
をとこたち煙草のけむりを吹きにけりいつの代とわかぬ山里のまひるま(No.16)

C 『現代短歌全集 第十九卷』(昭和六年)

あかるすぎる野はらの空気まなつ日の荒さを持ちてせまりくるなり(No.11)
われわれも牧場のけものらとおなじやうに静かになりて風にふかれつつ(No.16)
をとこたち煙草のけむりを吹きにけりいつの代とわかぬ山里のまひるま(No.19)

D 歌集『野に住みて』(昭和二十九年)

明るすぎる野はらの空気まなつ日の荒さを持ちて迫りくるなり(No.10)
われわれも牧場のけものらと同じやうに静かになりて風に吹かれつつ(No.15)
をとこたち煙草のけむりを吹きにけりいつの代とわかぬ山里のまひるま(No.17)

おわりに

本稿では、大正十三年九月、翌年十二月にかけて片山廣子が芥川龍之介に宛てて書いた書簡十四通および歌稿について、一部公開されていた部分を含めた全文を翻刻紹介し、簡単な注釈を施した。当館で所蔵する書簡は、二人の間に実際に交わされた書簡のうちの一部だと推測され、また、これらに対する芥川からの返信分が現存しないことから、廣子や芥川が他の友人たちに宛てた書簡や、随筆や小説などの関連作品を援用しながら、書簡内容への理解を補う必要がある。そのようにして、書かれた順番に書簡の内容をみていくと、軽井沢で芥川と親しくなつてから、一年強の交際の間に、廣子の心が揺れ動き、次第に変化していく過程をたどることができるとともに、芥川の

ほうの反応もある程度推測することができる。また、廣子が芥川作品についてふれている箇所(書簡⑤の「お時儀」「霜夜」、書簡⑩の「支那游記」など)や、芥川からの示唆を受けて述べている箇所(書簡⑥の戯曲の件、書簡⑩の「グリーンアイド、モンスター」の件など)、反対に廣子が芥川に示唆を与えたことがわかる箇所(書簡②のソロモンとシバの女王の説話など)についても確認することができ、二人の文学者同士の交流がうかがえるという意味でも興味深い。

一方、書き手である廣子を中心とみると、随所に短歌が織り込まれた書簡からは、日常的に歌を詠む歌人としての側面をうかがうことができ、これらに書かれている歌に未発表作が少なからず含まれていることから、他の個人宛書簡等のなかに未発表の短歌が存在する可能性を示している。廣子の翻訳に関わる著作にふれた箇所(書簡⑩の「わたくしの、方」「シング」など)や、他に翻訳を手掛けている文学者たちについてふれた箇所(書簡⑩の堀口大學、岸田國士、三上於菟吉など)からは、翻訳家として活躍していた廣子の姿をうかがうことができる。

また、芥川とも親しい室生犀星、堀辰雄、菊池寛、犬養健といった文学者、竹柏会に属する渡辺とめ子、九条武子や同時代に活躍した与謝野晶子といった歌人、前掲の堀口大學、岸田國士、三上於菟吉といった、翻訳を手掛けた文学者などの名前からは、廣子の文学における交遊関係の一端をうかがうことができる意味で参考になる。

書簡には、知性とユーモアを感じさせる廣子独特の表現が散りばめられており、そこには廣子の日常的なものの考え方や、文学的な感性が息づいている。その背景にあるのは、聖書をはじめとする彼女の豊かな教養であり、人生そのものでもあろう。

本稿の主な目的は、当館所蔵の未公開資料について整理し、基本文献として整備して提供することであり、今後の片山廣子(松村みね子)研究、芥川龍之介研究の発展に少しでも寄与することができれば幸いである。

なお本稿では、紙面の都合もあり、資料の写真版を収録することができなかった。注釈の不十分な箇所については今後の課題としたい。大方の御批評をいただければ幸いである。

四年七月号)に、「A氏が丈夫の時分そこへ遊びに行つた。非常に暑い日のひるで、その丘の腰掛で、一しよにあたHやMとみんなで煙草を吸つてゐた。」と書かれている。

(10) 谷田昌平「堀辰雄『物語の女』の背景―一九二五年夏』をめぐって」

『四季派学会論集』平成五年三月)、山崎麻由美『『物語の女』研究―

片山廣子との関わりを中心に―』(『日本文学研究』第三十三号、平成

十年)は、堀辰雄の「物語の女」のなかに、廣子の「日中」の歌数首

の構想が織り込まれていることを指摘している。谷田氏は「日の照り

の…」「さびしさに…」「さびしさの…」「おのおのは…」「友だちら…」

「風あらく…」の六首、山崎氏は「かげもなく…」「われら三人…」「日

の照りの…」「さびしさに…」「おのおのは…」「友だちら…」の六首を

挙げている。また、川村湊「相聞歌―芥川龍之介と片山廣子」(『物語

の娘 宗瑛を探して』講談社、平成十七年)は、堀辰雄の『楡の家』

と廣子の「日中」の歌(「日の照りの…」「かげもなく…」「われら三人

…」「友だちら…」などとの関連を指摘している。

(11) 『現代日本文学全集 第三十八篇』(改造社、昭和四年)は「現代短歌・

俳句集」。短歌の部には一五二人の短歌が掲載されている。選歌は自選

による。

(12) 『現代短歌全集 第十九卷』(改造社、昭和六年)には、相馬御風、三

井甲之、平野萬里、外山且正とともに廣子の歌が収録されている。

(13) 山川柳子宛片山廣子書簡(大正十四年八月三十一日付)末尾の短歌四

首のうち二首目には、やや類似する歌として、「くものかげにすこし

かぎろふ浅間やま屋根みわたしてわれら息づく」がある。

(14) 山川柳子宛書簡(同右)末尾の短歌四首のうち一首目には、「影もな

くしろき路かな信濃路の追分にきたりこの路を見る」とある。

(15) 山川柳子宛書簡(同右)末尾の短歌四首のうち三首目には、「しみじ

みと物をおもへば言葉なし静けさのなかにひるの鐘鳴る」とある。

(16) 山川柳子宛書簡(同右)末尾の短歌四首のうち四首目には、「友らい

まわかれんとして草むらのひるがほの花見いでたるかな」とある。

(17) 廣子の随筆「芥川さんの回想(わたくしのルカ伝)」(『婦人公論』昭和

引用文献

片山廣子作品の引用は、片山廣子／松村みね子『燈火節 随筆十小説集』(月

曜社、平成十六年)、片山廣子／松村みね子『野に住みて 短歌集十資料編』

(月曜社、平成十八年)によった。

片山廣子の山川柳子宛書簡の引用は、「片山廣子書簡(1)」(『軽井沢高原文

庫通信』第三十号、平成八年)によった。また、堀辰雄宛書簡の引用は、谷

田昌平・池内輝雄編『資料紹介』片山廣子・達吉・總子の堀辰雄宛書簡』(『昭

和文学研究』二十六号、平成五年)によった。

芥川龍之介作品および書簡の引用は、『芥川龍之介全集』全二十四卷(岩波

書店、平成七年～十年)によった。

室生犀星作品の引用は、『室生犀星全集』第三卷(新潮社、昭和四十一年)

によった。

シェイクスピア「オセロー」は、大場建治編注訳『研究社 シェイクスピア

選集10 オセロー』(研究社、平成二十年)によった。

参考文献

『片山廣子、芥川龍之介関係』

菊地弘・久保田芳太郎・関口安義編『芥川龍之介事典』(明治書院、昭和

六十年)

関口安義・庄司達也編『芥川龍之介全作品事典』(勉誠出版、平成十二年)

志村有弘編『芥川龍之介大事典』(勉誠出版、平成十四年)

関口安義編『芥川龍之介新辞典』(翰林書房、平成十五年)

吉田精一「芥川龍之介と最後の恋人―片山広子の書簡―」(『ブッククラブ情

報』第二卷第一号、昭和四十六年一月)

吉田精一「芥川龍之介の恋人」(『吉田精一著作集第二卷 芥川龍之介Ⅱ』桜楓社、昭和五十六年)

井村君江編「松村みね子著作年譜」(『幻想文学』二号、昭和五十七年十一月)

藤田福夫「近代歌人の研究 歌風・風土・結社」(笠間書院、昭和五十八年)

中野菊夫「写実と象徴」(短歌新聞社、昭和六十年)

藤田福夫「三訂・片山広子年譜」(『相山国文学』十三号、平成元年)

井村君江「解説」松村みね子翻訳年譜一覽」(フィオナ・マクラオド著、松村みね子訳『かなしき女王』、沖積舎、平成元年)

近藤富枝「信濃追分文学譜」(中央公論社、平成二年)

阿部光子「ひとつの樹かげ」(『その微笑の中に』新潮社、平成四年)

神奈川近代文学館編『芥川龍之介展』(神奈川近代文学館、平成四年)

佐藤太郎・大藤敏行「インタビュー」つるや旅館と芥川龍之介Ⅰ、佐藤次郎・大藤敏行「インタビュー」つるや旅館と芥川龍之介Ⅱ」(『高原文庫』七号、平成四年)

谷田昌平・池内輝雄編「資料紹介」片山廣子・達吉・總子の堀辰雄宛書簡」(『昭和文学研究』二十六号、平成五年)

宮坂覺「芥川龍之介と片山廣子を中心に」(『高原文庫』九号、平成六年)

松本寧至「越し人慕情 発見芥川龍之介」(勉誠社、平成七年)

「片山廣子書簡(Ⅰ)」(『軽井沢高原文庫通信』第三十号、平成八年)

清部千鶴子「片山廣子―孤高の歌人」(短歌新聞社、平成九年)

山崎麻由美「物語の女」研究―片山廣子との関わりを中心に―」(『日本文学研究』三十三号、平成十年)

林田弘美「忘れられた女流翻訳家松村みね子に関する一考察―短歌とアイルランド文学翻訳に傾倒した『夢想家』―」(『埼玉女子短期大学研究紀要』第十号、平成十一年)

関口安義「芥川龍之介とその時代」(筑摩書房、平成十一年)

宮坂覺編『芥川龍之介作品論集成 別巻 芥川文学の周辺』(翰林書房、平成十三年)

*岩井眞実「芥川と演劇」、田口章子「芥川と歌舞伎」、庄司達也「芥川芸

術鑑賞年表 演劇・美術展覧会・音楽会 鑑賞の記録」

片山廣子／松村みね子『燈火節 随筆＋小説集』(月曜社、平成十六年)

鶴岡真弓「ひるがえる二色 廣子とみね子」(『燈火節 随筆＋小説集』月曜社、平成十六年所収)

川村湊「相聞歌―芥川龍之介と片山廣子」(『物語の娘 宗瑛を探して』講談社、平成十七年)

片山廣子／松村みね子『野に住みて 短歌集＋資料編』(月曜社、平成十八年)

吉川豊子「研究動向 片山廣子／松村みね子」(『昭和文学研究』五十六号、平成二十年)

佐佐木幸綱「片山廣子の歌」(『高原文庫』二十五号、平成二十二年)

佐藤次郎「つるや旅館と文士」(同右)

秋谷美保子編『片山廣子全歌集』(現代短歌社、平成二十四年)

辺見じゅん「芥川と『越し人』」(『ロマネスク・片山廣子』(『桔梗の風 天涯からの歌』幻戯書房、平成二十四年)

高木雅恵「芥川とメリメー『小説の筋』論争をめぐる―」(『コンパライオ』十六号、平成二十四年)

群馬県立土屋文明記念文学館編『芥川龍之介の生涯―あまりに人間的な』(群馬県立土屋文明記念文学館、平成二十五年)

大木志門・小川桃・加藤桂子・田村瑞穂・土井雅也・西村洋子・信國奈津子・宮西郁実「資料翻刻 佐佐木信綱雪子宛片山廣子書簡」(『日本近代文学館年誌 資料探索9』日本近代文学館、平成二十五年)

鈴木暁世「越境する想像力―日本近代文学とアイルランド―」(大阪大学出版会、平成二十六年)

清水麻利子「片山廣子の短歌―東洋英和女学院への寄贈本から見えてくるもの―」(『東洋大学』大学院紀要』五十一号、平成二十六年)

《その他》

日本風俗史学会編『日本風俗史事典』(弘文堂、昭和五十四年)

『日本歴史地名大系』二十 長野県の地名』(平凡社、昭和五十四年)

国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』(吉川弘文館、昭和五十四年～平成

九年)

『日本国語大辞典〔縮刷版〕』(小学館、昭和五十六年)

『角川日本地名大辞典』二十一 静岡県(角川書店、昭和五十七年)

日本近代文学館・小田切進編『机上版 日本近代文学大事典』(講談社、昭和五十九年)

『世界大百科事典』(平凡社、昭和六十三年)

『角川日本地名大辞典』二十 長野県(角川書店、平成二年)

ジョアン・コメイ著、関谷定夫監訳『旧約聖書人名事典』(東洋書林、平成八年)

『旧約聖書』がわかる。』(朝日新聞社、平成十年)

『日本歴史地名大系』二十二 静岡県の地名』(平凡社、平成十二年)

高橋康也・大場建治・喜志哲雄・村上淑郎編『研究社 シェイクスピア辞典』(研究社出版、平成十二年)

市古夏生・菅聡子編『日本女性文学大事典』(日本図書センター、平成十八年)

葉山修平監修『室生犀星事典』(鼎書房、平成二十年)

倉田喜弘・林淑姫『近代日本芸能年表 上』(ゆまに書房、平成二十五年)

九条武子「戯曲 洛北の秋」(『無憂華』実業之日本社、昭和二年)

メリメ作・江口清訳『ある女への手紙 上巻・下巻』(岩波書店、昭和二十七年、二十八年)

小川和佑『文壇資料 軽井澤』(講談社、昭和五十五年)

『堀口大學全集 補巻1』『堀口大學全集 別巻』(小澤書店、昭和五十九年、昭和六十三年)

室生朝子『父 犀星と軽井沢』(毎日新聞社、昭和六十二年)

『岸田國士全集』二十八(岩波書店、平成四年)

堀多恵子『堀辰雄の周辺』(角川書店、平成八年)

月本昭男・勝村弘也訳『旧約聖書』ルツ記 雅歌 コーヘレト書 哀歌 エステル記(岩波書店、平成十年)

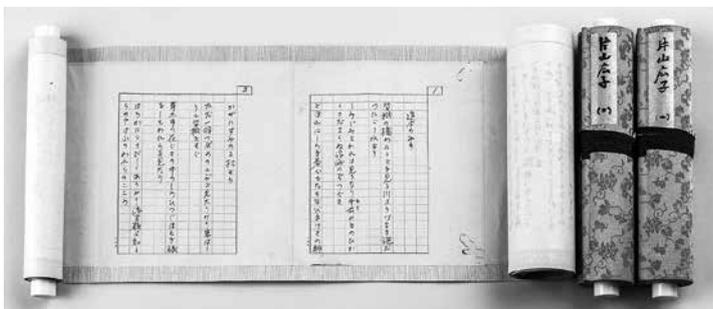
池田裕訳『旧約聖書』列王記(岩波書店、平成十一年)、『旧約聖書』

歴代誌(岩波書店、平成十三年)

『犀星』(室生犀星記念館)(金沢市、室生犀星記念館、平成十七年改訂増刷)



芥川龍之介宛 片山廣子書簡① (大正13年9月1日付)
※「片山広子(一)」所収



片山廣子歌稿「追分のみち」冒頭2枚分
※「片山広子(三)」所収

長谷川郁夫「堀口大學―くら闇坂」の登り降り(大森望翠楼ホテル)』(『三田文学』第三期)八十四号、平成十八年)

後藤直良『新版 作家と薬』(薬事日報社、平成十九年)

大場建治編注訳『研究社 シェイクスピア選集10 オセロ』(研究社、平成二十年)

山岸郁子「帝劇と三越」(『コレクション・モダン都市文化』第七十一巻 帝劇と三越)ゆまに書房、平成二十三年)

『帝国劇場100年のあゆみ』編纂委員会・東宝株式会社総務部編『帝国劇場100年のあゆみ 1911・2011』(東宝、平成二十四年)

中野正昭「グラントホテルの演芸場―帝国ホテル演芸場とその時代―」(『大正演劇研究』八号、平成十二年)

山本真紗子「戦前期の高島屋百選会の活動―百選会の成立とその顧問の役割―」(『Core Ethics』Vol.9、平成二十五年)

Ⅱ
〔論文〕 北陸本線開通による東岩瀬の

飛び団子由来譚の再構成とその受容

—— 大井冷光「史実お伽飛だんご」をめぐって

小林加代子

北陸本線開通による東岩瀬の飛び団子由来譚の再構成とその受容

―大井冷光「史実お伽飛だんご」をめぐる―

小林 加代子

はじめに

飛び団子^①は、近世以来、東岩瀬の名物として知られる。現在は、富山市岩瀬港町の七福亭ただ一軒が毎年五月十日から十月五日まで期間限定で販売しており、その味を今に伝える。うるち米でつくられた団子は、きな粉とあんこのいづれかをまぶした二種の味わいで人気がある。新聞、テレビなど、地元メディアで紹介されることも多い。^{②③}

飛び団子には、次のような名称由来譚が伝わっている。

昔、岩瀬から水橋へ至る海辺の街道は昼でも鬱蒼とした松原で、魔物が出没して旅人を襲っていた。その噂を聞いた大村城主の轡田豊後守は、魔物退治に出かけた。魔物との戦いに疲れて窮地に陥ったが、突然どこからともなく団子が口中に飛び込んできて飲み込むと力を盛り返して無事退治した。以来、厄除けの団子として東岩瀬の名物となった。^④

どこからともなく団子が飛んで来たという由来譚は、そのおもしろさも手伝って、団子とともに有名である。昭和初期から富山県内の初等教育の場で郷土教育の教材となってきたが、戦後も、富山の民話、昔話として書籍や雑誌に収載され、また、子ども向けの語り聞かせの題材ともなってきた。岩瀬周辺の小学校の学校行事や地域活動で、郷土の文化の学習や普及を目的として取り上げられることも多い。新聞記事などを見ると、現在は七福亭でしか飛び団子を味わうことができないこともあり、文化の継承の危機を報じ、存続を願う記事も多く見られるが、飛び団子はその由来譚とともに、現在まで富山の食文化の一つとして広く親しまれている。

では、飛び団子はいつ頃から東岩瀬の名物として知られるようになったの

であろうか。団子自体は、遅くとも江戸後期には東岩瀬の名物として知られていた。一方、名称由来譚は、管見の限りではあるが、近世の事例は知られない。今回調査した限りでは、明治四十二年『北陸タイムス』掲載の由来譚が、文献としては最も古いものである。また、現在最もよく知られる飛び団子の由来譚は、大正四年に大井冷光（一八八五―一九二一）が翻案した「史実お伽飛だんご」が端緒である。大井冷光の本文は、富山の民話・昔話の基本文献である小柴直矩『越中伝説集』（中田書店、昭和十二年）にほぼ同文で掲載され、後の書籍、雑誌など種々の本文の基本形として参照されてきた。

大井冷光が童話仕立ての飛び団子由来譚を執筆したのは、東岩瀬の政治家でありジャーナリストでもあった犬島宗左衛門（一八七三―一九四〇）の依頼による。犬島宗左衛門は、近世から東岩瀬の名物と謳われながら明治時代には廃れていた飛び団子を、再び名物として売り出そうと考え、大正四年、自身が経営する飛び団子店「はぎのや」を東京に進出させた。この時、商品リーフレットに掲載するために制作されたのが、大井冷光「史実お伽飛だんご」であった。リーフレットには冷光の童話と、巖谷小波作詞、後藤丞之輔作曲の飛び団子の歌の楽譜と歌詞を掲載した。商品の包装紙のデザインは竹久夢二によるものであった。^⑤

大正四年五月十五日、富山の新聞各紙は、犬島宗左衛門の「はぎのや」東京進出計画を報じた。『北陸タイムス』、『富山日報』、『北陸政報』は、ともに巖谷小波の飛び団子の歌を掲載している。記事の体裁、報じる内容は共通するところがあり、犬島宗左衛門がプレスリリースを行ったものと考えられる。また、竹久夢二や巖谷小波といった著名人を起用し、商品の付加価値を高めた。著名人への依頼は、富山県出身で巖谷小波や久留島武彦のもとで少年少女雑誌の編集者・童話作家として活躍していた大井冷光、また、竹久夢二が富山に来県した際に夢二を招いた東岩瀬の五大家の一つ宮城家の人脈を介して行ったものと推測される。^⑥

犬島宗左衛門が飛び団子の東京進出を計画したのは、大正二年九月、大隈重信が遊説で富山に来県したことがきっかけであった。この時、大隈は犬島の懇請により東岩瀬を訪問し講演を行っている。東岩瀬での休憩所となった米田家では飛び団子も饗された。

大隈は、開通間もない北陸本線を利用して富山に來県した。大正二年四月一日、青海・糸魚川間が開通し、富山と東京は新潟經由で鉄道での行き來が可能になった。大島は北陸本線の開通に期待があったと思われる。「はぎのや」を東京進出させるだけでなく、鉄道各駅に売店を設置する計画も持っていたことが報じられているからである。新たな交通網の登場が、「はぎのや」飛び団子東京進出計画を促した。

大島宗左衛門が志したのは、東岩瀬の振興であった。そのための一つの方策として、飛び団子の普及があった。現在広く知られる飛び団子の由来譚は、地域の名物として近世から伝わってきたという歴史的事実だけでなく、大島宗左衛門の精力的かつ戦略的な広報活動の成果に負う所が大きい。

新たな交通網の登場という観点からすれば、近世、飛び団子が東岩瀬の名物となったのも、北陸街道に宿駅が設けられ往來する人が増加したことによると言えよう。土地の産物が名物として知られるようになるには、他地域の人の往來が不可欠である。北陸本線の開通は、大都市圏との人、物、情報の流れを変化させかつ大量化した。飛び団子のように原材料や製法からすれば他との差別化が難しいと考えられるものの場合、大量の物と情報の中で存在感を示すには付加価値が必要であり、大島宗左衛門はそのことを意識していた。大島が、東岩瀬を象徴するものとして飛び団子を全国に知らしめるために付加したのは、大隈重信が賞美したという権威性と、竹久夢二のセンスの良いデザイン、そして、内容が珍しく親しみやすい大井冷光の童話と、その來歴をわかりやすく伝える巖谷小波の歌であった。

東京の店は二年ほどやめたという事実からすれば、これらは大都市における付加価値として必ずしも功を奏したとは言えないだろう。一方で、飛び団子由来譚の持つ珍しさ、すなわち歴史や風土と結びついた個性は、大井冷光によって童話のかたちで文学としてまとめられたことで、富山の地において現在まで語り継がれることとなった。つまり、大都市の中で存在感を示すために、巖谷小波、大井冷光という東京を中心に活躍する人々が有していた知識と視点によって飛び団子の由来譚を再構成したことが、後の基本資料として参照され続ける要因になったと考えられる。なお、昭和四年には、旧制富山高等学校で教鞭をとった藤森秀夫が飛び団子の詩に詞書をつけて発表し

ているが、こちらも童話全般に関する広範な知見によって再構成された例と言える。

本稿では、大井冷光「史実お伽飛だんご」を中心に、富山と東京という対比軸を用いて、明治期から北陸本線が開通した大正期を以て、現代に至るまで飛び団子由来譚がどのように語られてきたかを検討したい。

一、大島宗左衛門の「はぎのや」飛び団子東京進出計画

小柴直矩（一八六九～一九四〇）の著書『越中伝説集』は、富山の伝承研究の基本文献の一つである。昭和十二年に単行書として刊行され、昭和三十四年に富山県郷土史会から再刊された。大正十五年から昭和十一年まで富山県町村長会機関誌『富山自治』に連載した文章をまとめたものである。飛び団子について次のように記している。

「何か岩瀬の飛びだんご、心に残るは娘茶屋」

とは昔加賀侯が江戸參勤途中の宿駅を詠み込んだ、岩瀬名物飛びだんごの俚語であります。

天文の頃、勇を振り武を輝かした越中五大将の一人と呼ばれた轡田備後守の化物退治の快拳に起因し、後世道中災難除けのだんごとてこの地の名物となり、加賀侯の參勤往復を初めこの町を通るもの必ずこれを買って道中の無難をあやかりました。歴史ある厄除の名物だんごも明治の中頃からすっかり世に忘れられ名を記す者さえないようになりました。

東岩瀬の犬島宗右衛門氏深くこれを嘆いて、大正二年大隈侯が來富の折、同地に立寄られた時特にこれを饗して賞美を博しました。大正四年これが再興を企て、ある東京人の進めに従い帝都を中心として広くこれが販売を計画し、同年五月竹久夢二画伯來富の節をうて『レットル』に美人がだんごを作っている絵を描いてもらわれました。

自分が八歳の時、明治九年九月一日から二十日間富山市梅沢町大法寺で初めて展覧会開催の折、売店で東岩瀬の飛びだんごを売っているのを見物した印象深くのこり、これが由来の調査に苦心中のところ、明治

四十二年九月五日北陸タイムス一周年記念号で発表しました。由来書をだんごに添えたいと犬島氏から依頼され回付しましたところ更に大井冷光氏の筆にて宣伝され、また巖谷小波先生の韻歌も出来、その後東京浅草雷門および東岩瀬駅の二か所で販売することとなったものです。今なお東岩瀬駅に汽車が着きますと、飛びだんご、飛びだんごと高く叫ぶ売子の声を耳にします。

(傍線引用者、以下同)

明治四十二年九月五日の『北陸タイムス』を見ると、南水の筆名で「お伽斬飛団子」を掲載している。当該記事は、「上」と記されているが、対応する連載記事は掲載日不明である。本文も脱落があり不完全なものであるが、この南水「お伽斬飛団子」が、小柴が発表したと記している由来と思われる、冷光の由来譚の資料の一つとなったと考えられる。

ところで、前年の明治四十一年十一月十六日、後の北陸本線となる富直線の富山・魚津間が開通した。東岩瀬駅(現・東富山駅)の完成も富直線開通にあわせたものであった。工事の完成を報じる『富山日報』明治四十一年十一月十五日記事には、東岩瀬町について次のような記述がある。

同町には名物と云ふものは殆ど無いが、只鶯団子と云ふものがあつて、昔しから有名である、此団子には深い由緒があるさうで夏になると売出す

飛び団子は東岩瀬を象徴する名物であったことがわかる。なお、鶯団子とあるのは表記が異なるが、近世の資料で東岩瀬の飛び団子のことを紹介した例は複数確認できるので同じものと見て良いだろう。昔から有名で深い由緒があるとしているが、一方で小柴が明治中期から廃れており由来調査に苦心したと記しているところを見ると資料は豊富ではなかったと思われる。むしろ東岩瀬駅の完成が、飛び団子が再び注目されるきっかけにもなったのではないだろうか。

鉄道網の整備が進み、大正二年に北陸本線が開通するに至って、飛び団子は東岩瀬の象徴として重要な役割を負うことになる。東岩瀬を印象づけるため、大隈重信の岩瀬来訪時に饗され、これを機として大正四年に東京へ進出するのである。

大正二年九月十七日、大隈重信は共進会視察のため北陸本線を利用して富山に来県した。共進会は、富山県が主催し、東京、新潟、栃木、群馬、滋賀、岐阜、福井、石川の一府八県連合で、北陸本線開通を記念して九月一日から十月二十日まで上新川郡堀川村(現・富山市)において開催され、第二会場として魚津水族館が開館した。大隈は開館日直前の魚津水族館を訪れた後、富山市入りし、翌十八日朝に東岩瀬を訪問し講演を行った。大隈の来県について報じた『北陸タイムス』大正二年九月十七日記事を引く。

伯が今回の共進会を機として来県せらるゝ事となつたのも、要するに、此偉人を利用せんとする地方人民の懇請を容れられたものに外ならぬ、故に吾人は、親しく伯の教を乞ふを得るを光栄とし、熱誠を捧げて歓迎の意を表すると同時に、八十万の県民と共に、此偉人を利用して、益々地方の発展を図らんとするものである、(略)伯の来県は、富山県を広告するの好機会たるや言ふまでも無い話である、(略)

富山の人々には、大隈の来県を機として富山の知名度を高め地域振興を図る狙いがあった。大隈の来県は、北陸本線の開通により東京を中心とした大都市圏と富山が近くなったことを象徴する出来事であった。犬島宗左衛門もまた大隈の来県に東岩瀬振興の期待を寄せ、東岩瀬来訪を懇請した。『北陸タイムス』大正二年九月二十日記事を引く。

東岩瀬町有志犬島宗左衛門等の懇請により大隈伯及び同夫人は浮田博士松原歩兵大佐市島謙吉桜井鷗村家扶等を随へ東岩瀬町より出迎への山本町長犬島助役森正太郎米田サト及び松山上新川郡長等の案内にて昨日午前六時旅館富山ホテルを出発し曙光を浴びて国道線を腕車にて東岩瀬町に向へり(略)斯くて一行は午前六時三十分東岩瀬町に着したるが町端には同町小学生徒全部教員引率のもとに東側に整列して伯一行を出迎へ在郷軍人町有志数十名も又町端に於て伯を迎へぬ、一行は物珍らしげに両側に増列せる町民の間を縫ふて同町素封家米田サト方に到着し伯一行は奥座敷に於て休憩を為せり同家に於ては特に東岩瀬名物「飛び団子」を造りて伯に饗応せるが一行が恰も同家に到着したる際砧の音の如き飛び団子を打つ音を耳にし伯は面白げに其由来を聴取し居られたり

大隈に飛び団子を饗したことは『富山日報』大正二年九月十九日記事にも見えるが、『北陸タイムス』では由来を語ったとも興味深い。犬島はその後、大正四年に「はぎのや」飛び団子を東京で売り出すことになる。『北陸タイムス』大正四年五月十五日記事を引く。

飛び団子と云ふのは東岩瀬町の名物で面白い由来もあるし味もよい、けれども此折角の名物が一向世間に知られずに居るのを遺憾とした同町の犬島宗左衛門君、大に此名物を岩瀬の名物でなく越中の名物日本の名物にしやうと云ふので、近々東京浅草に店舗を開き大々的に此飛び団子を売出す計画だそう、此名物団子のレツテルに巖谷小波に属して得た左の歌を刷り込む筈だとか（歌詞略）

犬島宗左衛門が、東岩瀬町助役であり、地域新聞『日本海之岩瀬』（後に『岩瀬新報』と改称）の発行人でもあったことを考えると、飛び団子の東京進出はやはり団子の販売そのものよりも東岩瀬の知名度向上の狙いがあったと思われる。東京進出記事は、同日の『富山日報』、『北陸政報』も同様に飛び団子の歌を掲載して報じており、犬島が新聞各紙に対して広報活動を行ったものと考えられる。また、『富山日報』大正四年五月十五日記事は、犬島の鉄道各駅における販売計画を報じている。

県下東岩瀬町の名物飛び団子は三百年来の歴史を有し大隈伯の推称を受けたるものにて今や其名内外に噴々たるが今回竹久夢二氏のレツテル巖谷小波氏の由来書を添え東京浅草雷門附近に支店を設け大々的に売出し又東海道著名の各駅にも売出すべき計画にて本月下旬代表者犬島宗左衛門氏上京支店設置準備を為す由なり小波氏が飛び団子のために物したる歌は極めて愉快なるものにて全文左の如し（歌詞略）

以上から、犬島宗左衛門が、北陸本線開通を機に来県した大隈重信の賞美を得たことをきっかけとして、全国に飛び団子を売り出し、東岩瀬の知名度向上を志したことが知られる。その際、大正四年、やはり北陸本線を利用して富山に來県した竹久夢二に包装紙のデザインを依頼し、東京で活躍する富山出身の大井冷光に由来書を、また大井冷光が師事する巖谷小波に歌の歌詞を依頼してリーフレットを制作し、東京で通用する体裁を整えて進出に臨んだ。さらに東海道線主要駅での販売計画も報じられている。翻ってみると、

明治四十二年「北陸タイムス」に発表された飛び団子由来譚もまた、前年の東岩瀬駅の完成および富直線の開通と無縁ではないように思われる。

鉄道網の整備は、富山の人々に、東京に対して存在感を主張する必要性を感じさせる契機となった大きな出来事であり、ひいては近代国家としての日本において富山がいかにあるべきかを意識させる機会となったと考えられる。明治末から大正初期にかけて鉄道網が整備されたことよって、飛び団子由来譚は、富山県外の人々に東岩瀬の存在を知らせるために再構成された。その再構成された由来譚が、現在に伝わる基本形となっている。

二、大井冷光「史実お伽飛だんご」と小柴直矩の二つの飛び

団子由来譚

前掲の小柴直矩『越中伝説集』の記述によれば、明治四十二年の南水「お伽飛団子」は、小柴が南水の筆名で執筆したものであり、冷光「史実お伽飛だんご」の資料に用いられたと考えられる。一方、『越中伝説集』所収の由来譚は著者名が明記されていないが、小柴はあるものの冷光作とほぼ同文である。すなわち、冷光作は、小柴が明治四十二年に記した文章を資料として制作され、その後、小柴『越中伝説集』は冷光作を踏襲したと言える。以下に対照表を示す。^⑧

(A) 『北陸タイムス』明治四十二年九月五日十二頁

お伽噺 飛団子 南水

(2) 東岩瀬の町から水橋に出る途に、暗籠(こんも)りとした大木の松原があり、

(3) 是は今でこそ綺麗な格好のよい浜の松原となつてますけど、昔は、屋でも通るのが恐ろしい如うな気持ちのする松原でありました、所ろが日の暮になると此松原に妖怪(ばけもの)が出ると言ふ評判が、それからそれえ伝はりまして、日が没ると誰も此所を通行するものが有りませぬ

(5) 或日のこと、

水橋の方から、十七八の花のやうな娘と、五十格好の父爺(おやぢ)さんと、屈強な□□(なん)と三人で岩瀬の町に来懸つたのですが、

(7) 松原の中で娘が腹痛を起して、介抱に手間取りましたため、

此怖ろしい松原の中で日が暮れたのです、時は丁度秋の半でありまして虫の音を聴きながら夜途を踐(ふ)むには洵(まこと)に気持ちのよい時節ですが、怖いと思ふと虫の音も耳に入らず、只だ神様や、仏様の御助けを力に頼んで、はやう此の松原を通り抜けやうと、気を躁(あせ)りました、

(8) ところが、モウ五丁程で杜を離れると言ふ場所で、大変な嵐が起ります、大雨が降つて来(以下本文欠)

(本文欠)

(B) 巖谷小波作歌 大井冷光篇述「史実お伽飛だんご」(はぎのや(東京神田区通新石町二十一番地)、刊行年不記載)

飛だんご 大井冷光

(1) 越中の国の真中から日本海にのぞんだ海辺に、東岩瀬といふ町があります。(2) この東岩瀬町から右手へ二里ばかり、松青く沙白い浜は越中舞子ともいふてこの国の名所の一つとなつて居ります。

(3) 今こそこの様な景色の好い処ではありませんが、むかしは此処は恐ろしい森つゞきで、屋でも魔物が出るといふところ、それで北陸道を旅する人はこを通る時はきつと東岩瀬で魔除け厄除けの団子を喰べることとなつて居ります。(4) この魔除の団子は東岩瀬の飛団子といひますが、其にはまた面白い由来があるのです。

上

(5) むかし、むかし、ずつとむかしのある秋の日に、この東岩瀬の町から舞子の松原を旅する老人(としより)がありました。老人は優しい娘と、召使とを連れて居りました。

(6) この娘は老人にはたつた一人しかない大切な愛娘であつたのです。三人は底気味の悪いこの松原道を脇目も触らずにいそぎましたが、その中にどうしたことが娘は次第に道が遅れがちとなりまして老人は不思議におもつて見ますと、顔色はいつか真蒼になつて唇をかたく結んでをります。(7) 「おう娘、どこを痛いところもあるのか」「いえ……すこしばかりお腹がいたみまして……」「十二腹痛みがある？それはいけない、ササこちらでお休み、これ作造や、何処ぞで水を汲んで来ておくれ、氣つけ薬をふくませませう。」

と老人はあわてて娘を傍の松の根に休ませて、懐から反魂丹の包を取り出して飲ませる、背や腹をさする、大騒ぎで介抱をいたしました、やがて少しばかり痛みももうすらぎましたので、「まづまづよかつた、日の暮れぬ中にいそぎませうぞ、林の中で暗くなつては大へんだから。」と三人はまたも道を急ぎました。

(8) さてこの長い松林も、あと七八丁でぬけられようといふ時、今まではまことに穏かであつた日和が、不意に冷たい風がサツと吹きおろして来たと思ふとポツリポツリと顔をうつ大粒の雨「おや夕立でござります。」

「これは大へん、早く早く……。」三人はあわて騒ぐうちに忽ち四辺が真暗となり、闇を覆すやうな大夕立となりまして、するとその中に凄まじい響と共に、見るも身の毛のよだつ魔物の姿が現れました、矢庭に娘の髻(たぶさ)を掴んだと見ますと、その儘魔物も娘も掻き消すやうに姿が消えてしまひました。「あれ娘が!」「お嬢様が!」

老人と召使とは空をにらんで騒ぎましたが答もありません、老人は余りのかなしさにはつたりその場にたふれましたが、到頭そのまゝ、息が絶えてしまひました。

(C) 小柴短矩『越中伝説集』(富山県郷土史会、昭和二十四年、中田書店、昭和十二年初刊)

1 魔除けだんご

(1) 越中の国の真中から富山湾にのぞんだ海辺に東岩瀬港があります。(2) この港から右手へ約二里余り松青く沙白い浜は越中舞子ともいつてこの国の名勝の一つとなつて居ります。

(3) 今こそかような景色の勝れた所ではありませんが、昔はここが恐ろしい森つゞきで屋なお暗く魔物が出るというところ、それで北陸街道を旅する人はこを通る時はきつと東岩瀬で魔除けのだんごを喰べることとなつて居りました。(4) この魔除けのだんごを東岩瀬の飛びだんごといひ、これには面白い由来があるのです。

2 可愛い娘の遭難

(5) 昔 この東岩瀬から松原を旅する老爺があり、この老爺は優しい娘と召使の下男とを連れていました。

(6) この娘は老爺のタツタ一人しかない大事な娘であつたのです。三人は底気味の悪いこの松原を脇目も触らずに急ぎましたが、その中にどうしたことが娘は次第に遅れ勝ちとなりますので老爺は不思議に思つて見ますと、いつか顔色が真蒼になつて唇も堅く結んで居ります。(7) 「おう娘、どこを痛い所もあるのか」「いえ……すこしばかりお腹がいたみまして……」「なに腹痛みがあるのか……それはいけない。さあこちらでお休み、これ忠吉やどこぞで水を汲んで来ておくれ、氣つけ薬をふくませませう。」

と老爺はあわてて娘を傍の古松の根元に休ませ、懐中から腹薬を取り出して飲ませ背や腹をさする大騒ぎで介抱いたしました、漸く痛みももうすらぎましたので、「まづまづよかつた。どれ日の暮れぬ中にいそぎませうぞ、森の中で暗くなつては大変だから。」と三人はまたも道を急ぎました。

(8) やがてこの長い森も、もう七八丁で抜けられようという中に今までは誠に穏やかな日和であつたのが、不意に冷たい風がサツと吹き下して来たと思ふとポツリポツリと顔をうつ大粒の雨「おや夕立でござります。」

「これは大変早く早く。」三人はあわて騒ぐ中に忽ち四辺が真暗となり凄まじい響とともに、見るも身の毛のよだつ様な魔物が現れまして矢庭に娘の髻をつかんだと見るそのまゝ、魔物も娘も掻き消すやうに姿が消えてしまひました。「あれ娘が!」「お嬢様が!」

老爺と下男とは空を睨んで騒ぎましたが何のこたえもありません、老爺はあまりの悲しさにはつたりその場に倒れ、到頭その儘死んでしまひました。

中

(9) 茲に東岩瀬の片ほとり、大村の岡の上に城を構へた豊田豊後守といふ強い武士(さむらひ)がありました。越中五大将の一人と呼ばれ、彼の川中島の戦ひで有名な上杉謙信もこの豊後守には幾度か悩まされたといふ、まことに名高い勇将でありました。

(10) ある日豊後守はこの舞子松原で魔物に娘が攫はれたといふ話を聴きますと、大層腹を立て、

「おのれにつつき妖怪変化、某(それがし)の領内に現はれて旅の者を悩ますとは不届千萬な奴ぢや、いで一撃ちにしめて呉れよう。」と逸りにはやつて立ちかゝりますと、家来の人々は驚きました。

「御立腹の程は御尤もでございますが、如何様対手(あいて)は影も形もない魔物。」

「さすにも殺すにもこりや容易な業ではござりませぬ。」

「何卒充分ともに御用心遊ばされて。」

「是非ともやつがれ共を召連れ下されたく存じます。」と口を揃へて申し出ますので、さすが大胆な豊後守も、なる程と合点し、

「それ程そち達が氣遣ふならば召し連れもしやう、然し堅く申し付けておくことは愈よ魔物に出逢ふたときには此方から呼ぶまでは必ず某に近う寄つてはならぬぞ。」

下

(11) 頃しも八月、まことに月のよい晩でありました。豊田豊後守は唯独り松原の奥深く分け入り、俄かに空が曇つて来て、電(いなづま)が光る。雷が鳴る、浜に打ち寄せる浪は次第に荒れ狂つて今にも松原を呑みさうにも思はれる、恐ろしい時化となりました。

この場合、大抵の人なら直に腰を抜かして逃げもしませう、然し豊後守はさすがに名高い勇将だけにビクともせず、闇の中に仁王立ちに突立つて、「そろそろ出て来ると見えるな」と笑ひながら待ち構へて居りました。

(12) その中に右手の森から物凄い唸りがきこえると、ガバツとばかりに飛びついたので毛むくじやらかな大きな魔物、豊後守はそれと見るより弓や刀もまどろし、その場に組んでかかりました。

さあ魔物も強ければ豊後守もなかなか強い、双方上になり下になつて闘ひましたが、勝負は何時つきさうにも見えません、その中にさすが剛氣な豊後守も綿のやうに疲れましたのでいつか魔物に組み敷かれました。

(13) 豊後守はともこのまゝでは勝てまいと思ひましたから、かねて控へて居る苦の家来を呼ぼうとしたましたが声がたたない、恰度(ちようど)その時、何処からかボンと豊後守の口の中へ飛び込んだものがあります。ツイ喚べて見るとなかなかうまい、夢中にのみ込みましたが、そのせいでありませんか、忽ち元気を盛りかへしましたから、再び跳ね起きますと、今度は首尾よく魔物を下に組み敷いて到頭胸元を突き刺してしまひました。

3

(9) ここに東岩瀬の片ほとり、大村の丘上に城を構へた豊田備後守という強い武士がありました。越中五大将の一人と呼ばれ、かの川中島の戦いで有名な上杉謙信も幾度かこの備後守に悩まされたといふ誠に名高い勇将でありました。

(10) ある日のことこの舞子松原で魔物に娘がさらわれたといふ話を聴きますと大層腹を立て

「おのれにつつき妖怪変化、某(それがし)の領内に現はれて旅の者を悩ますとは不届千萬な奴ぢや、いで一撃ちにしめて呉れよう。」と逸りにはやつて立ちかゝりますと、家来の人々は驚きました。

「御立腹の程は御尤もでございますが、如何様対手(あいて)は影も形もない魔物。」

「さすにも殺すにも、こりや容易な業ではござりませぬ。」

「何卒随分ともに御用心遊ばされて。」

「是非ともやつがれ共をお召連れ下さるようお願いします。」と口を揃へて申し出ますので、さすがの大胆な備後守もなる程と合点し、

「それ程そち達が氣遣うならば召し連れもしよう。しかし堅く申し付けておくことは、いよいよ魔物に出逢ふ時はこちらから呼ぶまでは必ず近う寄つてはならぬぞ。」

4

(11) 頃しも八月空暗れ渡つた月のよい晩でありました。備後守は淋しい道を唯独り松原の奥深くまで分け入り、俄かに空が曇つて電(いなづま)が光る。雷が鳴る、浜に打ち寄せる浪は次第に荒れ狂つて今にも松原を呑みさうにも思はれる、恐ろしい時化となりました。

かかる場合大抵の人なら直に腰を抜かして逃げもしませう、しかるに備後守はさすがに名高い勇将だけにビクともせず闇の中に仁王立ちに突立つて、「そろそろ出て来ると見えるな」と笑ひながら待ち構へて居りました。

(12) その中に右手の森から物凄い唸りがきこえるとガバツとばかり飛びついたので毛むくじやらかな大きな魔物、備後守はそれと見るより弓や刀もまどろし、その場に組んでかかりました。

さあ魔物も強ければ備後守もなかなかうまい、双方上になり下になつて闘ひましたが、勝負がいつつきさうにも見えません、その中にさすが剛氣な備後守も綿のやうに疲れましたので、いつか魔物に組み敷かれました。

(13) 備後守はともこのまゝでは勝てまいと思ひながら、予て控へて居る苦の家来を呼ぼうとするが声がたたない、丁度その時どこからかボンと備後守の口の中へ飛び込んだものがあります。ツイ食べて見るとなかなかうまい、夢中でのみ込みますと、急に元気を盛りかえましたから再び跳ね起し、今度は首尾よく魔物を下に組み敷いてとうとう胸元を突き刺してしまひました。

5

(13) 備後守はともこのまゝでは勝てまいと思ひながら、予て控へて居る苦の家来を呼ぼうとするが声がたたない、丁度その時どこからかボンと備後守の口の中へ飛び込んだものがあります。ツイ食べて見るとなかなかうまい、夢中でのみ込みますと、急に元気を盛りかえましたから再び跳ね起し、今度は首尾よく魔物を下に組み敷いてとうとう胸元を突き刺してしまひました。

(13)

腰の太刀を抜きはなち、首(しゅび)よく妖怪の氣息の根を止めました

(12)

街道の右側の草叢の中に何か怒り吠える声があると思ふと、案の定妖怪が、草を蹴ちらして飛び出し、藪地(まっしぐら)に豊後守の前に進つて来て、いきなり噛み殺さつてしまふ。

豊後守は怖(おそ)くともせず、オノレ畜生奴と、身をかはし足を攫(つか)み力に任せて地の上へ押へ付け、妖怪の上に馬乗りになつて、

だけに少しも慌てず、頻りに妖怪の出るのを待つてましたが、

〔14〕そこで「オイ、」と、大音声あげて、豊後守は、家来を御呼になりました、スルト最前より物陰で様子は何うで有らうと気を揉んでゐた家来共は、我先きにと遣つて来て、大将の御側ちかく駆け寄り、見ますると大將も、妖怪も真紅(まつか)な血に染つて倒れてゐます、是は大要と家来の者共は傍(あたり)の小河で水を汲んで大将の顔に吹き懸けよう／＼と大將を活かへらし大将の身体に一点の瘻のないのを喜びましたが、さて是程の御疲労で我々共を大声に御呼立になりましたは不思議で御座りますと申上たら、大將は夢の覺めたやうに、俺れは妖怪を仕留て気が緩んで綿のやうに身体の疲労たとき、声を出さうも出ないのて有つたが、

〔15〕不思議に団子の如うなものが飛んで来て口に入つてから腹に力が出て来て汝等と呼んだことを夢現に覺えて居ると言はれ、主従もろとも無事を喜んで御城に帰り、晴れ渡る待宵の月を賞めて妖怪退治の凱旋の酒宴(さかもり)を致しました

それから豊後守は、毎年妖怪退治の日になると、団子をこさえて、家来の者共と茶話会を開き、そのをりの話をして記念としたそうです、

〔16〕東岩瀬の飛団子は此話が因縁になつて出来たものです、昔々岩瀬街道を往く人はみんな厄除けのため此の飛団子を食ふてゆきました

〔14〕「魔物をしとめた、ものども来たれ！」と呼はる声に家来の人々馳せつけましたが、もうその時は時化もすつかりおさまり、魔物の姿もかき消えて、松の枝には大きな月がニコニコと笑つて懸つて居ります。

〔15〕それにしても不思議なことは何処からともなく飛んで来た団子の靈験(きくめ)、これが全く魔物の退治をさせてくれたものだ、と豊後守は大ききよ／＼と、それから後毎年この魔物を退治した日になると、団子をつくり、家来と共に祝ふのをきまりとしました。

〔16〕その団子の評判がいつかこの土地の名物となり、越中舞子を通るものは屹度この東岩瀬町で厄除け魔除けの飛び団子を喰べるならひととなりました。これがそもそも飛び団子のいはればなし。めでたしめでたし。《終》

〔16〕飛だんご 巖谷小波先生作歌
後藤丞之輔先生作曲

一 飛だんご 飛だんご
何所から 飛んで来た
越中舞子の松原に
さつと天から飛んで来た
二 飛だんご 飛だんご
何しに 飛んで来た
化物退治の大名に
力を貸して 飛んで来た
三 飛だんご 飛だんご
見事に 飛んで来た
加賀の太守の御前迄
飛んで太守に褒められた
四 飛だんご 飛だんご
けなげに 飛んで来た
大隈伯の掌の上
のつて舌まで鳴らさせた
五 日本一の 飛だんご
鬼まで 払ひましよ
桃太郎さんのお腰にも
付けてやり度い飛だんご

〔14〕「魔物をし止めた―者ども来れ！」と呼はる声に家来の人々駆けつけましたが、もうその時は時化もすつかりおさまり魔物の姿もかき消えて、大きな月がニコニコと笑つて松の枝に懸つて居ります。

〔15〕それにしても不思議なことはどこともなく飛び来ただんこの靈験、これが全く魔物の退治をさせてくれたものだ、と備後守は大いに喜んで、その後毎年この魔物退治の日になると必ずだんごをつくり、家来と共に祝うのをきまりとしました。

〔16〕それがこの土地の名物飛びだんごの由来話であります。

〔16〕6 飛びだんごの歌
巖谷小波先生作

(一) 飛んだ飛んだ 飛びだんご
どこから 飛んで来た
越中舞子の 松原に
さつと天から 飛んで来た
(二) 飛んだ飛んだ 飛びだんご
なにしに 飛んで来た
化物退治の 大名に
力を貸して 飛んで来た
(三) 飛んだ飛んだ 飛びだんご
見事に 飛んで来た
加賀の太守の 御前まで
飛んで太守に 褒められた
(四) 飛んだ飛んだ 飛びだんご
けなげに 飛んで来た
大隈伯の 掌の上
のつて舌まで 鳴らさせた
(五) 日本一の 飛びだんご
鬼まで 払ひましよ
桃太郎さんのお腰にも
つけてやり度い 飛びだんご

対照すると、(A) 南水のみ大きく相違し、(B) 冷光と、(C) 小柴とは、内容の一致度が高い。

まず、(16) 巖谷小波作詞の歌は、(B) 冷光と(C) 小柴にあり、小柴はあるが内容に大きな相違はない。「加賀の太守」、「大隈伯」が登場し、近世、近代の東岩瀬名物飛び団子の歴史紹介になっている。「加賀の太守」は、小柴『越中伝説集』に「何か岩瀬の飛びだんご、心に残るは娘茶屋」と引用されている加賀万歳「北国下道中」などによるもので、近世、参勤交代路であった北陸街道の東岩瀬宿に加賀藩主が立ち寄ったことを記している。大隈重信の東岩瀬来訪は、先述のとおりである。

次に、由来譚本文を見てみたい。話の枠組はいずれも酒呑童子や桃太郎の話を想起させるもので、団子が飛んできた点が特徴である。(A) 南水と(B) 冷光の相違を見ると、(A) 南水が水橋から東岩瀬に向かうと記していたり、妖怪は倒したが家来を呼ぶ力がなかったところ団子が飛んできたこと記すのに対して、(B) 冷光は内容に矛盾も少なく、団子の効果を活かしている。また、時代設定は(9)に明記されているが、(B) 冷光の場合、(3)「魔物」、(5)「召使」、(8)「髻」といった語の使用によって時代性を臚化して一般化しており、近代の童話の読者になじみやすいと思われる。会話体や感情移入しやすい文言を盛り込んでもある。以上が、大井冷光によって再構成された飛び団子由来譚の特徴と言える。

大井冷光は、明治四十三年に上京し、巖谷小波、久留島武彦のもとで少女雑誌の編集者としてのみならず、多数の童話を翻案、創作し、口演活動も活発に行った。巖谷小波門下の蘆谷蘆村らと少年文学研究会の同人として国内外の童話研究および童話創作も行っていた。冷光の蔵書は現在、富山県立図書館蔵冷光文庫に収蔵されており、その読書体験の一端を窺い知ることができる。世界中の童話の翻訳、原書を幅広く所蔵しており、また、語り聞かせや童話の研究書も多数見られる。飛び団子由来譚の再構成は、東京で国内外の童話の知識を持ち、かつその方法を学んだ人物によって行われたことが重要である。(C) 小柴が、(B) 冷光を踏襲したのは、童話の方法によってわかりやすく整理されていたためではないだろうか。

一方で、(B) 冷光と(C) 小柴にも、文言に小異がある。例えば、(1)「東

岩瀬」と「東岩瀬港」、(3)「北陸道」と「北陸浜街道」、(5)「老人」と「老爺」、「召使」と「召使の下男」、(7)「作造」と「忠吉」、「反魂丹」と「腹薬」、「林の中」と「森の中」、(8)「松林」と「森」、「娘の髻」と「娘の髻」、(9)「轡田豊後守」と「轡田備後守」などである。(1) (3)などは(C) 小柴が具体性を高めていると言えよう。(7)「反魂丹」は、小柴自身は昭和十二年初刊で踏襲していたものが、再刊時に手が加えられて「腹薬」に変わったのであるが、(B) 冷光が「反魂丹」を記したのは、大都市圏で富山を印象づける効果もあると思われ興味深い。

また、こうした細かな文言の差異に注目すると、後の時代に書かれた飛び団子由来譚が何を参照したかがある程度推測できる。一つの时期的な区切りとなるのは、昭和五十二年、館盛英夫『戦国の七寸五分(轡田)一族』の刊行である。同書は、飛び団子由来譚を網羅的に調査して各本文の引用を列記しており資料的価値が高く、私家版ではあるが富山の地ではこの後、多く参照されたと考えられる。そこで、昭和五十二年までに発表されたものに限定して、本文中の小異を手掛りに、何を参照して記したのを見るとき、概ね次のようになる。

大井冷光「史実お伽飛だんご」を参照したものは、まず、(イ) 小柴直矩『越中伝説集』、(ロ) 東岩瀬尋常高等小学校「はぎうら」(昭和八年一月)が挙げられる。いずれも昭和十年頃までに発表された。(ロ)は、(5)「召使」、(8)「松林」、「娘の髻」、(9)「轡田豊後守」などの語が(B) 冷光と一致するので、これを参照したと推測される。以下に、便宜上の目安として本文系統を示す。

(イ) 小柴直矩『越中伝説集』系統の本文

白鳥省吾「伝説あちこち 飛びだんご」(『小六教育技術』八月号、

昭和三十二年八月)、石橋幸作「米沢の飛団子」(『みちのくの駄菓子』

昭和三十七年)、八尾正治「飛びだんご」(『伝説とやま』昭和四十六年)

(ロ) 東岩瀬尋常高等小学校編「はぎうら」系統の本文

「飛だんご」(富山県女子師範学校附属小学校編『高志の白鷹』昭

和九年)、宮井定義「飛びダンゴ物語」(『中学時代一年生』七月号、

昭和三十七年七月)、林潤次「飛びだんご」(『東岩瀬郷土史近代百年

のあゆみ」昭和四十九年)

資料数が多くないため、傾向を論ずるのは適当でないが、(イ)は、白鳥、石橋が県外の執筆者である。なお、白鳥は富山にしばしば来県したことで知られる。(ロ)の執筆者は全て富山の人であり、昭和五十二年以降もあわせて、富山の人が執筆者である場合がほとんどである。一部、県内の人から情報提供を受けたことを明記する県外の執筆者もある。富山県の民話・昔話の資料として(イ)が広く知られていたと見ることもできようが、(ロ)の『高志の白鷹』も同様に民話・昔話の基本資料として参照されることが多く一概には言えない。全体としては、富山の人が執筆者である場合が多く、主として初等教育を中心とした郷土教育および郷土研究の場で取り上げられてきたことがわかる。

三、『岩瀬新報』「名物飛だんご」、藤森秀夫「飛団子」と『風俗画報』「岩瀬の飛団子」

犬島宗左衛門は、地域新聞『日本海之岩瀬』の編集発行人でもあった。明治四十一年六月二十三日に第一号を発行、明治四十四年三月三十七号から『岩瀬新報』に改称し、隔週発行となった。¹⁰⁾『岩瀬新報』大正五年一月一日記事には、大正四年の出来事として、五月に犬島宗左衛門が東京神田に名物飛団子の売店を設けたとある。また、『岩瀬新報』大正五年十一月五日から十二月二十日まで、四回連載記事「岩瀬の由来記 名物飛だんご」が見える。現在残る本文は、連載第二回分を欠き、一、三、四回分のみである。長文となるが以下に全文を引用する。

名物飛だんご停車場構内売子の呼声や飛んでく東都のたゞ中に飛び遂に大隈侯の手の掌まで飛んだと云ふ飛だんごの由来はざつと怎うである

巖谷小波先生の歌や大井冷光先生のおとぎ話には大小違つてゐる点もあるが戦国時代に今の大広田村字大村に轡田備後守の居城が築かれてあつたので其当時と云ふものは備後守の勢力は却々あなどり難いものであつた

其時代東岩瀬の地形と云ふものは随分変手古になつたもので今の鬼ヶ瀬と云ふ処は浜辺で竹林を以て蔽ひ一里四方と云ふものは丸で竹ばかりの藪で昼尚ほ暗迷と云ふ位な物騒な竹藪であつた事は間違ない訳であつた

処が此の竹藪にちよいと物騒なことがある通行人が此の藪へ入ると入つた切り出て来ない此れが一帶の評判となつて誰れも此の藪を通り行する者居なくなつた此の事が備後守の耳へ入つた(続く)

(引用者注)以上十一月五日第一回
これを聞き給ひし備守烈火の如く憤りいひたりなく其無礼なる言語いで余の腕前を見よと打つて掛れば怪鬼心得たりとて此れに応じ相互に必死の戦ひに及んだ

其惨凄言はん方なく互に敗つ劣らず半日も戦ひたるも勝負見えず面倒なりとて組打せんと備後守言給ひは怪鬼も亦之れに応じ下へ上つこれ亦勝負決せず遂に相方呼絶えて打墮れたり

かくすること半日折から天俄かに雲り雷雨閃めき霰となり雹となり降り来つて備後守の口に入りたれば備後守蘇生して四囲を望むれば夢の如くにして夢にあらざり怪鬼と戦へし族は墮れ居れば今は勇氣百倍して何の苦もなく怪鬼の首をかき落し凱歌を唱ひて打上げたりと

備後守は此の霰此の雹降らずして余が口中に入らざれば余の一命も絶えたるべし飛だんごを拵へ家中の者へ分配したり是れ即ち名物飛だんごの謂れなり(続く)

(引用者注)以上十二月五日第三回
飛だんごの謂れと云ふのは今言ふて来た訳なので家中の面々へ分配したのは抑も始めであるが之を見倣ふて百姓町民が拵へて喰する様になつた

拡りくして遂に今の田の尻屋の先祖が飛だんごとして売出したやうになり岩瀬町内の至る飲食店に売出しのが名代の飛だんごとして遠近に知られることゝなつたのだ

此れが中古になつて所謂名物に甘いものなしと云ふ例へに漏れず此の名物飛だんごの名も萎れて行く傾きがあつたので色々と工風を擬して売拵めに苦心してゐた

計らざりき大隈侯(当時伯爵)北国漫遊の途次岩瀬に立寄られ米田家で一泊せらるゝ事となつて此の名物飛だんごを呈したが非常に賞美せられ遂に名物飛だんごが東京神田の真中や東岩瀬駅の構内に売られる様になつた(完) (引用者注―以上十二月二十日第四回)

注目すべきは、冷光が記さなかつた、飛び団子はそもそも何であつたかを記している点である。『岩瀬新報』記事は、天から雹、雹が降つて来てこれを食べたところ力を得たとする。また、冷光が轡田豊後守と記すのに対して、小柴『越中伝説集』同様、轡田備後守と記している。⁽¹³⁾

独文学者で詩人、童謡作家の藤森秀夫は、大正十五年に旧制富山高専学校教授となり、二十三年間富山市に居住した。藤森『詩謡集 稲』(光奎社、昭和四年)所収「飛団子」は、詩と詞書で構成されており、詞書は次のようなものである。

東岩瀬駅で名物飛び団子を売る。昔、岩瀬の近傍に狒々がゐて、或る士が征伐に出掛けたが、狒々に押へられて危かつた。然るに天の一方より小粒の団子が雹の如くに降り土の口に落ち、それに力を得て、士は怪物を退治したと云はれてゐる。

「或る士」が「狒々」を退治したとする点が特徴である。また、「雹の如くに」とするのは、『岩瀬新報』に通じる。前掲の明治四十二年『北陸タイムス』記事にも、雹や霰の文言は見られないが、小柴直矩や大井冷光の由来譚とは別に、こうした伝承があつたとも考えられる。

ところで、東京で刊行された雑誌に次のような記事がある。明治三十八年六月の『風俗画報』第三一八号「諸国飲食の名物」記事記載の「岩瀬の飛団子」である。以下に引く。

上新川郡岩瀬町の名産なり飛団子は至て小粒にして之を売者は片荷の巻き藁に此団子十斗り宛申にさし豆の粉を附け幾本も指し片荷には小き空白と小き杵を摺ひ町の辻或は寺の門前などに荷を卸して彼の空白の縁を小き杵にて叩くなり子供等其音を聞て忽ち寄り集り二本三本を買ひ求むるなり一本の価は大概三厘位なり

『風俗画報』記事は、岩瀬の名産と明記しており、越中の名物として、奈呉の浦の珊瑚海老、愛本の粽、五箇山の栃団子と蕨餅、天池の力餅とともに

紹介されている。

一方、近世には江戸をはじめ京、大坂にも飛び団子があつた。享保十九年刊の菊岡沾涼『本朝世事談綺』の記事はよく知られたものであるが、正徳頃、両国橋東詰の松屋三左衛門という左官がはじめたもので、はじめ団子の形を長尾家の鋒先に準えて景勝団子と言つたが、武人の名を使用するのは無礼として、越後団子、飛び団子などと称するようになったという。⁽¹⁴⁾「かね勝」、「かにかち」などとも称した。滝沢馬琴『流行商人絵詞廿三番狂歌合並附録』には、明和から安永頃のこととして次のような記述がある。

かね勝団子

かつぎ屋台といふものに、ちひさき白をおきて小うたを唄ひつゝ、団子をつきたり、白のふちをひやうしよく、うち鳴らしつゝ、つくがごとくすれば、団子の飛びめぐるを、わらべらは興ある事に思ひたり⁽¹⁵⁾

また、喜田川守貞『守貞謾稿』所載の「飛団子」には、次のように見える。

白杵ヲ持巡リ、ウルモアリ。一卷毎二杵ヲフリ、白ノ周ヲタ、キ鳴シ、其音ヲ以テ兒童ヲ集ム。⁽¹⁶⁾

以上は、いずれも江戸発祥とされる飛び団子の説明である。傍線部は、空白かどうかの違いがあるが、『風俗画報』の岩瀬の飛び団子と同様、白の縁を叩くとあり、『守貞謾稿』がその音で子どもが集まるとする点も共通する。

『流行商人絵詞廿三番狂歌合並附録』は、小さい白と杵で団子をつくると団子が飛びめぐり子どもが喜ぶと記し、飛び団子の名称由来となつてゐる。また、『守貞謾稿』は引用文と記事の位置が離れるが、手指の間から四個の団子をひねり切つて、二メートルほど離れた盤の中に投げ入れる様が空を飛ぶようであるとも記している。⁽¹⁶⁾こちらも由来と捉えられる記述であり一様ではない。

『風俗画報』には、名称由来そのものは記されていないが、『流行商人絵詞廿三番狂歌合並附録』や『守貞謾稿』などと同様であつた可能性も否定はできない。

近世、東岩瀬の飛び団子について記した資料は、名物であることを記すのみで、販売形態や名称由来に言及するものは管見の限り見当たらない。『風俗画報』が東京で刊行されていることも考慮する必要はあるうし、また、複数の資料を安易に結び付けて系統立てることによる弊もあらうと思われるが、推測としては、岩瀬の飛び団子も江戸のそれと同じ販売形態であつて、

雹が団子の正体であるというような名称由来は、岩瀬の地で付加された可能性も考えられる。大井冷光や小柴直矩が、団子や魔物の正体に関する説を知っていたかどうかは不明であるが、正体を記さないことで飛び団子の不思議さは保たれる。

四、飛び団子をめぐる熊野地蔵と轡田豊後守の関連

富山県の地名辞典として全国で最も手軽に利用できるもの一つに『日本歴史地名大系十六 富山県の地名』（平凡社、平成六年）がある。この「大村」項に次のような記述がある。

当地には史跡・伝承が多い。（略）魔物にさらわれた娘を救うため轡田豊後守が熊野権現に祈ったところ、口中に団子が飛び込み急に力がわき起り魔物を退治したという飛び団子伝説にちなむ熊野地蔵などがある。

熊野地蔵は現在、富山市海岸通にあり、富山市教育委員会が平成二十三年に設置した「飛びだんご伝説」と「熊野地蔵」と題した解説板が立っている。本文を以下に引く。

戦国時代（十六世紀後半）、東岩瀬から浜黒崎まで続く美しい松原に魔物が現われ、人々を苦しめるといいうわさがありました。その話を聞いた大村城主（大村城跡は富山市海岸通にある瑞円寺周辺です。）轡田豊後守は魔物を退治しようと、単身松原の奥深く分け入りしました。すると急に空が暗くなり雷鳴が轟く嵐の中、突如として毛むくじらの大きな魔物が豊後守に飛びかかってきました。両者のすさまじい格闘が続き、剛毅な豊後守も力尽き、とうとう魔物に組みつかれてしまいました。その時、思わず「熊野権現、助けたまえ」と心に祈ったところ、どこからか口の中にだんごが飛び込みました。夢中でそれを飲み込むと急に力が湧き出し、魔物をしとめることが出来ました。これが「飛びだんご伝説」です。

その後、毎年魔物を退治した日になるとだんごを作って祝い、このだんごの評判が土地の名物となりました。そして、厄よけ・魔よけの飛

びだんごを食べて旅をする風習となりました。この伝説とゆかりの深い「熊野地蔵」があります。

解説板が最初に設置されたのは昭和五十年で、平成二十三年に改められた。昭和五十年設置の解説板「飛びだんごくまの地蔵」の本文を以下に引く。

乱世の戦国時代（今から四〇〇年程前）東岩瀬から浜黒崎まで美しい松並木が続いていた。この松原に魔物が現われ往来の者を苦しめるといいうわさがあった。これを聞いた武名高き大村城主轡田豊後守は大いに怒って魔物退治に出かけるといいだし、単身松原の奥深く分け入った。にわかには大地が暗くなるや嵐の中から突如として飛びかかった毛むくじらの大きな魔物、互に上になり下になりの大格闘。勝負はつきそうもなくさすがの剛毅な豊後守も身体綿の如く疲れてしまった。その時どこからか飛んできて口の中に入っただんごのようなもの夢中でそれをのみ込んだ豊後守、急に元気を盛り返し魔物を組みしくや刀でその胸元深く突き刺しとめた。その後毎年魔物を退治した日になると家来と共に祝うのをきまりとした。このだんごの評判が土地の名物となり厄よけ、魔よけの飛びだんごを食べて旅をするならいとなったといわれている。又その魔物を祭ったのがこのくまの地蔵という。『東岩瀬郷土史』より

傍線部は、大井冷光作を基本形とした本文にもとづく想定できる部分である。二重傍線部が、地蔵と飛び団子の結びつきである。昭和五十年解説板は退治した魔物を祀ったのが「くまの地蔵」であるとす。一方、平成二十三年解説板および『日本歴史地名大系十六 富山県の地名』は、地蔵は何を祀ったものか明記しないが、轡田豊後守が熊野権現に祈ったところ団子が飛んできたことを記し、飛び団子伝説と関わりがあるとす。この間に刊行された館盛英夫『戦国の七寸五分（轡田）一族』（私家版、昭和五十一年）に、八田清信「熊の地蔵」（出典未詳）の引用紹介があるが、ここに館盛の自宅の敷地内にある「くまの地蔵」は、熊野神社の祭神を祀ったものとする言が見える。八田は新聞記者で、長年イタイイタイ病を取材し著書『死の川とたたかう』（偕成社、昭和五十三年）がある。館盛は、藤森秀夫「飛団子」

も引用している。

館盛著書と小柴『越中伝説集』の両方と共通する語句を持つ書がある。『県別ふるさとの民話 富山県の民話』（偕成社、昭和五十七年）所収の「岩瀬のとびだんご」である。文章の構成や文言は基本的に小柴『越中伝説集』を踏襲するものであるが、轡田豊後守が「熊野権現、たすけたまえ」と祈つて団子が飛んできたとする点、また魔物の正体を「大ヒビ」とする点は、館盛著書に引用される八田、藤森の文章に通じる。『富山県の民話』の解説は、詩人、児童文学作家で郷土文学研究者でもあった稗田董平が執筆しており、「戦国の武将、轡田豊後守の武勇談で、熊野信仰とむすびついています」と記している。八田は轡田豊後守が熊野権現に祈つたとは記していないので、この点は、『富山県の民話』に特徴的な記述と言えよう。これ以後、『日本歴史地名大系十六 富山県の地名』を含め、熊野権現に祈念して団子を得て魔物を退治したと記すものが複数確認できる。

一方、『北日本新聞』平成三年十一月二十三日記事に「くまの地蔵」に関する次のような記述が見える。

高さ四十七センチの素朴な石造り。横には、江戸時代後期の文政三年（一八三〇）、あるいは同五年の文字が刻まれているが、はっきり読み取れない。いずれにしても、戦国時代、この地に城を構えた轡田豊後守の魔物退治飛びだんご伝説の時代からは、かなり年月がたっている。だれが建てたのか明らかでない。

飛び団子をめぐる熊野地蔵と轡田豊後守との関係は、自宅の敷地内の石仏の由来を明らかにしようとする館盛の調査が行われた昭和五十年前後から注目されるようになった。現存する地蔵に刻まれた年記からも関係は明らかでなく、両者の関係を記した近世から昭和初期頃までの資料の存在は報告されていないが、伝承が存在した可能性もある。むしろ重要なのは、郷土の歴史や文化、習俗を調査し、種々の知識をつなぎあわせて体系化しようとする熱意と意識の高さである。その結果として、『日本歴史地名大系十六 富山県の地名』の記述は理解されるものであろう。

おわりに

以上見てきたように、現在、民話、昔話として書籍、雑誌、新聞、語り聞かせなどで接することのできる飛び団子由来譚は、大正四年に犬島宗左衛門が営む飛び団子店「はぎのや」の東京進出に際して、大井冷光が著した「史実お伽飛だんご」が端緒であり、現在まで冷光の由来譚を基本形として踏襲してきたことが明らかになった。大井冷光は従来の由来譚を、東京で得た幅広い童話の知識と読者に魅力を感じさせる方法で再構成した。これが、後々まで基本形として踏襲されることとなった要因と考えられる。一方で、昭和五十年前後から飛び団子由来譚に引きつけて、資料を比較対照して考察し、郷土の文化を解釈しなおそうとする事例も増える。本稿も含めたこうした再解釈の試みは、その当否は措くとして、郷土の再発見、あるいは新たな創造につながっていく。

大正四年に基本形となる飛び団子由来譚が著されたのは、政治家でジャーナリストでもあった犬島宗左衛門が、大正二年の北陸本線開通により、東京を中心とする大都市圏に東岩瀬の存在を知らしめ、地域振興を図る必要を感じたためであった。飛び団子は、単なる団子ではなく、東岩瀬の象徴であり、由来譚はその独自性を、大都市圏に対して主張する役割を担っていたのである。

注

(1) 「飛び団子」の表記は、「飛団子」、「飛だんご」、「飛だん子」など、文献によって相違がある。『日本国語大辞典』の「とびだんご」の項は、「飛団子」と表記しているが、江戸時代から明治時代の「飛び団子」を説明したものである。本稿で取り上げる「飛び団子」は、主として現在の富山市岩瀬地区、特に東岩瀬の名物として近世から現代に受け継がれている「飛び団子」を対象とする。そのため表記は、近年の新聞記事で使用されること多い「飛び団子」を用いることとする。ただし、本文中で取り上げる作品名、書名、引用文な

どは、原文のままとした。また、本文中の引用文については、漢字は旧字を新字に改め、仮名遣いは原文のままとした。

- (2) 岩瀬は、現在の富士市の神通川河口一帯を指す地名。歌枕「岩瀬野」、「岩瀬渡」などがあり、古代から知られる地名である。東岩瀬は、神通川河口東岸を指す地名で、西岸の西岩瀬に対する。近世は加賀藩領であった。万治年間（一六五八〜一六六一）に洪水で神通川の川筋が変化したことにより、西岩瀬から人が移住し、西岩瀬湊にかわって東岩瀬湊が栄えた。また、加賀藩主の参勤交代路であった北陸街道の宿駅の一つとして、東岩瀬宿が置かれた。明治二十二年に町村合併により東岩瀬町となり、昭和十五年に富士市に編入された。現在も富士市東岩瀬町、東岩瀬村などの地名がある。七福亭は、現在の富士市東岩瀬町の北、富士港に近い富士市岩瀬港町にある。
- (3) 本稿の記述の典拠については、参考資料として末尾に付した「飛び団子関連事項略年表」をあわせて参照されたい。
- (4) ここに記した由来譚は、大正四年の大井冷光「史実お伽飛だんご」(はぎのや、刊行年不記載)にもとづき、後に記された種々の飛び団子由来譚に共通する要素を概略的に記したものである。なお、轡田豊後守は、轡田備後守と記す場合もある。これについては注12に記す。
- (5) 「はぎのや」の飛び団子の包装紙(個人蔵)は、竹久夢二がデザインを手がけた。古志の松原に浪模様と水玉をあしらった木版刷りの包装紙は、竹久夢二と富山とのゆかりを今に伝える貴重な作品である。昭和五十五年開催の「竹久夢二」展(県民会館美術館)、平成十三年開催の「愛と放浪の画家 竹久夢二」展(富山県水墨美術館)で展示公開され、平成二十八年に高志の国文学館で開催した「夢二の旅―たまき・翁久允とのゆかりにふれつつ」展でも公開させていただく機会を得た。

「はぎのや」の包装紙は、大正三年頃の港屋版千代紙「松原」(別冊太陽 日本のあるところ221 竹久夢二の世界 描いて、旅して、恋をして)平凡社、平成二十六年参照)とデザインがよく似ている。東京日本橋にあった「港屋絵草紙店」は、夢二が、妻であった岸た

まきと大正三年から大正五年まで営んだ日用小物の店で、少女たちの憧れの店でもあった。「はぎのや」の包装紙に印字された住所は「東京神田区通新石町二十一番地」(現・神田須田町)とある。日本橋にも近く、菓子店、書肆、寄席などがあつた通新石町に店を構え、港屋の千代紙にも通じる夢二デザインの包装紙を使った「はぎのや」は、おしゃれな店として企図されたのではなからうか。

- (6) 「富山新聞」平成十九年二月五日「富山おもしろ美術散歩五 夢二愛憎(五)」、二月十二日「富山おもしろ美術散歩六 夢二愛憎(六)」参照。
- (7) 「新聞に見る20世紀の富山 第一巻」(北日本新聞社、平成十二年)参照。

- (8) この対照表は、小柴直矩(筆名は南水)「お伽飛団子」(『北陸タイムス』明治四十二年九月五日記事)、大井冷光「史実お伽飛だんご」(はぎのや、刊行年不記載)、小柴直矩「魔除けだんご」(『越中伝説集』富山県郷土史会、昭和三十四年)の記事配列および文言の対応を示すために作成したものである。対照の便宜を考慮し、次のように本文を改変した。

- 一、本文の漢字は、旧字を新字に改めた。仮名遣いは原文のままとした。
- 一、本文の改行および字下げ、句読点は、私意に改めた。
- 一、番号は、記事のまとまりごとに私意に付した。
- 一、適宜、傍線、二重傍線を付した。主として、対照の目安として傍線を付し、相違の大きい箇所にも二重傍線を付した。
- 一、ルビは、私意に付し、当該漢字に続けて丸括弧()内に表記した。また、判読不能字は□で表記した。

なお、小柴直矩『越中伝説集』は、昭和十二年の初刊と昭和三十四年の再刊で、表記、文言などに相違がある。昭和十二年初刊の方が、大井冷光「史実お伽飛だんご」に近い。特に対照表(7)で、(B)大井冷光が「反魂丹」を記しているのに対し、(C)小柴直矩は、昭和十二年初刊で「反魂丹」としているのだが、再刊では「腹

葉」に変更されている点に注意すべき相違である。その他は、漢字表記や仮名遣い、言い回しなどの相違である。読みの便宜、また受容の状況に鑑み、この対照表では、後人の手が加わったものではあるが、昭和三十四年再刊を底本とした。

- (9) 富山県立図書館編『冷光文庫目録』（富山県立図書館、平成七年）、大村歌子『天の一方より―大井冷光作品集』（桂書房、平成九年）など参照。

- (10) 「明治から大正の地域新聞「日本海之岩瀬」紙に見る東岩瀬港近代化のあゆみ」（『東岩瀬郷土史学会報』第三号、昭和五十七年一月）参照。

- (11) 『岩瀬新報』の本文は、個人蔵の複写綴りによった。

- (12) 豊後守と備後守の相違について、豊後守と記す最も早いものは明治四十二年『北陸タイムス』記事の南水「お伽断飛団子」で、大井冷光は豊後守と記している。備後守と記す最も早いものは、大正五年『岩瀬新報』記事の「岩瀬の由来記 名物飛だんご」である。小柴直矩『越中伝説集』は、備後守と記している。南水は小柴の筆名と推定される。すなわち、小柴自身ははじめ豊後守と記していたのを、『岩瀬新報』記事の後、備後守にしたものと思われる。使い分けの根拠は未詳である。轡田豊後守と備後守は、館盛英夫『戦国の七寸五分（轡田）一族』（私家版、昭和五十二年）によれば、兄弟であるが、同一人物と見る説もあった。

- (13) 『日本随筆大成 新装版第二期十二』（吉川弘文館、昭和四十九年）

- (14) 『曲亭遺稿』（国書刊行会、明治四十四年）

- (15) 『守貞謾稿 第四卷』（東京堂出版、平成四年）

- (16) 『守貞謾稿 第一卷』（東京堂出版、平成四年）

- (17) 館盛英夫『戦国の七寸五分（轡田）一族』（私家版、昭和五十二年）掲載の写真および引用文によった。

【付記】 本稿は伊波世野倶楽部平成二十八年度定例会（平成二十八年七月二十二日開催）における口頭発表をもとに作成したものである。

席上ご教示いただきました各位、大変貴重な資料の掲載をご許可いただきました犬島荘一郎氏、犬島肇氏、資料の調査、閲覧の便宜をお図りいただきました富山県立図書館、富山市生涯学習課はじめ、関係諸機関・各位に心より感謝申し上げます。

一、飛び団子関連事項略年表

凡例

一、この略年表は、主として岩瀬の飛び団子を対象に、書籍、雑誌、新聞記事等における関連事項を記載するものである。昭和五十年以降の新聞記事の探索にあたっては、特に「北日本新聞データベース」を利用した。略年表は、現段階で調査し得た事項を便宜的に記載したものであり、遺漏の多いものである。大方の御批正を賜りたい。

一、略年表は、年号、西暦、事項、出典をそれぞれ記した。
一、年号および西暦は、対象とする記事の本文中に該当する年号が明記されている場合は、本文中の年号および対応する西暦を記した。本文中に年号が明記されていない場合は、出典の成立年代または刊行年を記した。

一、事項は、私意により適宜、引用、要約、留意点等を記した。引用文の漢字は旧字を新字に改め、仮名遣いは原文のままとした。
一、出典は、事項に記載した内容を掲載する文献を記した。近世の文献は、成立年代（年号および西暦）、典拠とした書籍の名称、発行所、発行年（年号）を記した。明治以降の書籍は、名称、発行所、発行年を記した。雑誌は、名称、号数、発行所、発行年月（年号）を記した。新聞記事は、紙名、発行年月日（年号）を記した。

一、略年表の作成は、当館主任（学芸員）の小林加代子が担当した。資料調査にあたり、当館主任（学芸員）の線引香織の協力を得た。

年号	西暦	事項	出典
江戸時代	一六〇三、 一八六七	「加越能名物往来」に次の記事あり。 岩瀬切団子	「加越能名物往来・五箇往来」 （富山県立図書館蔵富山大学蔵本謄写版、 書写年代不記載）
寛文十二年	一六七二	「加賀往来」に次の記事あり。 岩瀬切団子	「定本九谷」（宝雲舎、昭和十五年）
江戸時代	一六〇三、 一八六七	「北国名物往来」に次の記事あり。 岩瀬之切団子	「北国名物往来」（筑波大学附属図書 館乙竹文庫蔵写本、書写年代不記載）

江戸時代	一六〇三、 一八六七	「下道中産物並人馬賃銭記」（加越能文庫）に次の記事あり。 飛団子 △引用者注「東岩瀬宿の名物の一つとして」 ▽	「加越能三ヶ国往来」に次の記事あり。 東岩瀬之飛団子 「三州名物往来」に次の記事あり。 岩瀬之飛団子 菊岡沾涼「本朝世事談綺」に次の記事あり。 ○飛団餅 正徳元年の夏、甲州八日市場の不動尊回向院に開帳ありし時、両国橋の東詰松屋三左衛門といふ邊匠はじめてこれを製す。はじめは景勝団子と云。尊貴の人の名ははゞかるべき事と、所の長ども制しけるにより、そのち越後団子と称す。壮士うすつくといへども、つぶれざるを、北越長尾家の鋒先に比して名付しとかや。但し越後の名物にてはなきよし也。ちかき頃、京、大坂にはやり、浄瑠璃にも作りこみてもてはやせり。誠に岷江の源は盃をうかめつれども、楚に入は漸く舟を以てするがごとし。わづかの庇の下にうりそめしもの、かばかりひろまれるも太平繁花のしるし也。	「下道中産物並人馬賃銭記」（保科彦彦「宿場としての東岩瀬」）（東岩瀬郷土史学会報）第三十一号、平成元年三月、「日本歴史地名大系」十六、富山県の地名「東岩瀬宿」項「金凡社、平成六年、深井基三編「街道の日本史」二七、越中・能登と北陸街道」（吉川弘文館、平成十四年、等参照）
元禄、 元文頃	一六八八、 一七四一	「三州名物往来」に次の記事あり。 岩瀬之飛団子	「定本九谷」 （宝雲舎、昭和十五年）	
江戸時代	一六〇三、 一八六七	「加越能三ヶ国往来」に次の記事あり。 東岩瀬之飛団子	「加越能三ヶ国往来」 （筑波大学附属図書館乙竹文庫蔵写本、 書写年代不記載）	
文化・文政 慶応頃	一八〇四、 一八六八	「北国下道中」に次の記事あり。 何か岩瀬の飛団子（だんす、心にかゝる娘茶屋	「北国下道中」（大衆芸能資料集成） 第一巻、三二書房、昭和十五年）	
明和、 安永頃	一七六四、 一七八一	かつぎ屋台といふものに、ちひさき白をおきて小うたを唄ひつゝ、団子をつきたり、白のふちをひやうしよく、うち鳴らしつゝ、つくがごとくすれば、団子の飛びめぐるを、わらべらには興ある事に思ひたり、（唱歌）御代はめでたのわか松さまよ、枝もさかえて葉もしげる、此たぐひの歌多くありしが忘れたり、かね勝団子たえてより、あやめ団子出たるが、今なほあり、かね勝は一人なり、あやめは類多し、	滝沢馬琴「流行商人絵詞廿三番狂歌歌合並附録」に次の記事あり。 かね勝団子（右に同（引用者注）「自明和迄安永」とあり）	滝沢馬琴 「流行商人絵詞廿三番狂歌歌合並附録」 （曲亭遺稿）国書刊行会、明治四十四年）
正徳頃	一七一、 一七二六		菊岡沾涼「本朝世事談綺」 （享保十九（一七三四）年刊） （日本随筆大成）新装版第二期十二、 吉川弘文館、昭和四十九年）	

文政四年	一八二二	錢屋五兵衛「東巡記行」に次の記事あり。 東岩瀬駅 十七日（引用者注―二月）泊り。上野屋源七殿 此所二同郷赤土屋伊三郎手船助兵衛川入一興也。同所橋本屋五右衛門より飛団子到来。翌朝高艘とも出帆、諸共滑川二至り着船。天気よく海辺の風色面白き楽しみ也。	錢屋五兵衛「東巡記行」 （文政四（一八二二）年） （越中資料集成十 越中紀行文集） 桂書房、平成六年
天保・慶応頃	一八三七、 一八六八	喜田川守貞「守貞護稿」に次の記事あり。 粟餅店 此店常二種ニシテ、寺社開帳等群衆ノ路傍ニ、専ラ売之、其術尤奇トス。一握スレバ指間各一顆ヲ出シ、都テ一握四顆ノ団子ヲナス。其形無大小。コレヲ切テ、六七尺余間アル盤中ニ投ス。其速妙ナル、空ヲ飛ブコト三顆ヲ絶セズ。盤中豆粉ニサタウラ和シ、コレヲツケテ売ル。或曰、正徳元年甲ノ八日市ノ不動ヲ回向院ニ於テ開扉アリ。其時、兩國橋東ニ松屋三右エ門ト云左官、始テ飛団子ヲ売り、初名景勝団子ト云。豪俊ノ名悼ベキ製之、故ニ名ヲ更テ、飛団子ト云。社土旧ツケトモツブレザラ、長尾氏ノ銚先ニ比スノ名也云々。 守貞幼年ノ、大坂市中ヲ屋体店ヲカツギ巡ル者ニ、景勝新助ト云団子売アリ。京坂ニ伝ヘ唱テ、却テ彼地ニハ長ク廃セザリシナルベシ。蓋、三都トモ団子ハ米粉ヲ団スル者ニシテ、コ、ニ云ハ、粟ノ餅ナレバ其品異ナリ、ト雖ドモ因ニ云而已。	喜田川守貞「守貞護稿」 （天保八（一八三七）年頃から 慶応四（一八六八）頃まで追書訂正 （守貞護稿）第一巻、 東京堂出版、平成四年）
天保・慶応頃	一八三七、 一八六八	喜田川守貞「守貞護稿」に次の記事あり。 飛団子 今モ此類アリ。委シクハ、買店ノ条ニ誌ス。又、臼杵ヲ持巡リ、ウルモアリ。一卷毎二杵ヲフリ、臼ノ周ヲタ、キ鳴シ、其音ヲ以テ兒童ヲ集ム。	喜田川守貞「守貞護稿」 （天保八（一八三七）年頃から 嘉永六（一八五三）年頃まで追書訂正 （守貞護稿）第一巻、 東京堂出版、平成四年）
嘉永五年	一八五二	石塚豊芥子「近世商賈尽狂歌合」に次の記事あり。 十番 あやめ団子 勝 軒にふく菖蒲団子の声に目をさます子供の愛により政 飛団子 よく売れてあちらこちらへ飛だんご春抜杵の音もかんかち かんかち団子は、景勝だんごといひて、つぶれぬを表したるの名なりと。されば此歌、飛び加藤の勢ひある飛団子なれど、氷魚けさいかに頼政るらんといへる、源三位の故事もあれば、より政のかたが勝軍々々。	石塚豊芥子「近世商賈尽狂歌合」 （嘉永五（一八五二）年） （日本随筆大成）新装版第三期四、 昭和五十二年）

嘉永六年	一八五三	「三国往来」（宝鏡）所収）に次の記事あり。 東岩瀬之飛団子ハ引用者注―当該の「三国往来」は、筑波大学附属図書館之竹文庫蔵「加越能三ヶ国往来」とほぼ同文。	「宝鏡」（東岩瀬の油屋恒次郎が、嘉永三年から四年まで通った寺子屋で配付された手書きの手本を後日まとめて和綴製本したものである。「宝鏡」は全二冊のうちの一冊で、嘉永六年にまとめた（油木重次「寺子屋の手習本」紹介―東岩瀬郷土史学会会報）第四号、昭和五十七年四月） （富山県立図書館蔵）
明治時代	一八六八、 一九二二	「杉木氏越中誌」巻之二「産物并佳品」に「岩瀬飛団子」とあり。 「風俗画報」第三二八号に次の記事あり。 ◎其百二十三 岩瀬の飛団子（同上（引用者注―越中））同上（引用者注―瓦山） 上新川郡岩瀬町の名産なり飛団子は至て小粒にして之を売者は片荷の巻き籠に此団子十斗り宛串にさし豆の粉を附け幾本も指し片荷には小さき空白と小さき杵を摺ひ町の辻或は寺の門前などに荷を卸して彼の空白の縁を小さき杵にて叩くなり子供等其音を聞て忽ち寄り集り二本三本を買ひ求むるなり一本の価は大概三厘位なり ハ引用者注―この記事は、「諸国飲食の名物」項のうちのの一つとして記載されるもの。越中の名物として他に、「奈良の浦の珊瑚海老」、「愛本の粽」、「五箇山の板団子并に蕨餅」、「天池のから餅」を並記する。	「杉木氏越中誌」巻之二「産物并佳品」 （富山県立図書館蔵）
明治四十二年	一九〇九	南水「お伽噺 飛団子」上を発表。飛び団子由来譚。	「北陸タイムズ」明治四十二年九月五日（小柴直矩「越中伝説集」 富山県郷土史会、昭和三十四年参照）

大正四年	一九一五	五月十五日、新聞各紙、犬島宗左衛門が東京に飛び団子販売店を設け、竹久夢二のレットルに巖谷小波の由来書を添えて売り出す計画であることを報じる。あわせて、巖谷小波作詞の「飛び団子の歌」を掲載する。	『富山日報』、 『北陸タイムズ』、 『北陸政報』大正四年五月十五日
大正四年	一九一五	一月、三月、竹久夢二が富山に来県し画会、作品展覧会を開催。東岩瀬の五大家の一つ宮城家に夢二が招かれた縁で、犬島宗左衛門が宮むむぎのや飛び団子の包装紙のデザインを手がける。	『富山日報』大正四年一月十五日、一月二十五日、三月八日他（九里文子富山の「竹久夢二画会」）新たな文化システムの創造「富山史壇」第一七九号、平成二十八年三月参照、 『富山新聞』平成十九年二月十二日
大正二年	一九一三	九月十九日、大隈重信が東岩瀬を訪問。訪問は、大島宗左衛門らの懇請によるもの。休憩所となった米田家において、飛び団子を饗す。大隈一行が到着した際、飛び団子を打つ砵のような音がしていたという。大隈は飛び団子を珍しがって、その由来を聞いた。	『富山日報』大正二年九月十九日、 『北陸タイムズ』大正二年九月二十日
大正元年	一九一二	かつぎ屋台といふものに（略）かね勝は一人なり、あやめは類多し、とあるにて飛び団子の名称明かなると共に、天明以後中絶して菫蒲団子に一変せしを知るべし、然るに文政の末年、菫蒲団子も漸く衰へし時に当り、越後の某飛び団子を再興して再び世に現るゝに至れり、『近世商賈展狂歌合』（写本）に かんから飛び団子、文政の末頃浅草阿部川町より出る、是再興なり、此者は越後の人にて、老年に及び諸道具を譲りて在所へ帰りしと云々、今（嘉永三年）あやめはすたり、かね勝団子はかんかちと改名して流行す、 とあれば嘉永年間両者再び盛衰の位置をかへ飛び団子は最後の勝利を得て、かんかちと訛られながら世に行はれて今日に及べり、 △引用者注「岩瀬の飛び団子との関連記載なし」	『此花』第二号 （此花社、大正元年十一月）

大正四年か	一九一五	はぎのやより、巖谷小波作歌・大井冷光篇述「史実お伽飛だんご」と題した冊子を発行。巖谷小波作歌・後藤丞之輔作曲「飛だんご」の歌詞と来語、大井冷光「飛だんご」のお伽断を掲載する。冊子記載のはぎのやの所在地は、東京神田区通新石町二十一番地。	巖谷小波作歌・大井冷光篇述「史実お伽飛だんご」 （はぎのや、刊行年不記載）
大正五年	一九一六	新聞連載記事「岩瀬の由来記（十四、十六、十七）名物飛だんご（一、三、四）」。巖谷小波の歌や大井冷光のお伽断には大小異なる点もあるが、と記して、飛び団子由来譚を紹介。飛び団子がそもそも何であったかについて、天から霞、霞が降り来て、怪鬼との戦いで窮地に陥った善田備後守の口中に飛び込み、食べたところ力を得て倒すことができたとする。飛び団子の販売は、田の尻屋の先祖が売り始め、岩瀬町内の至る飲食店で売り出すようになったと記す。	『岩瀬新報』大正五年十一月五日、十一月二十日
昭和四年	一九一九	藤森秀夫「詩話集 稲」発行。「飛び団子」と題した詩と詞書を収載。詞書に、佛々征伐の武士が、電のように降ってきた小粒の団子を食べて窮地を逃れ退治したと由来譚を記す。	藤森秀夫「詩話集 稲」 （光奎社、昭和四年）
昭和八年	一九三三	東岩瀬尋常高等小学校「はぎうら」第一輯発行。「飛だんご」を収載。飛び団子由来譚。大井冷光作に改変を加えた内容。	『はぎうら』第一輯（東岩瀬尋常高等小学校、昭和八年一月巻頭言）
昭和八年	一九三三	東岩瀬尋常高等小学校「はぎうら」第二輯発行。「戯曲飛び団子岩瀬野の月（東岩瀬校創立六十周年記念脚本）」を収載。大井冷光作をもとに戯曲として大幅に改変し、再構成したもの。旅の母娘が魔物に娘をさらわれたが、善田豊後守の魔物を退治によって娘をとり戻し、「はぎのや」の屋号を豊後守から与えられ、岩瀬の地にとどまっていた豊後守を助けた霊験の飛び団子を売るようになったという筋立て。	『はぎうら』第二輯（東岩瀬尋常高等小学校、昭和八年七月巻頭言）
昭和九年	一九三四	富山県女子師範学校附属小学校編『高志の白鷹』発行。「飛だんご」を収載。飛び団子由来譚。「はぎうら」第一輯に改変を加えた内容。	『高志の白鷹』 （富山県女子師範学校附属小学校、昭和九年）
昭和十二年	一九三三	小柴直矩「富山郷土資料叢書第七 越中伝説集」発行。「岩瀬名物飛び団子」を収載。大井冷光作に若干の改変を加え、解説を付加した内容。	小柴直矩「富山郷土資料叢書第七 越中伝説集」（中田書店、昭和十二年）
昭和二十九年	一九五四	四月十一日、富山産業大博覧会開会。松川ベリに設置された、富山の史実と伝説を紹介する立て看板「郷土歴史百景」の一つに、「第二十六景 室町時代・岩瀬の飛び団子」あり。飛び団子由来譚。大井冷光作にもとづくと考えられる内容。	富山産業大博覧会誌編纂委員会編『富山産業大博覧会誌』 （富山市役所、昭和三十一年）

昭和三十二年	一九五七	白鳥省吾「伝説あちこち 飛びだんご」(『小六教育技術』八月号)。飛び団子由来譚。概ね小柴『越中伝説集』にもとづくと考えられる内容。	『小六教育技術』八月号 (小学館、昭和三十二年八月)
昭和三十四年	一九五九	小柴直矩「越中伝説集」再刊本発行。「岩瀬名物の飛びだんご」を収載。飛び団子由来譚。初刊本より表記、文言に改変あり。	小柴直矩 『越中伝説集』 (富山県郷土史会、昭和三十四年)
昭和三十七年	一九六二	宮井定義(富山県富山北部中学校校長)「飛びだんご」物語(『中学時代』一年生、七月号)ほかの郷土)。飛び団子由来譚。大井冷光作他「高志の白鷹」等も参照したかと考えられる内容。「東富山駅では、最近まで「飛びだんご」を売っていません」と記す。	『中学時代』一年生、七月号 (第七卷第四号、旺文社、昭和三十七年七月)
昭和三十七年	一九六二	石橋幸作「みちのくの駄菓子」発行。「米沢の飛び団子」を収載。米沢地方に伝わる「間飛団子」を紹介し、これとは直接かかわらないが、同名の菓子として東岩瀬の飛び団子と由来譚についてもあわせて紹介するもの。由来譚は、小柴『越中伝説集』にもとづく。	石橋幸作 『みちのくの駄菓子』 (未来社、昭和三十七年)
昭和四十六年	一九七一	北日本放送編「伝説とやま」発行。八尾正治執筆の「飛びだんご」を、富山市大広田の伝説として収載。飛び団子由来譚。内容は、小柴『越中伝説集』にもとづく。「万葉集」巻十九・四二四九「石瀬野に」(大伴家持)等をとりまぜ、漫画「ポパイ」を等けるなどして文飾を凝らしたものを。	北日本放送編 『伝説とやま』 (北日本放送、昭和四十六年)
昭和四十九年	一九七四	林潤次「飛びだんご」(『東岩瀬郷土史近代百年のあゆみ』「岩瀬の伝説」)。飛び団子由来譚。大井冷光原作と明記。注に、飛び団子について「一説には、実は天候異変で雹が降り、その一つが豊後守の口の中に入って溶け、力水となったのを、丸い形になぞらえて、だんごに作って「飛びだんご」と名づけて、町の名物にしたものである」というと記す。雹は、『岩瀬新報』(大正五年十二月五日)、藤森「詩話集 稲」にも見える。また、魔物について、「伝説の中に出て来る魔物は、大陸である渤海あたりから漂流して来た賊で、その異様な風俗が伝説化したのでなかろうかとも言われている」と記している。	東岩瀬郷土史編纂会 『東岩瀬郷土史近代百年のあゆみ』 (東岩瀬郷土史編纂会、昭和四十九年)
昭和五十年	一九七五	富山市教育委員会が、「飛びだんごくまの地蔵」解説板(現・富山市海岸通)を設置。「東岩瀬郷土史」により、飛び団子由来譚を記し、豊田豊後守が退治した魔物を祀ったのが「くまの地蔵」であると記す。	館盛英夫 『戦国の七寸五分(豊田)一族』 (私家版、昭和五十二年)

昭和五十二年	一九七七	館盛英夫「戦国の七寸五分(豊田)一族」発行。「八、飛びだんごくまの地蔵」として、以下の項を立てる。 〔一〕「飛びだんごの史実」へ引用者注「加越能名物往来」(三州名物往来)を挙げる。〔二〕「飛びだんごくまの地蔵」掲示板へ引用者注「富山市教育委員会、昭和五十年」。(三)小柴直矩作「岩瀬名物の飛びだんご」へ引用者注「越中伝説集」。(四)八尾正治戯作「飛びだんご」へ引用者注「伝説とやま」。(五)八田清信隨筆「熊の地蔵」へ引用者注「出典未詳。本文中に、この地蔵は、近くの常磐神社の祭神と同様に熊野加武呂命を祀った熊野地蔵であろうと述べる」。(六)藤森秀夫詩話「飛び団子」へ引用者注「詩話集 稲」。(七)木俣修「歌詩」へ引用者注「飛び団子に関する言及は見られない」。(八)筆者作「百問馬場」へ引用者注「館盛英夫執筆。古志の松原に関する古今の事柄を紹介した文章」。(九)七内さの「飛びだんご」へ引用者注「本文中、明治初年には飛び団子を商う店が東岩瀬町中町附近で、七内さ、田野尻屋、放生屋等五軒あったが、現在は七内さ、すなわち七福亭のみであることを記す。また、飛び団子は、明治はじめまでは米粉に塩を入れきな粉をまぶしたものであったが、現在は、甘く、きな粉とあんこの二種となった」と記す。〔十〕はぎのやの「飛びだんご」へ引用者注「竹久夢二画のはぎのやの包装紙の写真を掲載する。また、はぎのやの東京出店の期間、北陸線東岩瀬駅構内での販売先等についても記す」。(十一)巖谷小波先生作歌「飛びだんご」。(十二)大井冷光先生篇述「飛びだんご」へ引用者注「本文および、楽譜と冊子表紙の写真を掲載する」。(十三)「くまの地蔵さん」の四百五十年祭」へ引用者注「昭和五十一年五月十六日に執り行われた大村城址保存会主催「くまの地蔵さん」四百五十年祭の行事次第を記す」。	館盛英夫 『戦国の七寸五分(豊田)一族』 (私家版、昭和五十二年)
昭和五十五年	一九八〇	五月、「竹久夢二展」(県民会館美術館)で、はぎのや飛び団子の包装紙を展示公開。	『北日本新聞』 昭和五十二年九月二十三日
昭和五十五年	一九八〇	九月二十三日、新聞記事「北日本新聞」(こども一日記者)「三十周年記念 わたくしたちの校下 ことごと親の社会科 富山市立 岩瀬小学校。飛び団子由来譚。豊後守の口の中に入ったのは雹とする。昭和十五年頃まで北陸線東岩瀬駅で飛び団子を売っていたが、現在は七福亭一軒のみであると記す。	『北日本新聞』 昭和五十二年九月二十三日
昭和五十五年	一九八〇	館盛英夫「平榎城」発行。加賀万才「北国下道中」。「御帰国」に岩瀬の飛び団子が挙げられていることを記す。	館盛英夫 『平榎城』 (私家版、昭和五十五年)

昭和五十七年	一九八二	日本児童文学者協会編「県別ふるさとの民話 富山県の民話」発行。「岩瀬のとびだんご」ハ伝説・富山市V」を収載。飛び団子由来譚。内容は、小柴「越中伝説集」、館盛「戦国の七寸五分(曹田)一族」等、複数の先行文献を参照したものと考えられる。巻末収載の、稗田重平「解説・二 富山県の民話について」に、曹田豊後守の武勇談で、熊野信仰との結びつきがあることを記す。	日本児童文学者協会編「県別ふるさとの民話 富山県の民話」(偕成社、昭和五十七年)
昭和五十八年	一九八三	館盛英夫「旧往還道・北陸浜街道の今昔」発行。小柴「越中伝説集」、大井冷光、藤森秀夫、八尾正治の述作、巖谷小波の歌、八田清信の随筆、館盛英夫「百間馬場」等、飛び団子に関する先行文献を挙げ、飛び団子由来譚を記す。また、次のように記す。「加越能名物往来」には「岩瀬切団子」、「三州名物往来」には「岩瀬飛団子」と記しているとおり、飛団子は江戸時代から岩瀬名物として街道を往来する人々や、岩瀬港から北海道松前へ船出する水主は旅の安全を祈ってこの飛団子を食べるならわしがあった。明治初年には七内さ・田野尻屋など六軒の店で売出していたが、今は七内さ一軒だけとなってしまった。	「旧往還道・北陸浜街道の今昔」(私家版、昭和五十八年)
昭和五十九年	一九八四	三月十六日、新聞記事「野花一生 新聞人 井上江花伝三十八 大井冷光(四) 急死を悼む」に、冷光が「とび団子のうた」を作ったとの記載あり。ハ引用者注「歌の作詞は実際は巖谷小波V」	「北日本新聞」 昭和五十九年三月十六日夕刊
昭和五十九年	一九八四	四月一日、富山電報電話局が民話・重話テレビホンサービスを開始。好評を博す。四月十六日から二十三日まで松井昭徳富山市社会教育センター次長による「飛び団子」を行う。	「北日本新聞」 昭和五十九年四月十四日夕刊、昭和六十年四月二十五日
昭和六十年	一九八五	八月九日、新聞記事「郷土に根づく特産品(八) 飛だん子(富山市) 由緒ある厄よけ名菓。七福亭取材記事。飛び団子由来譚あり。小柴「越中伝説集」と同じく武将を「曹田備後守」とする。	「北日本新聞」 昭和六十年八月九日
昭和六十一年	一九八六	二月十九日、高岡徹「えっちゅう戦国紀行二十七 曹田氏と大村城」(新聞記事)。「大村・日方江の伝説」として飛び団子由来譚の概略を紹介。	「北日本新聞」 昭和六十一年二月十九日夕刊
昭和六十一年	一九八六	十二月二日、ボランティア団体の婦人、お年寄りが熊野幼稚園を訪れ、紙芝居や人形劇を披露。手作り紙芝居の演目の一つとして「飛びだんご」。	「北日本新聞」 昭和六十一年十二月三日

昭和六十二年	一九八七	南山ひさし文・昇天坊絵「とやま県のむかし話 ゆりかご」発行。「飛びだんご」を収載。飛び団子由来譚。「はぎうら」第一輯、「高志の白鷹」等を参照したか。	南山ひさし文・昇天坊絵「とやま県のむかし話 ゆりかご」
昭和六十三年	一九八八	高岡徹「越中戦国紀行」発行。「えっちゅう戦国紀行二十七 曹田氏と大村城」(「北日本新聞」昭和六十一年二月十九日夕刊初出)を収録。	「越中戦国紀行」 (北日本新聞社出版部、昭和六十三年)
平成元年	一九八九	保科斉彦「宿場としての東岩瀬」(「東岩瀬郷土史学会報」第三十一号)。「下道中産物並人馬賃銭記」に挙げられる東岩瀬の名物の一つに「飛団子」があることを記す。また、次のように記す。「この飛団子は東岩瀬の方ならどなたでも御存知の曹田豊後守に関わる伝説で有名です。加賀万歳にも(略)何か岩瀬の飛団子、心にかか娘茶屋我も人も入り給う。…と唄われています。(略)余談ですが、この飛団子はいつから東岩瀬の名物になったのでしょうか。先にあげた十七世紀末の「道しるべ」ハ引用者注「江戸より金沢までの道しるべ」Vには東岩瀬の名物は何にも記されていませんが、西岩瀬の所に「この村富山御領なり。この村に団子あり、名物なり」と書かれています。富山市打出の大場家に残る「西岩瀬要用抜書」という古文書にこの団子のことが記されています。(略)内容にいささか不審な点がありますが、西岩瀬で団子が名物だったのは事実のようです。東岩瀬にも団子屋の屋号を称する家が数軒ありますが西岩瀬の団子屋との関係があるのかも知れません」。	「東岩瀬郷土史学会報」第三十一号 (東岩瀬郷土史会、平成元年三月)
平成元年	一九八九	六月九日午後六時、テレビ番組「スーパータイムとやま」(富山テレビ)において「なつかしい菓子・飛だん子」をコーナー紹介。	「北日本新聞」 平成元年六月九日夕刊
平成三年	一九九一	十一月二十二日、新聞記事「岩瀬 誇りに生きる港町(九) 飛びだんご 伝統の味を守る「七福亭」魔物退治が名前の由来」。「飛び団子由来譚。明治時代には飛び団子を売る店が六軒あったと記す。	「北日本新聞」 平成三年十一月二十二日

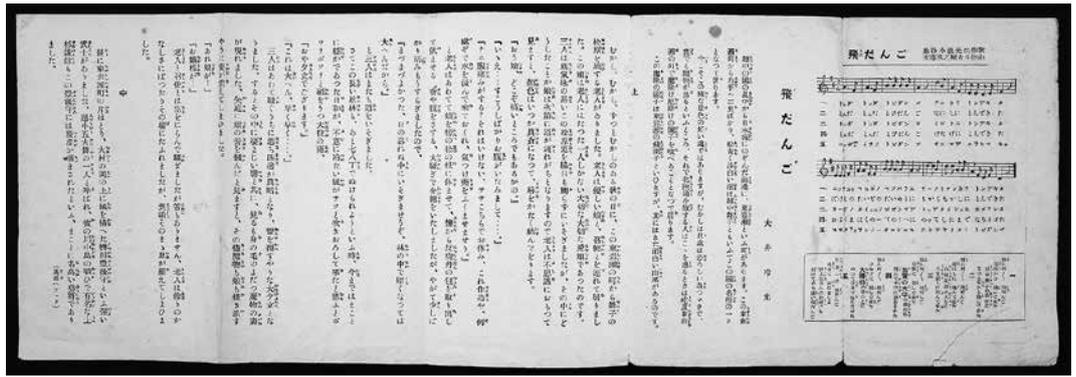
平成三年	一九九一	十一月二十三日、新聞記事「岩瀬 誇りに生きる港町(十) 古志の松原 飛びだんご伝説の舞台 育てる会が植樹に努力」。館盛英夫氏取材。戦前の古志の松原の様子を談話として載せる。「くまの地蔵」に関して、「高さ四十七センチの素朴な石造り。横には、江戸時代後期の文政三年(一八三〇)、あるいは同五年の文字が刻まれているが、はっきり読み取れない。いずれにしても、戦国時代、この地に城を構えた善田豊後守の魔物退治飛びだんご伝説の時代からは、かなり年月がたっている。だれが建てたのか明らかでない。くまの地蔵が建っている場所は、山本製菓の敷地内。社長の館盛英夫さん(七十八) Ⅱ海岸通Ⅱが毎年一回、七福亭の飛びだんごを供えて供養を行っている」と記す。	『北日本新聞』 平成三年十一月二十三日
平成六年	一九九四	『日本歴史地名大系十六 富山県の地名』発行。「東岩瀬宿」項に「下道中産物並入馬賃銭記(加越能文庫)に当宿の名物として(略)飛団子が紹介されている」とあり。また「大村」項に「当地には史跡、伝承が多い。大村城跡のほか、善田氏などの戦死者を葬ったとされる精霊塚、魔物にさらわれた娘を救うため善田豊後守が熊野権現に祈ったところ、口中に団子が飛び込み急に力がわき起こり魔物を退治したという飛団子伝説にちなむ熊野地蔵などがある」と記す。	『日本歴史地名大系十六 富山県の地名』(平凡社、平成六年)
平成七年	一九九五	松井昭徳「とやまのむかし話」(「観光とやま」第六十号。飛び団子由来譚と「飛びだんご」の歌)を紹介。内容は、「富山県の民話」等数種の先行文献を参照して構成されたものと考えられる。	『観光とやま』第六十号 (富山県観光協会事務局、平成七年七月)
平成九年	一九九七	九月二十九日、市民大学学友会、富山市教育委員会が「第十二回郷土の先賢をしのぶ集い」を開催し、加藤淳富山県立図書館長講演「郷土を愛した大井冷光」、および冷光の童話の口演「立山のはなし」、「飛びだんご」を行う。	『北日本新聞』 平成九年八月二十七日
平成十一年	一九九九	九月十日、富山市民大学受講生が、荻浦小学校で「飛びだんご」他の民話の語り聞かせを行う。児童と受講生とで「飛びだんご」の歌を合唱。	『北日本新聞』 平成十一年九月十一日
平成十二年	二〇〇〇	善田隆史「飛びだんご」から「鮎寿し」への旅(『歴史と旅』第二十七巻第三号、平成十二年二月)。館盛「戦国の七寸五分(善田)一族」を著者から寄贈されたことを記し、これによって飛び団子について紹介する。	『歴史と旅』第二十七巻第三号 (秋田書店、平成十二年二月)

平成十三年	二〇〇一	七月、大井冷光の没後八十年を記念し、大村歌子「大井冷光を語る会」代表が、冷光の童話「うまれた家」の絵本を発行。談話として今後「飛びだんご」や「佐伯有頼」など冷光の名作を絵本化したいと語る。	『北日本新聞』 平成十三年七月二十七日
平成十三年	二〇〇一	十月十一日、大山町大庄小学校で「こども一〇番の家ほっとはうす」委嘱式。「飛びだんご」の語り聞かせを行ったほか、「飛びだんご」の歌を合唱した。	『北日本新聞』 平成十三年十月十二日
平成十三年	二〇〇一	十一月、「愛と放浪の画家 竹久夢二展」(富山県水芸美術館)で、はぎのや飛び団子の包装紙を展示公開。	『北日本新聞』 平成十三年十一月十三日
平成十四年	二〇〇二	神田重平編「語りつぐ富山の民話」発行。「岩瀬のとびだんご」富山市岩瀬「収載。出典を「越中伝説集」と明記し、飛び団子由来譚を掲載する。内容は、他に「富山県の民話」等も参照したと考えられるもの。	『語りつぐ富山の民話』 (富山県児童文学協会、平成十四年)
平成十四年	二〇〇二	一月二十六日、大島絵本館で「大井冷光まつり」を開催。松原悦子とやま語りの会会員が冷光の口演童話「とびだんご」の語り聞かせを行った。	『北日本新聞』 平成十四年一月二十七日
平成十四年	二〇〇二	四月九日、新聞記事「県内の名所・伝説紹介」。愛本橋(宇奈月町、俱利伽羅峠(小矢部市))とともに、古志の松原(富山市)を紹介。「伝説 飛びだんご」として飛び団子由来譚の概略を掲載。	『北日本新聞』 平成十四年四月九日
平成十四年	二〇〇二	七月二十五日、富山北署、荻浦小学校の児童らが交通事故死事故ゼロを呼び掛け、同署前の国道四一五号で、通行するドライバーに、事故防止の厄除けとして飛び団子を配布。	『北日本新聞』 平成十四年七月十六日
平成十五年	二〇〇三	善田隆史「越中富山の「飛だんご」」(週刊おくのほそ道 第二十号。岩瀬探訪記事。飛び団子由来譚の紹介あり。熊野権現の加護、大隈重信の勧めで東京に出店したこと等、複数の先行文献、または現地インタビュー等にもとづくと考えられる内容。	『週刊おくのほそ道を歩く vol.20 北国街道越中』 (角川書店、平成十五年八月)
平成十七年	二〇〇五	八月、富山市岩瀬小学校が、平成十七年度学校給食文部科学大臣表彰に選ばれ、九月に表彰される。「栄養博士会食」の実施のほか、飛び団子をはじめとした岩瀬の食文化資料を校内に展示し、子どもに対する関心を高めるなど地域連携活動を行っている。	『北日本新聞』 平成十七年八月十四日
平成十三年	二〇〇一	三月一日、富山市岩瀬小学校創校百二十八周年記念式を開催。松井昭徳富山県童話連盟委員長による民話「とびだんご」の語り聞かせもあった。	『北日本新聞』 平成十三年三月二日

平成十八年	二〇〇六	五月二十八日、ノーベル街道探訪ウォーク第一弾として、岩瀬でウォークイベントを開催。クーポン利用対象の一つとして、七福亭の飛び団子。	『北日本新聞』 平成十八年五月十二日、 五月二十九日、六月九日
平成十八年	二〇〇六	七月五日、新聞記事「ふるさと自慢 特産品 七福亭(富山市岩瀬港町) 飛だんご 江戸から続く素朴な味」。飛び団子由来譚の概略を紹介。飛び団子は、岩瀬ではかつて七、八軒あった茶屋で作られていたが、今では七福亭一軒が商うのみと記す。	『北日本新聞』 平成十八年七月五日夕刊
平成十八年	二〇〇六	十月一日、新聞記事「まるごと富山・岩瀬かわら版」。七福亭取材記事。飛び団子由来譚の概略を紹介。かつて飛び団子を売る店は近くに七軒あったが、現在は七福亭一軒のみと記す。	『北日本新聞』 平成十八年十月一日
平成十八年	二〇〇六	十月二十一日、花柳松香会が岩瀬カナル会館で日本舞踊公演を行う。「飛びだんご伝説」にちなんだ「団子売り」ほかを披露する。	『北日本新聞』 平成十八年十月六日
平成十八年	二〇〇六	十月二十一日、新聞記事「天地人」。岩瀬の地域特産品としてシロエビが注目を集めていることを飛び団子と対比して紹介。加賀万才「北国下道中」を引用、魔物退治の伝承についても触れる。	『北日本新聞』 十月二十一日
平成十九年	二〇〇七	一月二十八日、新聞記事「越中流五十七 第四部 第二の人生創造(九) 芭蕉の道 古部隆三さん(六十六) 富山市岩瀬港町 岩瀬の歴史再発見」。七福亭を営む古部氏の取材記事。記事に、「四年前、「奥の細道」の取材に訪れた雑誌の記者から、芭蕉が岩瀬を訪れたことを初めて聞かされた。掲載された記事には「七福亭」のことも紹介された」とある。引用者注「週刊おくのぼろ道を歩く」第二十号、平成十五年▽	『北日本新聞』 平成十九年一月二十八日
平成十九年	二〇〇七	二月、新聞記事「富山おもしろ美術散歩 夢二愛憎(五)」、「同(六)」。大島肇氏取材。祖父大島宗左衛門が、大隈重信の勧めで飛び団子を東京で売り出すことを決意し、岩瀬の五大家の一つ宮城家が竹久夢二を招いた縁で包装紙のデザインを依頼、巖谷小波作詞の歌を得て、大々的に売り出すことになった経緯を記す。あわせて飛び団子由来譚、七福亭の飛び団子について紹介。	『富山新聞』 平成十九年二月五日、二月十二日
平成十九年	二〇〇七	五月十一日、新聞記事「名物「飛び団子」発売 岩瀬・七福亭」。毎年五月十日から飛び団子を販売する七福亭の取材記事。	『北日本新聞』 平成十九年五月十一日

平成十九年	二〇〇七	六月十七日、ノーベル街道探訪ウォーク第三弾を富山市岩瀬地区で開催。六月三十日「北日本新聞」記事掲載の岩瀬地区参加者アンケート「お気に入りの特産・名産」の一つに、飛び団子が挙がる。	『北日本新聞』 平成十九年六月二十日
平成十九年	二〇〇七	九月十九日、富山市岩瀬地区の住民有志が、飛び団子の歌のCDを製作し、楽譜、大井冷光の童話とあわせて岩瀬小学校に寄贈した。CDを制作したのは、西宮正直氏、放生敏嗣氏、犬島莊一郎氏。	『北日本新聞』 平成十九年九月二十日
平成二十年	二〇〇八	五月一日、富山市大広田小学校が、創立百三十五周年記念式を開催。教育ボランティアの酒井初江氏が、地域に残る伝承を語り、飛び団子由来譚などを紹介。	『北日本新聞』 平成二十年五月二日
平成二十年	二〇〇八	十二月十三日、富山市芝園小学校区「よつば子ども会」がクリスマス会の集いを開催。奥井悦子とやま語りの会代表による民話劇「こびだんご」などが披露された。	『北日本新聞』 平成二十年十二月十四日
平成二十一年	二〇〇九	十月二十九日、新聞記事「読者文芸サークル作品」掲載作品に、飛び団子を題材とした俳句。「罌雲大口あけて飛びだんご 高本照子(漁り火句会)」。	『北日本新聞』 平成二十一年十月二十九日夕刊
平成二十二年	二〇一〇	一月十二日、新聞記事「われら越中守 とやま語りの会員 並木信子さん(七十二) 富山市金屋」とやま語りの会では、飛び団子ほか、富山に伝わる民話を学ぶ。	『北日本新聞』 平成二十二年一月十二日
平成二十二年	二〇一〇	十月二十八日、新聞記事「旧街道ぶら輪(二) 北陸道そうけ塚(富山市) 戦国武将激戦しのぶ」。善田豊後守に関する遺物紹介。豊後守について「飛び団子のお殿様」と記す。	『北日本新聞』 平成二十二年十月二十八日
平成二十三年	二〇一一	三月、富山市教育委員会が、「飛びだんご伝説」と「熊野地蔵」解説板(現・富山市海岸通)を設置。善田豊後の守が、窮地に「熊野様現、助けたまえ」と祈ったところ団子がどくからともなく飛んで来て口中に入ったと記す。また、「熊野地蔵」はこの伝説とゆかりが深いと記す。内容は、「県別ふるさとの民話 富山県の民話」等を参考にしたと考えられるもの。	平成二十八年七月、現地確認。

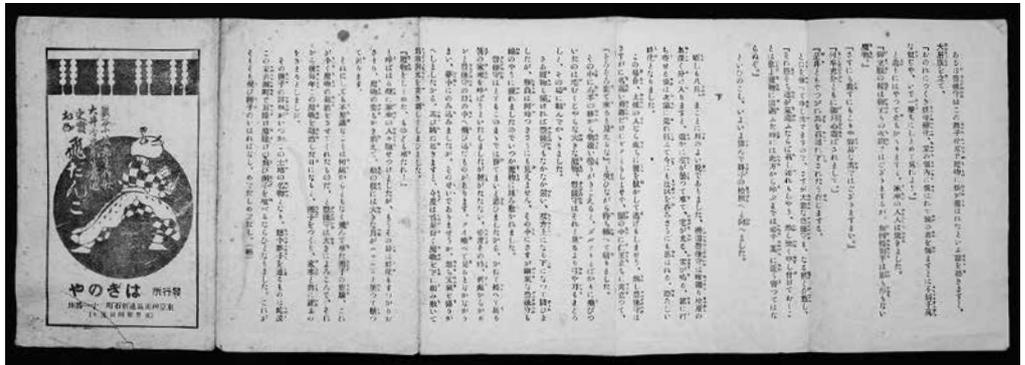
平成二十三年	二〇一一	六月十四日、新聞記事「ふるさとまち自慢 富山市岩瀬地区(一) 飛び団子 季節限定伝統の味」。飛び団子由来譚の概略を紹介。戦前の岩瀬には飛び団子を作る茶屋が七、八軒あったと記す。また、大隈重信が賞美したと記す。	『富山新聞』 平成二十三年六月十四日
平成二十五年	二〇二三	五月十九日、新聞記事「記者ぶろぐ 報道センター 吉崎美喜 伝説の団子 継承願う」。近年使用される「パワーフード」という語に引きつけて、飛び団子を紹介。飛び団子由来譚の概略と、かつて複数あった飛び団子を商う店も現在は七福亭のみであることを記す。	『北日本新聞』 平成二十五年五月十九日
平成二十五年	二〇二三	九月十三日、新聞記事「ふるさと風土記一九三七 富山市岩瀬地区 歴史と伝説誇る港町(四) 飛だんご 伝説の味いつまでも」。飛び団子由来譚の概略、かつて複数あった飛び団子を商う店も現在は七福亭のみであることを記す。	『北日本新聞』 平成二十五年九月十三日
平成二十六年	二〇二四	九月二十二日、新聞記事「ふるさと風土記二〇六三 富山市大広田地区 潮風薫るエコタウン(八) 豊田豊後守 郷土の歴史語り伝える」。教育ボランティアの岩田満氏取材。飛び団子由来譚の語り聞かせを行っている。豊後守が飛び込んだできた団子を食べて力をつけ、獣を倒したと記す。	『北日本新聞』 平成二十六年九月二十二日
平成二十七年	二〇二五	九月十九日、「とやまの森づくりボランティアの集い」を富山市内の大村海岸周辺で開催。クロマツの植樹や海岸清掃を行う。講習会で、教育ボランティアの岩田満氏が「古志の松原」や「飛び団子」について説明した。	『北日本新聞』 平成二十七年九月二十日
平成二十八年	二〇二六	五月二十三日、新聞記事「スクエア 団子屋「七福亭」店主 古部昌子さん(六十九) 創業一四九年 老舗守る」。七福亭取材記事。飛び団子由来譚の概略あり。	『朝日新聞』 平成二十八年五月二十三日



「はぎのや」リーフレット記載の大井冷光童話と巖谷小波作詞の歌（個人蔵）



「はぎのや」リーフレット（個人蔵）



「はぎのや」リーフレット裏面（個人蔵）



東京店の所在地を記載する「はぎのや」包装紙（個人蔵）



東京店と東岩瀬停車場構内を所在地とする「はぎのや」包装紙（個人蔵）

Ⅲ 「企画展概要」

(1) 企画展 「あの日、青い空から―久世光彦の人間主義」

小林加代子

(2) 企画展 「山の湯の詩情―田中冬二へのいざない」

綿引 香織

(3) 企画展 「松本清張を魅惑した北陸―ミステリー文学でたどる―」

大川原竜一

(4) 企画展 「夢二の旅―たまき・翁久允とのゆかりにふれつつ」

小林加代子

(1) 企画展

「あの日、青い空から―久世光彦の人間主義」

小林 加代子

久世光彦は、十歳の夏、疎開先の父母の郷里で富山大空襲を体験した。少年の目に、惨禍の光景は、神話の世界のような美しいものと映ったと久世は後に記している。

焦土と化した富山市街は終戦の日を迎える。その夏の日の青過ぎるくらい青い空―喪失、空虚さ、不安をはらんだ空の色は、久世の心に、そして同世代を生きた人びとの心に強い印象を残した。

大ヒットテレビドラマシリーズ「時間ですよ」、「寺内貫太郎一家」をはじめとした演出作品、「悪魔のようなあいつ」で試みたドラマ、漫画、劇中歌を同時発信させるような先鋭的なプロデュース、第三十五回日本レコード大賞受賞曲「無言坂」に代表される数々の作詞曲、昭和六十年代以降、執筆した膨大な数のエッセイや小説など、久世光彦の仕事は、昭和、平成を生きてきた人びとの感性に多方面から大きな影響を及ぼした。その原点には、空襲と終戦―恐ろしさの中に美しさを見る体験があった。

本展では、同時代の感性に刺激を与え続けた久世光彦の作品世界を紹介するとともに、十代の多感な時期を過ごした富山時代に焦点を当てた。当時、久世が何を見、何を考え、何を記したかをたどることで、後の仕事に通底するまなざしと、そのまなざしを育んだものが何であったのかを探った。

本展において、若き日に「年上の女人」に送った書簡を、展示に限って初公開させていただく機会を得た。富山時代を経たばかりの表現者・久世光彦の出発点がうかがえる貴重な書簡群である。

展示は、三章構成とした。

第一章「生きるための笑い」では、導入展示部分を含め、演出を手がけたテレビドラマの映像、写真、企画書、台本、ゆかりの品、また、著作、原稿、ノート、挿絵の原画などを展示し、久世光彦の仕事の魅力を紹介した。

久世演出のテレビドラマには、筋を逸脱するバラエティー要素が随所にちりばめられた。本当なのか嘘なのか、本気なのかふざけているのか。視聴者は常に宙ぶらりんになされ、その状態を楽しんだ。不合理でおかしな状態にこそリアリティがあったのである。久世は、生きづらい現実を生きるために、自らと自らが生きる現実を客観的に捉えなおして笑うという方法があることを示した。

第二章「少年の日の重い体験」では、ゆかりの品や、当時の文章、作家となった後の文章をパネルなどで展示し、久世光彦の仕事の魅力の原点が、空襲と終戦の体験にあることを紹介した。

戦争体験は、少年の目に嘘のような現実を突きつけた。空襲によって死の世界が恐ろしい美しいものであることを目の当たりにし、終戦を境に、昨日までの世界は別のもの変わった。善悪があつという間に転倒した現実を信じることもできず、現実から疎外されるもの、すなわち美し死にひきつけられる自分も存在していた。少年の心にあつたのは不安であった。

第三章「黙す心のうた」では、「年上の女人」に送った書簡、大学生時代に創作した詩、演出した演劇のパフレットなどを展示した。また、作詞曲や、最後のときに一曲だけ聴けるとしたら何を聴くかをテーマとした連載エッセイ「マイ・ラスト・ソング」の文章、小泉今日子氏の朗読と浜田真理子氏のピアノ弾き語りによるコンサート「マイ・ラスト・ソング」の映像などを紹介し、久世がいかにして表現者となつていったかを追った。

久世光彦にとっての富山は、東京からやってきた少年が後に東京に戻り活躍するためにはならなかった、後の仕事の原点といえる場所である。少年は、多くの人の生と死に接し、文学、映画といった虚構を大量に吸収して、現実を一步引いて、理知のまなざしで見える目を培った。そして「女性」と出会い、詩や文、また演劇によって表現する方法を獲得していったのである。

久世光彦は、戦争体験と戦後に向き合った。戦後民主主義の時代に疑問を投げかけ、曖昧な現実を対象化し、そして笑うことによって、同時代の共感を得た。その出発がテレビという新しいメディアであったことは、一時性、同時性、影響力において、極めて重要である。

□主な展示物

種別	資料(作品)名	作者	年代	所蔵
イラスト (パネル)	「時間ですよ」の舞台の銭湯 「松の湯」入り口をイメージした イラスト展示パネル	アクセス	平成27年 (2015)	アクセス
舞台道具	電話ボックス	アクセス	年代未詳	アクセス
舞台道具	郵便ポスト	アクセス	年代未詳	アクセス
イラスト (パネル)	「時間ですよ」の舞台の銭湯 「松の湯」浴場をイメージした イラスト展示パネル	アクセス	平成27年 (2015)	アクセス
映像	「時間ですよ(第2シリーズ)」 場面映像	—	昭和46年 (1971)	TBSテレビ、 TCエンタテインメント
映像	「時間ですよ(第3シリーズ)」 場面映像	—	昭和48年 (1973)	TBSテレビ、 TCエンタテインメント
映像	「寺内貫太郎一家」場面映像	—	昭和49年 (1974)	TBSテレビ、 TCエンタテインメント
映像	「寺内貫太郎一家2」場面映像	—	昭和50年 (1975)	TBSテレビ、 TCエンタテインメント
映像	「悪魔のようなあいこ」場面映像	—	昭和50年 (1975)	TBSテレビ、 TCエンタテインメント
映像	「ムー」場面映像	—	昭和52年 (1977)	TBSテレビ、 TCエンタテインメント
映像	「ムー」族 場面映像	—	昭和53年 (1978)	TBSテレビ、 TCエンタテインメント
写真帳	「時間ですよ」たびたび「セット 写真」	—	昭和63年 (1988)	TBSテレビ
図面	「時間ですよ」セット図面	—	昭和45年 (1970)	TBSテレビ
台本	「時間ですよ」台本台冊(10点)	橋田壽賀子、 小松君郎、 松田暢子脚本、 久世光彦、 伊藤勇、 山泉脩、 田沢正稔演出	昭和45年 (1970)	TBSテレビ
台本	「時間ですよ」第76回台本	石森史朗脚本、 近藤邦勝演出	昭和48年 (1973)	TBSテレビ
台本	「時間ですよ」第91回台本	向田邦子脚本、 近藤邦勝演出	昭和48年 (1973)	TBSテレビ

種別	資料(作品)名	作者	年代	所蔵
図面	「寺内貫太郎一家」 第1回セット図面	—	昭和48年 (1973)	TBSテレビ
ジオラマ	「寺内貫太郎一家」 撮影風景イメージジオラマ	アクセス	平成27年 (2015)	アクセス
台本	「悪魔のようなあいこ」 第1回決定稿	長谷川和彦脚本、 久世光彦演出	昭和50年 (1975)	TBSテレビ
レパー式ファ イル	「悪魔のようなあいこ」ファイル (企画書「スーパースターのため のノート」、スケジュール、配役 表等綴)	久世光彦他	昭和50年 (1975)	個人
レコードジャ ケット	沢田研二「時の過ぎゆくまに ／旅立つ朝」(ポリドール)	阿久悠作詞、 大野克夫作曲 (時の過ぎゆく まにに) 安井かずみ作 詞、加瀬邦彦作 曲(旅立つ朝)	昭和50年 (1975)	個人
書籍	講談社コミックスYL 「悪魔のようなあいこ」全2巻(2点)	上村一夫(絵)、 阿久悠(原作)	昭和50年 (1975)	当館
台本	「ムー」台本(18点)	松田暢子、林南 無、山元清多、 森薫、田村隆脚 本、久世光彦、 峰岸進、近藤邦 勝、服部晴治、 古谷昭綱他演出	昭和52年 (1977)	TBSテレビ
台本	「ムー」族 台本(26点)	山元清多、森薫、 田村隆、山泉あ きら、大神明、 加藤直脚本、久 世光彦、峰岸進、 近藤邦勝、和田 旭、高橋利明、 遠藤環、宮田吉 雄他演出	昭和53年 (1978)	TBSテレビ
書類	「ムー」企画書	久世光彦	昭和52年 (1977)	個人
手帳	1978年スケジュール帳	久世光彦	昭和53年 (1978)	個人

種別	資料(作品)名	作者	年代	所蔵
レコードジャ ケット	郷ひろみ・樹木希林 「帰郷／お化けのロック」 (CBSソニー)	阿木燿子作詞、 宇崎竜童作曲 (帰郷) 阿木燿子作詞、 宇崎竜童作曲 (お化けのロッ ク)	昭和52年(1977)	個人
レコードジャ ケット	郷ひろみ・樹木希林 「林檎殺人事件／また会える？」 (CBSソニー)	阿久悠作詞、 穂口雄右作曲 (林檎殺人事件) 阿久悠作詞、 穂口雄右作曲 (また会える?)	昭和53年(1978)	個人
原稿	「ユニークってなあに？」	久世光彦	昭和53年(1978)頃	個人
台本	「向田邦子直木賞十周年記念ドラマ 思い出トランプ」後編改訂稿	寺内小春脚本	平成2年(1990)	TBSテレビ
台本	「向田邦子新春ドラマスペシャル 女正月」決定稿	金子成人脚本	平成3年(1991)	TBSテレビ
台本	「月曜ドラマスペシャル 終戦スペシャル いつか見た青 い空(仮題)」改訂稿	山元清多脚本	平成7年(1995)	TBSテレビ
台本	「月曜ドラマスペシャル 新春シリーズ 風を聴く日 (仮題)」決定稿	金子成人脚本	平成7年(1995)	TBSテレビ
台本	「月曜ドラマスペシャル 終戦特別企画 昭和のいのち(仮 題)」決定稿	山元清多脚本	平成10年(1998)	TBSテレビ
台本	「月曜ドラマスペシャル 終戦特別企画 あさき夢見し (仮題)」決定稿	山元清多脚本	平成11年(1999)	個人
台本	「2000年正月スペシャル 向田邦子 新春ドラマ あ・うん」 決定稿	筒井ともみ脚本	平成12年(2000)	TBSテレビ
台本	「月曜ドラマスペシャル さらば 向田邦子 風立ちぬ」決定稿	金子成人脚本	平成13年(2001)	TBSテレビ
台本	「向田邦子 新春ドラマ 向田邦子の恋文」	大石静脚本	平成16年(2004)	TBSテレビ
書類	「向田邦子」講演会用メモ	久世光彦	年代未詳	個人

種別	資料(作品)名	作者	年代	所蔵
葉書	「いつか見た青い空」放送日時通 知(富山の友人宛て)	久世光彦	平成7年(1995)	個人
ノート	「'96夏の向田ドラマ 言ふなかれ 君よ別れを」	久世光彦	平成8年(1996)	個人
書画	「麗子の足」	中川一政画、 向田和子書	昭和62年(1987)	個人
書	「春が来た」	中川一政	昭和57年(1982)	個人
絵画	久世光彦「一九三四年冬―乱歩― 翁華英青年像」	建石修志	平成6年(1994)	個人
絵画	久世光彦「東京人」連載「帝都 の唄」より「三好達治 乳母車 その2」挿画	建石修志	平成10年(1998)	作家
絵画	久世光彦「東京人」連載「帝都 の唄」より「佐藤春夫少年の日」 挿画	建石修志	平成11年(1999)	作家
絵画	久世光彦「東京人」連載「帝都 の唄」より「中原中也 朝の歌」 挿画	建石修志	平成11年(1999)	作家
絵画	久世光彦「新・調査情報Pas singtime」連載 「極上の暇つぶし」より 「地底の歌その2」挿画	建石修志	平成10年(1998)	作家
絵画	久世光彦「新・調査情報Pas singtime」連載 「極上の暇つぶし」より 「地底の歌その4」挿画	建石修志	平成10年(1998)	作家
絵画	久世光彦「逃げ水半次無用帖」 (文藝春秋)装画	建石修志	平成10年(1998)	作家
絵画	久世光彦「謎の母」 (新潮文庫)装画	建石修志	平成13年(2001)	作家
絵画	久世光彦「時を呼ぶ声」 (学研M文庫)装画	建石修志	平成16年(2004)	作家
原稿	「紅い靴の秘密」	久世光彦	昭和62年(1987)頃	個人
書類	「乱歩は散歩」創作メモ	久世光彦	平成3年(1991)頃	個人

種別	資料(作品)名	作者	年代	所蔵
書籍	『現代大衆文学全集3 江戸川乱歩集』(平凡社)	江戸川乱歩	昭和2年(1927)	個人
書類	『早く昔になればいい』創作メモ	久世光彦	平成4年(1992)頃	個人
ノート	『陛下』創作ノート	久世光彦	平成7年(1995)頃	個人
ノート	『串弥呼』創作ノート	久世光彦	平成7年(1995)頃	個人
書類	『謎の母』創作メモ	久世光彦	平成7年(1995)頃	個人
ノート	『泰西からの手紙』創作ノート	久世光彦	平成8年(1996)頃	個人
書類	『逃げ水半次無用帖』創作メモ	久世光彦	平成9年(1997)頃	個人
書類	『いけない指』創作メモ	久世光彦	平成11年(1999)頃	個人
ノート	『燃える類』創作ノート(2点)	久世光彦	平成10年(1998)頃	個人
書簡(印刷物)	紫綬褒章受章礼状	久世光彦	平成10年(1998)	個人
書簡(印刷物)	紫綬褒章受章記念「久世光彦さんをお祝する夕べ」招待状	森繁久彌、森光子、砂原幸雄、日枝久、田辺昭知	平成11年(1999)	個人
雑誌	『東京人』第13巻第7号 『帝都の歌7 三好達治「花筐」掲載』	久世光彦文、建石修志絵	平成10年(1998)7月	当館
雑誌	『東京人』第14巻第3号 『帝都の唄14 佐藤春夫「少年の日」掲載』	久世光彦文、建石修志絵	平成11年(1999)3月	当館
雑誌	『東京人』第15巻第1号 『帝都の唄24(完) 中原中也「含羞」掲載』	久世光彦文、建石修志絵	平成12年(2000)1月	当館
写真(パネル)	『旅は北陸へ』 『北陸都市観光連盟』	久世光彦文、建石修志絵	昭和11年(1936)	富山市郷土博物館
写真(パネル)	『富山戦災写真帖』写真 (昭和20年8月4日撮影)	谷田忠雄	昭和20年(1945)	富山県立図書館
木簡	富山城跡(総曲輪通り南地区)出土「福澤屋」兵衛「木簡」2点	富山市教育委員会埋蔵文化財センター	江戸後期	富山市教育委員会埋蔵文化財センター
木簡	富山城下町遺跡主要部(西町南地区)出土「久世伊平」木簡	富山市教育委員会埋蔵文化財センター	江戸末期、明治期	富山市教育委員会埋蔵文化財センター
原稿	『正論』平成5年7月号原稿	久世光彦	平成5年(1993)	個人
雑誌	『正論』平成5年7月号(私の写真館・アルバムの中に)掲載	久世光彦	平成5年(1993)7月	当館
原稿	『私の人生九十年の記録』	久世ナヲ	平成2年(1990)	個人
写真帳	久世家アルバム(2点)	久世ナヲ	平成2年(1990)	個人

種別	資料(作品)名	作者	年代	所蔵
編物	レース編みテーブルセンター	久世ナヲ	昭和中期	個人
絵画	満州の風景を描いた油彩画	久世彌三吉	昭和前期	個人
書籍	院展・文展・帝展の絵葉書箱(1点)	久世彌三吉	昭和前期	個人
書籍	単身赴任の父から幼少の光彦に宛てた葉書(4点)	久世彌三吉	昭和前期	個人
装飾品	父の正装用の肩章	久世光彦	昭和前期	個人
装飾品	父の正装用のベルト飾りのタツセル	久世光彦	昭和前期	個人
書簡	父に宛てた手紙	久世光彦	昭和前期	個人
書簡	父に宛てた手紙	久世光彦	昭和前期	個人
書簡	熊野村安養寺の疎開先から父に宛てた手紙 (昭和20年8月14日付)	久世光彦	昭和20年(1945)	個人
書簡	終戦後父に宛てた手紙 (昭和20年9月18日付)	久世光彦	昭和20年(1945)	個人
書籍	『改訂 新歳時記』 (改訂版、三省堂)	高浜虚子編	昭和15年(1940)	個人
書籍	『新釈 諸国断』(生活社)	大幸治	昭和20年(1945)	個人
書籍	『惜別』(大日本雄弁会講談社)	大幸治	昭和22年(1947)	個人
書籍	『お伽草紙』(筑摩書房)	大幸治	昭和20年(1945)	個人
日用品	父の軍用トランク	久世光彦	大正期、昭和前期	個人
書類	『昭和風雲録』創作メモ	久世光彦	昭和60年(1985)頃	個人
新聞	『北陸夕刊』 昭和22年1月24日記事 『コトモ俳句』 (久世光彦俳句掲載) 切抜	久世光彦	昭和22年(1947)	個人
複写物	『北陸夕刊』 昭和22年5月20日記事 『良い子と市長さんの名論戦』複写物	久世光彦	昭和20年(1945)頃	個人
書簡	姉に宛てた手紙	久世光彦	昭和20年(1945)頃	個人
書籍	立山登山について記した葉書	久世光彦	昭和20年代	個人
書籍	『中等国語 一』	文部省	昭和22年(1947)	個人
書籍	『中等国語 二』	文部省	昭和24年(1949)	個人
書籍	『中等国語 三』	文部省	昭和24年(1949)	個人

種別	資料(作品)名	作者	年代	所蔵
冊子	『中学作文2』(富山県作文研究会、「母の思い出」掲載)	久世光彦他	昭和24年(1949)	個人
複製物	『富山師範学校附属中学校卒業記念版画集』複製物	久世光彦他	昭和26年(1951)	個人
書簡	姉に宛てた手紙	久世光彦	昭和27年(1952)	個人
写真	久世光彦高校2年生の体育祭での写真	個人	昭和27年(1952)	個人
写真帳	富山県立富山高等学校卒業アルバム1954	個人	昭和29年(1954)	個人
手帳	『遺書に代えて』と題した革製の手帳	久世光彦	昭和29年(1954)	個人
雑誌	『新詩人』第10巻第11号(『小さな夜想曲』掲載)	久世光彦他	昭和30年(1955)	当館
雑誌	『新詩人』第11巻第2号(『蒼褪めた馬車』掲載)	久世光彦他	昭和31年(1956)	当館
雑誌	『新詩人』第11巻第4号(『鹿』掲載)	久世光彦他	昭和31年(1956)	当館
雑誌	『新詩人』第12巻第1号(『押花』掲載)	久世光彦他	昭和32年(1957)	当館
雑誌	『新詩人』第12巻第5号(『螢子のいる風景』掲載)	久世光彦他	昭和32年(1957)	当館
雑誌	『新詩人』第12巻第6号(『森の歌』掲載)	久世光彦他	昭和32年(1957)	当館
雑誌	『新詩人』第12巻第7号(『刺草の蔭に』掲載)	久世光彦他	昭和32年(1957)	当館
複製物	『新詩人』掲載詩自筆原稿複製物(8点)	久世光彦	昭和30年(1955)頃	個人
雑誌	『赤門詩人』第1号、第9号(9点、うち3点に「匣の中のクリスマス」、「螢子Ⅰ」、「港へ」螢子Ⅱ」掲載)	久世光彦他	昭和33年(1958)8月、昭和35年(1960)12月	当館
冊子	劇団駒場第3回公演「泥棒たちの舞踏会」パンフレット	久世光彦他	昭和33年(1958)	個人
ノート	KRT日誌'63'4	久世光彦	昭和35年(1960)	個人
書簡	年上の女人(ひと)に宛てた手紙(24点)	久世光彦	昭和35年(1960)	個人

種別	資料(作品)名	作者	年代	所蔵
記念品	1993年第35回日本レコード大賞「無言坂」盾	久世光彦(市川睦月名義)	平成5年(1993)	個人
記念品	1995年度第28回日本作詩大賞「桃と林檎の物語」盾	久世光彦(市川睦月名義)	平成7年(1995)	個人
記念品	2006年第48回日本レコード大賞特別功労賞盾	久世光彦	平成18年(2006)	個人
CDジャケット	香西かおり「無言坂」(ポリドール)	市川睦月作詞、玉置浩一作曲	平成5年(1993)	当館
CDジャケット	香西かおり「くちなし悲歌(エレジー)」(ポリドール)	小谷夏作詞、三木たかし作曲	平成5年(1993)	当館
CDジャケット	由紀さおり「恋祭(東芝EMI)	市川睦月作詞、玉置浩一作曲	平成8年(1996)	当館
書籍	『富大附中三十五年』	富山大学教育学部附属中学校三十五周年記念事業実行委員会	昭和58年(1983)	個人
書籍	『追想 久世光彦』	馬小舎の会	平成19年(2007)	当館
写真帳	馬小舎の会アルバム	馬小舎の会	平成18年(2006)頃	個人
原稿	「手に手をとり合い」	久世光彦	平成6年(1994)頃	個人
書類	「港が見える丘」創作メモ	久世光彦	昭和60年(1985)頃	個人
映像	「マイ・ラスト・ソング」第1回公演映像(世田谷パブリックシアター)	久世光彦、小泉今日子、浜田真理子	平成20年(2008)	ファイブディー・ラボ

(2) 企画展

「山の湯の詩情―田中冬二へのつねなご」

綿引 香織

富山には、山の中から渓谷沿い、海の近くにまで、さまざまな温泉が点在する。「越中では山深い温泉ほど身体によく効くといふ考へ方がある」(田部重治「山の温泉の今昔」といい、かつては立入が制限されていた黒部峡谷の奥地にまで温泉が営まれていた。また、山岳愛好家たちの記録には、立山温泉や鐘釣温泉など、山の中にある温泉(山の湯)を訪れたことがたびたび記されており、山旅における温泉の魅力がうかがえる。

こうしたなかで、黒雑温泉、鐘釣温泉、宇奈月温泉など、富山県内の「山の湯」を好んで作品にとりあげたのが、黒部市生地をふるさととした詩人・田中冬二(一八九四〜一九八〇)である。本展では、富山の温泉のなかでも「山の湯」に着目し、田中冬二の視点を中心として、「山の湯」をめぐる文学作品の世界を探った。

プロローグ 山の湯へのいざない

①富山の温泉の歴史

江戸中期の医師・香川修徳により元文三年(一七三三)に刊行された『一本堂葉選』の続編は、日本初の温泉医学書ともいわれているが、越中の温泉地として、山田、大牧、小川、立山の四箇所を挙げている。この四湯は、「越中四名湯」と言われることもあり、全国に知られた存在であったようだ。森田柿園が幕末から明治初期にかけてまとめた地誌『越中志徴』では、越中の温泉として、「大牧村の温泉」「小川温泉」「立山の温泉」を挙げている。ここに湯量豊富な黒部峡谷の温泉群が一つも入っていないのは、この地域が加賀藩の支配下であって立入が禁じられていたためである。

近代になると、長らく秘境とされていた黒部奥山にようやく足を踏み入れることができるようになり、新聞記者・井上江花(一八七一〜一九二七)に

よる探検記や、吉沢庄作や冠松次郎(一八八三〜一九七〇)による山旅の記録などにより、その豊かな自然と温泉の存在が世の中に紹介された。新川県(富山県の前身)が編纂した『新川県治一覽』(明治七年分)では、黒雑など十箇所、明治十九年(一八八六)に内務省衛生局が編纂した『日本鉱泉誌』には、西鐘釣など十二箇所が、富山県の温泉として挙げられている。黒部峡谷の温泉がようやく利用されるようになっていたことがわかる。大正十二年(一九二三)の内務省衛生局編『全国温泉鉱泉二関スル調査』では、四十五箇所の県内の温泉・鉱泉が挙げられており、次第に多くの温泉・鉱泉の存在が知られるようになっていったことがうかがえる。

②黒部峡谷の温泉

黒部奥山の温泉のうち早くから開湯が許されたのは、黒部川左岸に位置し、越後や信濃の国境から離れていた西鐘釣温泉(現在の鐘釣温泉)である。文政二年(一八一九)の開湯後、経営困難のため一時閉湯となるが、慶応四年(一八六八)頃になって再開され、その後林道や鉄道が整備されてからは、一般の利用者も訪れることができるようになった。

黒雑温泉は、黒部川右岸にあつて信濃や越後とも接しているため、加賀藩により長らく立入や開湯が禁じられていた。開湯が許されたのは慶応四年(一八六八)のことである。その後は、黒部峡谷では最も人里近くにある温泉として、一般にも広く利用されるようになった。

奥黒部には、仙人の湯(慶応四年開湯)、祖母谷温泉(明治三十八年開湯、昭和四十二年現在地に移る)、名剣温泉(昭和三十二年開湯、昭和四十四年の水害で流出した翌年、現在地に移る)、樺平温泉、阿曾原温泉(昭和二十三年頃開湯)などがある。

愛本温泉、小黒部温泉、二見温泉、新鐘釣温泉(錦繡温泉)など、開湯後にぎわいを見せながらも、さまざまな理由で廃湯になった温泉も多い。二見温泉と愛本温泉は、のちに開湯される宇奈月温泉へとつながっていく。

1. 山の湯のくずの花 ― 田中冬二と富山の温泉

①静かな山の湯のひととき ― 冬二にとつての温泉

田中冬二の詩や随筆には、小谷温泉、白骨温泉、田沢温泉、野沢温泉、法

師温泉、飛騨平湯温泉など、数多くの温泉が登場する。これらは、若い頃から続けていた旅で訪れた温泉が大半であるが、長野県の温泉が多いのは、明治四十二年（一九〇九）に刊行された吉江孤雁（喬松）の『高原』を愛読した冬二にとって、長野が憧れの地だったことと、勤務先の転勤の関係で、長野に四年間、上諏訪に三年間住んでいたためだろう。上諏訪の家には内湯があり、朝晩の楽しみとしていたという。

冬二が訪れた温泉地や宿を見てみると、山間にたえず静かな温泉地が多く、便利さや豪華さとはおよそ無縁な、素朴な宿を好んでいたことがわかる。昔ながらの湯治宿であり、今では「秘湯」と呼ばれるような場所も多い。

冬二の目は、宿の周辺に自生する樹木や花々、虫や鳥の声、溪流のせせらぎなどが作り出す情景を、作品のなかに生き生きと描き出す。山のなかに湧く温泉もまた、大きな自然の一部である。そこには一人静かに山の湯を楽しむ冬二の姿がある。作品には、山の湯ならではの風物が余すところなく描かれており、湯治客や宿で働く人々の姿が、作品に温かみと彩りを添える。冬二の作品に山の湯がたびたびとりあげられるのは、自身の嗜好もあるだろうが、こうした素朴な美しさをもつ山の湯の雰囲気、冬二のめざした詩的世界とも呼応するものだったからではないだろうか。冬二の温泉に関する思い出をつづった随筆「思ひ出るまま」によれば、温泉好きになるに至ったのは、秋の修学旅行で日光の湯元温泉を訪れた中学二年の時（明治四十二年頃）だという。

また、吉江孤雁の『高原』は、冬二の自然や山への憧れと、文学への志に決定的な影響を与えた。本書に登場する姫川の谿や小谷温泉を訪れるのを長年の夢としていたことを、冬二自身述べており、明治四十四年（一九一一）に『文章世界』に投稿してはじめて活字になった短文「山の湯より」にも、『高原』の影響がうかがえる。冬二が早い時期から温泉と密接な関わりをもっていたことがわかる。

②なつかしきふるさと——生地鉱泉

銀行員であった父吉次郎の転勤に伴い、冬二は福島で生まれ、秋田で幼少期を過ごし、七歳になる年に父を亡くしてからは、母方の祖父の強い求めに従って上京し、東京で生活するようになった。しかし冬二は、自らの「ふるさと」は黒部市の生地である、ということ、折にふれて語っている。

冬二の両親はともに富山県の出身で、父吉次郎の生家は黒部市生地にあった。祖父庄七は、生地で雑貨小間物商を営んでいた。冬二は自分を可愛がってくれた祖父母を慕い、とくに祖父について、「身長高く耳のとおい人であったが善良にして、郷党から特に親しまれ敬慕されていた。」（『自筆年譜』）と語っている。祖父庄七は冬二が十歳の時に、祖母むめは冬二が十九歳になる年に亡くなった。「ふるさとの家」も人手に渡り、面影を留めなかった。

一方、父方の本家が生地で鉱泉宿「たなかや」を開業したのは、明治四十四年（一九一一）七月、冬二が十七歳になる年のことであった。伯父の菊次郎氏を冬二は父のように慕い、のちに帰郷する際にはたなかやに泊まり、新鮮な魚で酒を酌み、湯につかり、親族との交流を楽しんだ。そして菩提寺にお参りをした。両親を早くに亡くした冬二は、父祖の地であり、なつかしい祖父母の思い出の残る生地に、帰るべき「ふるさと」を求めたのであろう。冬二の目を通して描かれる「ふるさと」は、少年の日に見た、どこから寂しい風景が広がる日本海辺の小さな町であり、郷愁を誘う素朴な風土や人情を有する土地であり、念仏を唱える声が聞こえる、信仰心の篤い土地でもあった。やがて、ふるさとの風景の一部に温泉（鉱泉）も加わるようになった。

③湯の花の香り——黒雑温泉

黒雑温泉は黒雑川流域に湧く高温泉で、無色透明の単純硫酸泉である。豊富な湯量を誇り、宇奈月温泉の泉源でもある。黒部峡谷鉄道（トロッコ電車）の黒雑駅からしか行くことができない、溪流の辺にたえずむ一軒宿である。美しい山と川に恵まれた静かな一軒宿は、冬二の好みに合うものだったようである。黒雑温泉をうたった詩や随筆が複数篇残されている。黒雑温泉関連で最も早い時期に発表されたのは、昭和三年（一九二八）七月に『パンテオン』に掲載された詩「くずの花」であり、冬二は少なくともそれ以前に黒雑温泉を訪れていたであろう。

随筆「浴泉記」（『高原と峠をゆく』所収）には、「宇奈月から日本電力の軌道でゆく黒雑は、山の湯の感じの深い処である。くずの花の中を下りてゆくと、石をのせた板屋根が足下に見えて、粗末な宿は溪流に臨んでゐる。」とあり、湯槽の中で老人達がしきりに念仏を唱え、それに若者たちも唱和する光景が描写されている。

「くずの花」は冬二の代表作の一つともいえる詩で、くずの花の咲く秋の日、黒雑温泉に老夫婦が静かに入っている情景をうたっている。「じじい」と「ばばあ」の姿が、山の湯に咲く、ありふれた素朴なくずの花の姿に重ね合わされており、わずかに四行の詩の中に普遍性が生まれている。

ほかにも、山の夜冷えのするなか、箱ランプの灯をたよりに温泉に入る様子をつたった「黒雑温泉」、夕暮れから夜にかけての谷間の湯の情景を描いた「黒雑の湯」、薬師堂に奉納された詩碑についてふれた「黒雑温泉の菩提樹」、晩年に黒雑温泉を懐かしんでうたった「黒雑温泉」などの詩がある。

黒雑温泉の薬師堂には、昭和四十八年（一九七三）、冬二の後援会である黒部市の「くずの花の会」によって、「くずの花」の詩碑が奉納された。このときは、冬二も会の人々とともに黒雑温泉を訪れている。大理石に彫られた瀟洒な詩碑は、現在、黒雑温泉旅館内の内湯の近くに安置されている。

2. 溪谷の湯と文人たち —— 宇奈月温泉

かつて「桃源」と呼ばれる無人の地であった宇奈月で、苦勞の末黒雑温泉からの引湯に成功したのは、大正十二年（一九三三）十一月末のことであった。

宇奈月温泉の歴史は、黒部の豊かな水資源を利用した電源開発の歴史と密接に関わっている。電源開発が進む過程で、そこで働く人々の厚生施設として整備が進められ、また宇奈月と周辺の都市および黒部峡谷内をつなぐ交通網が発達したことで、かつては秘境ともいわれた黒部峡谷に多くの人が訪れるようになり、その玄関口にあたる宇奈月温泉も発展を遂げた。開湯以降、大正末から昭和初期にかけて温泉旅館も増え、温泉街は活況を呈した。

宇奈月温泉を訪れた文人たちは、滞在中の体験や見聞を随筆や短歌などに残し、地元の人々との交流をもった。たとえば、昭和三年（一九二八）には、翁久允、竹久夢二、大泉黒石などの一行が、鐘釣温泉探勝の途次、宇奈月温泉に宿泊した。昭和八年（一九三三）には、与謝野鉄幹・晶子夫妻が門弟の招きで宇奈月を訪れ、多くの短歌を残している。昭和十五年（一九四〇）、志賀直哉は、東京から大阪を回り、赤倉へ行く旅の途中、息子とともに宇奈月温泉に立ち寄った。その旅の様子は、短編「早春の旅」に見ることができ、また詩人の西脇順三郎は、昭和三十九年（一九六四）十一

月、富山での講演の後に宇奈月温泉を訪れ、富山の詩人たちと交流した。その時のことは随筆「黒部の秋色」につづらられているが、宿から見た宇奈月の景色を西脇は「すごみのある秋色」と表現している。

そのほかにも、おわらの歌詞を作ったことでも有名な日本画家・小杉放庵は、八尾からの帰り、しばしば宇奈月に宿泊しているし、「黒部音頭」を作った西條八十や、川端康成なども宇奈月温泉に投宿している。彼らが滞在した温泉旅館には、直筆の書画や写真などが残されている。

温泉は、日常生活を離れ、日々の疲れを癒す場でもある。古今東西、温泉を舞台にした文学作品は多い。宇奈月温泉を舞台にした小説も、源氏鶏太「若鮎」、北原亜以子「雪女」などいくつもあり、近年はミステリー小説の舞台にもなっている。

エピソード 鳥の声、川の瀬音を聴きながら —— 山旅の温泉

小島鳥水や木暮理太郎、冠松次郎、田部重治（一八八四～一九七二）、中村清太郎（一八八八～一九六七）など、近代日本の山岳史に名を残す人々が残した著作をひもとくと、山旅の途中で温泉に入ったことを語る文章にしばしば出会う。歩き疲れた身体を休め、温泉の成分で疲労を回復するためという現実的な理由も大きいだろうが、山で温泉に入ることには、それ以上の意義がありそうである。

黒部峡谷と立山は、富山の山の湯を代表する場所にして、日本アルプス随一の温泉郷である。現在入浴利用されている場所のほかにも、未開発の出湯が数多く存在する。ある時期から急に湯が出なくなったり、交通の便の悪さから次第に廃れていったりした例も珍しくはなく、ある時代の温泉の様子をとらえた山旅の記録は、貴重な歴史史料にもなっている。

人里では味わえない野趣あふれる自然を五感で味わいながら温かい湯の感触を楽しむのは、格別なものであろう。それは山旅ならではの醍醐味であり、「実に山旅にとつてのみ享受し得らるゝ快樂」（「山岳地帯の温泉」という冠松次郎の言葉もうなづける。温泉の中に全身を浸すという行為は、人間が自然とまさに一体になることでもある。温泉に入る時にもたらされる精神的な開放感には、ほかでは得がたいものがある。

(3) 企画展

「松本清張を魅惑した北陸―ミステリー文学でたどる―」

大川原 竜一

日本のミステリー文学は、昭和三十年代に発表された松本清張（一九〇九―一九九二）の作品によって大きく展開した。清張は、犯罪の動機と日常性を重視して、それを社会背景と関連させて描くことによって、事件と登場人物にリアリティを与えることに成功した。また、それまでの探偵小説が東京周辺を舞台にしていたのに対し、清張は作品の舞台と背景に日本各地を取り上げ、その景観や風物を細かく描写することで、地方を诗情豊かに表した。北陸もまた作品の舞台あるいは物語の展開における関連地として取り上げられてきた。

その後、ミステリー文学は、旧国鉄の「デイスカバー・ジャパン」キャンペーンや、鉄道ファンによる「ブルートレイン」ブームに後押しされて展開し、多くの作品には旅情が織り込まれるようになり、富山を舞台にしたものも登場した。そこで描かれる景観や風物は、読者に臨場感をもたらずとにも、その舞台の地勢をより鮮明に印象づける。

本展では、北陸・富山を舞台にしたミステリー作品を取り上げ、物語の構成に活かされた風土とその魅力を探った。

展示ゾーンは「Ⅰ 松本清張が描いた北陸―ロマンと愁情―」と「Ⅱ ミステリー文学の舞台・富山」に分けて構成した。

第Ⅰ部は、清張が北陸を取り上げて描いた作品をたどる。翡翠を追い求めた学生が行方不明となることから始まる『万葉翡翠』や、北アルプスを舞台にもつれあう情念と殺意を描いた『遭難』、社会派ミステリー作家としての清張のひとつの到達点を示す傑作と評される『ゼロの焦点』、保険金殺人の嫌疑について法廷で争うミステリーであり、マスコミの先入観による糾弾を批判した社会派小説でもある『疑惑』、夫殺しの罪業を背負い、したたかに生きる女の出身地として富山が取り上げられた『けものみち』。これら5作

品をクローズアップし、作品のあらすじや解説とともに、直筆原稿や書籍などを並べて紹介した。またここでは、清張原作の映画とその資料をあわせて展示した。『ゼロの焦点』や富山県内でロケをした『疑惑』のコーナーでは、野村芳太郎監督が実際に使用した映画台本や絵コンテなども出展した。

清張はミステリー小説を広く大衆に受け入れさせた。それは、日常にひそむ犯罪がリアルに描かれているとともに、作品の舞台が北は北海道から南は九州にまでおよんでいたからでもある。清張作品は、高度経済成長期の当時の日本において旅行ブームの一端を担った。『ゼロの焦点』は北陸がミステリーの舞台として注目されるきっかけともなった作品である。

北陸は、目立たない犯罪が起り、闇に葬られやすい場所、暗い過去をもった登場人物の出身地として設定されている。『ゼロの焦点』では、当時東京から汽車で十時間以上もかかっていた北陸において、主人公の絶望的な悲しみがその情景に託されて表現されている。また、『遭難』では北アルプスの精密な描写が話題となり、『万葉翡翠』では深山の谿谷での事件が古代ロマンと連動して語られている。清張は陰鬱や哀愁ただよう北陸の自然や風土のなかにロマン性を見いだしていた。清張が北陸を特異な事件や犯罪の動機の舞台に選んだ理由はここにあるといえる。

第Ⅱ部では、富山県ゆかりのミステリー小説の単行本や新書を、再録本も含めて展示。新田次郎『チンネの裁き』、森村誠一『人間の証明』をはじめ、六十三作品を富山県内のマップとともに紹介した。

清張以後、北陸・富山は、西村京太郎や内田康夫を代表とするトラベル・ミステリーに取り上げられるようになった。和久峻三『おわら八尾 風の盆殺人事件』や西村京太郎『風の殺意・おわら風の盆』、内田康夫『風の盆幻想』など、『おわら風の盆』で全国に知られる富山市八尾町を舞台にした作品が目を引く。また本県ゆかりのミステリー文学の特徴は、開かれた「密室」ともいえる山を舞台にした作品が多いことがあげられる。富山県は三方を山に囲まれている。立山とその周辺を扱った作品が、ゆかりのミステリー作品全体の三分の一以上を占める。新田次郎を皮切りに、森村誠一、生田直親、梓林太郎などが、立山を含む北アルプスを舞台にした作品を多く描いている。

□主な展示物

種別	資料(作品)名	作者	年代	所蔵
パネル(写真)	松本清張の肖像写真	製作…高志の国文学館	—	画像提供…新潮社
パネル(写真)	松本清張の自宅書斎写真	製作…高志の国文学館	平成4年(1992)	画像提供…北九州市立松本清張記念館
愛用品	仕事用の眼鏡	松本清張	—	北九州市立松本清張記念館
愛用品	万年筆	松本清張	—	北九州市立松本清張記念館
愛用品	「松本清張」銘の原稿用紙	松本清張	—	北九州市立松本清張記念館
愛用品	取材旅行に持ち歩いたバッグ	松本清張	—	北九州市立松本清張記念館
愛用品	一眼レフカメラ	松本清張	—	北九州市立松本清張記念館
雑誌	「週刊新潮」昭和37年1月8日号 「けものみち 第一回」	新潮社	昭和37年(1962)	北九州市立松本清張記念館
雑誌	「週刊新潮」昭和38年12月23日号 「けものみち 第一〇三回」	新潮社	昭和38年(1963)	当館
パネル(写真)	小滝川流域 ヒスイ峡	製作…高志の国文学館	平成27年(2015)	画像提供…フォッサマグナム・ジウム 撮影…竹之内耕氏
パネル(写真)	松本清張取材時の写真	製作…高志の国文学館	昭和58年(1983)	画像提供…土田孝雄氏
自筆資料	原稿「万葉翡翠」1枚目	松本清張	昭和36年(1961)頃	北九州市立松本清張記念館
自筆資料	原稿「万葉翡翠」29枚目	松本清張	昭和36年(1961)頃	北九州市立松本清張記念館
自筆資料	原稿「万葉翡翠」31枚目	松本清張	昭和36年(1961)頃	北九州市立松本清張記念館
雑誌	「婦人公論」昭和36年2月号 「万葉翡翠」	中央公論社	昭和36年(1961)	当館
書籍	澤瀉久孝「万葉集序説」 (清張蔵書印あり)	楽浪書院	昭和16年(1941)	北九州市立松本清張記念館
書籍	澤瀉久孝「万葉佳品抄」 (清張蔵書印あり)	全国書房	昭和18年(1943)	北九州市立松本清張記念館

種別	資料(作品)名	作者	年代	所蔵
立体物	糸魚川産のヒスイ原石	—	—	フォッサマグナム・ジウム
パネル(写真)	牛首山	製作…高志の国文学館	—	画像提供…撮影…中田広幸氏
自筆資料	原稿「遭難 第一回」1枚目	松本清張	昭和33年(1958)	北九州市立松本清張記念館
自筆資料	原稿「遭難 第九回」11枚目	松本清張	昭和33年(1958)	北九州市立松本清張記念館
自筆資料	原稿「遭難 最終回」21枚目	松本清張	昭和33年(1958)	北九州市立松本清張記念館
自筆資料	原稿「遭難 最終回」22枚目	松本清張	昭和33年(1958)	北九州市立松本清張記念館
雑誌	「週刊朝日」昭和33年10月5日号 「遭難 第一回」	朝日新聞社	昭和33年(1958)	当館
雑誌	「週刊朝日」昭和33年12月14日号 「遭難 最終回」	朝日新聞社	昭和33年(1958)	北九州市立松本清張記念館
雑誌	「キネマ旬報」277号 「石井輝男脚本 シナリオ 黒い画集 遭難」	キネマ旬報社	昭和36年(1961)	当館
書籍	児玉清「負けるのは美しく」 集英社	集英社	平成17年(2005)初版	個人
パネル(写真)	ヤセの断崖	製作…高志の国文学館	—	画像提供…志賀町
パネル(写真)	松本清張の歌碑の写真	製作…高志の国文学館	—	画像提供…志賀町
パネル(写真)	松本清張と野村芳太郎監督の写真	製作…高志の国文学館	—	画像提供…個人
雑誌	「宝石」昭和33年3月号 第13巻 第6号「零の焦点 第一回」	宝石社	昭和33年(1958)	北九州市立松本清張記念館
冊子	映画「ゼロの焦点」野村芳太郎監督使用台本	松竹、野村芳太郎	昭和36年(1961)	個人
冊子	映画「ゼロの焦点」作品分析調査 Test No.190	松竹、野村芳太郎	昭和36年(1961)	個人
冊子	映画「ゼロの焦点」絵コンテ S128～END	野村芳太郎	昭和36年(1961)頃	個人

種別	資料(作品)名	作者	年代	所蔵
印刷物	映画『ゼロの焦点』 シーン割り一覽表	野村芳太郎	昭和36年(1961)頃	個人
雑誌	『キネマ旬報』266号「吉田進 脚本 シナリオ 『ゼロの焦点』」	キネマ旬報社	昭和35年(1960)	当館
雑誌	『シナリオ』2010年1月号 第66巻第1号「犬童一心・中園 健司脚本 シナリオ 『ゼロの焦 点』」	シナリオ作家 協会	平成22年(2010)	当館
冊子	映画『ゼロの焦点』 パンフレット	東宝・ゼロの焦 点』製作委員会	平成21年(2009)	当館
印刷物	映画『ゼロの焦点』 スチール写真	松竹	昭和36年(1961)	北九州市立松本清張 記念館
印刷物	映画『ゼロの焦点』ポスター	東宝・ゼロの焦 点』製作委員会	平成21年(2009)	北九州市立松本清張 記念館
自筆資料	原稿「昇る足音 2月号」一括掲 載」1枚目	松本清張	昭和57年(1982)頃	北九州市立松本清張 記念館
自筆資料	原稿「昇る足音 2月号」一括掲 載」138枚目(2枚とじ)	松本清張	昭和57年(1982)頃	北九州市立松本清張 記念館
自筆資料	原稿「昇る足音 2月号」一括掲 載」140枚目(3枚とじ)	松本清張	昭和57年(1982)頃	北九州市立松本清張 記念館
冊子	映画『疑惑』 野村芳太郎監督使用台本	松竹・霧プロダ クション、野村 芳太郎	昭和57年(1982)	個人
冊子	野村芳太郎監督企画ノート	野村芳太郎	昭和57年(1982)頃	個人
冊子	映画『疑惑』パンフレット	松竹・霧プロダ クション	昭和57年(1982)	当館
雑誌	『キネマ旬報』844号 「映画シナリオ 『疑惑』」	キネマ旬報社	昭和57年(1982)	個人
印刷物	映画『疑惑』ポスター	松竹・霧プロダ クション	昭和57年(1982)	当館

(4) 企画展

「夢二の旅―たまき・翁久允とのゆかりにふれつつ」

小林 加代子

詩人画家・竹久夢二（一八八四～一九三四）は、生涯にわたり旅を続け、新たな作品を生み出していった。夢二は交通網の発達とともに旅をしている。大正四年（一九一五）の富山への初めての旅も、大正二年（一九一三）に全線開通した北陸本線を利用したものであった。

本展は、公益財団法人 金沢文化振興財団 金沢湯涌夢二館の特別協力を得て、北陸新幹線開業を記念して平成二十七年に開催された同館の企画展「夢二の旅―鉄道と船の旅路をたどる」（平成二十七年四月十八日～八月十六日）を紹介したものである。あわせて、旅のひとコマでもあった富山での夢二の足跡と、富山ゆかりの人々―夢二の妻であった岸たまきと、晩年に夢二を異国の旅へといざなったジャーナリスト翁久允との関わりも紹介した。

展示は五章構成とし、金沢湯涌夢二館「夢二の旅」展に準じて構成した。各章のタイトルは、第一章「旅人の記憶―「異国」より歩み来たる人びと」、第二章「旅への思い―「故郷」を求めて」、第三章「鉄道と船―夢二の交通手段とその時代」、第四章「富山への旅、富山ゆかりの人びと―たまきと翁久允」、第五章「欧米外遊―スケッチと工芸研究の日々」である。第一章から第三章、第五章については、金沢湯涌夢二館の展示構成によるため、本展に関しては、第四章のみについて記述することとする。

第四章「富山への旅、富山ゆかりの人びと―たまきと翁久允」では、岸たまき、翁久允と、夢二とのゆかりを今に伝える作品や資料を展示した。

夢二が富山を訪れた記録が明確に残っているのは、大正四年（一九一五）と昭和三年（一九二八）の二度である。岸たまきと翁久允は、二度の来県時、夢二の傍らにいた人物であった。二人はまた、夢二の人生の旅の岐路に立っていた人びとであったとも言える。

岸たまき（一八八二～一九四五）は、金沢生まれで富山にもゆかりが深い。

富山県工芸学校（現富山県立高岡工芸高等学校）の日本画教諭であった夫の堀内喜一が病没した後、東京で絵葉書屋つるやを経営する兄の他丑を頼って上京し、夢二と出会い明治四十年に結婚した。二年後に離婚した後も、ともに暮らしては離れる生活を繰り返し返した。夢二作品や夢二デザインの日用小物の店「港屋絵草紙店」は、夢二がたまきとともに営んだ店であった。大正四年（一九一五）の富山来県時、夢二はたまきを呼び寄せ、その力を得て画会、作品展覧会を行った。たまきは夢二との別離後新たな人生を送り、現在は富山市の長岡墓地に眠っている。

展示では、夢二がたまきを描いたとされる絵画作品として、金沢湯涌夢二館蔵「不二彦を抱くたまき」、「SAYONARA」、金沢湯涌夢二館寄託「草分けの家」を紹介した。また、朝日町立ふるさと美術館蔵「1915 Tokyo ama 画帖」より、富山の風景や人物を描いたスケッチ4点（レプリカ）を展示した。高志の国文学館蔵「有磯の海岸」は、大正四年（一九一五）頃の作と考えられる海辺の風景を描いた淡彩画で、今回が初公開となった。

翁久允（一八八八～一九七三）は、現在の立山町出身の小説家・ジャーナリストである。若くして単身渡米し、約十七年間を過ごした。現地の邦字新聞を中心に、精力的に文筆活動を行い、帰国後、朝日新聞社に入社、大正十五年（一九二六）に夢二と出会った。『週刊朝日』の編集に携わり、各地の取材旅行に夢二を同行させている。昭和三年（一九二八）黒部峡谷の旅も取材旅行であった。昭和六年（一九三一）、翁と夢二は渡米したが間もなく袂を分ち、翁は昭和七年（一九三二）に帰国した。夢二はヨーロッパに渡り、昭和八年（一九三三）に帰国、翌年その生涯を閉じた。

展示では、黒部峡谷の旅ゆかりの作品として、夢二が宇奈月温泉「延対寺荘」で揮毫したとされる金沢湯涌夢二館蔵の書「青山河」、旅行への合流日時を翁に尋ねた夢二の書簡（個人蔵）などを紹介した。また、翁との交友がしのばれる個人蔵の書簡や、写真、翁久允著『道なき道』の再版用に描かれた表紙原画、アメリカへ旅立つ直前に開催された送別会の芳名録、翁久允の幼い二人の娘を描いたデッサンなどを紹介した。また、「龍田丸送別晩餐会メニュー」（個人蔵）は、サンフランシスコ到着前夜の昭和六年（一九三二）六月二日に開かれた晩餐会のメニューである。「Y・Takehisa」と

ペン書きした夢二のサインが記されるほか、同船していた俳優の早川雪洲や舞踊家の伊藤道郎らのサインがある。日本郵船北米航路で使用された晚餐会のメニューで、夢二が七夕の風物を描いた和装の美人画がデザインに使用さ

□主な展示物

資料(作品)名	作者	年代	技法・材料、 形態	備考	所蔵
熊野路	竹久夢二	大正中期	絹本着色		金沢湯浦夢二館
「越後獅子」(初版)	竹久夢二	大正9年(1920)	木版/紙	セノ才新小唄 第29編	個人
「さすらい人」 銚子にて	竹久夢二	明治41年(1908)	印刷	『日本平民新聞』 第15号コマ絵	金沢湯浦夢二館
民謡曲「空飛ぶ鳥」	竹久夢二	昭和5年(1930)	木版/紙	中山晋平作曲全集	金沢湯浦夢二館
「夢二画集 旅の巻」(再版)	竹久夢二	明治43年(1910)	書籍	洛陽堂	金沢湯浦夢二館
「夢のふるさと」 (初版)	竹久夢二	大正8年(1919)	書籍	新潮社	金沢湯浦夢二館
「絵ものがたり 京人形」(初版)	竹久夢二	明治44年(1911)	書籍	洛陽堂	金沢湯浦夢二館
室津隈古	竹久夢二	大正中期	絹本着色		金沢湯浦夢二館
短冊「劣れては」	竹久夢二	昭和初期	墨/紙		金沢湯浦夢二館
短冊「さだめなく」	竹久夢二	大正中期	墨/紙		金沢湯浦夢二館
「絵入歌集」(再版)	竹久夢二	大正4年(1915)	書籍	植竹書院	金沢湯浦夢二館
「さすらい人」 (4版)	竹久夢二	大正14年(1925)	石版/紙	セノ才楽譜 No.130	個人

れている。夢二と翁がともに出発したアメリカへの旅の往時を今に伝える貴重な品として紹介した。

資料(作品)名	作者	年代	技法・材料、 形態	備考	所蔵
「ひとりの旅」 (初版)	竹久夢二	大正12年(1923)	石版/紙	セノ才楽譜 No.285	個人
「旅の夜」(初版)	竹久夢二	大正12年(1923)	石版/紙	セノ才楽譜 No.316	個人
「夢二画集 野に山に」 (初版)	竹久夢二	明治44年(1911)	書籍	洛陽堂	金沢湯浦夢二館
「夢二画集 野に山に」	竹久夢二	明治44年(1911) 以降	石版か/紙	カード集	金沢湯浦夢二館
「夢二画集 旅の巻」(三版)	竹久夢二	明治43年(1910)	書籍	洛陽堂	金沢湯浦夢二館
賀茂の家	竹久夢二	明治42年(1909)	水彩/紙		金沢湯浦夢二館
野道	竹久夢二	大正6年(1917)	絹本着色		金沢湯浦夢二館
「山へよする」 (初版)	竹久夢二	大正8年(1919)	書籍	新潮社	金沢湯浦夢二館
木曾路	竹久夢二	大正15年(1926) 頃	印刷/紙	『藤村読本 第2 巻』口絵	金沢湯浦夢二館
田中街道	竹久夢二	昭和初期	水彩/紙		金沢湯浦夢二館
志保原宛葉書 「山はさむい」	竹久夢二/ 正木不如丘	昭和3年(1928)	印刷・墨/ 紙		金沢湯浦夢二館
堀内清宛葉書 「九月下旬に」	竹久夢二	昭和9年(1934)	印刷/紙		金沢湯浦夢二館

資料(作品)名	作者	年代	技法・材料、 形態	備考	所蔵
複製版画 「長崎六景」 灯笼流し	竹久夢二 原画	昭和12年(1937)	木版/紙	加藤版画研究所	個人
複製版画 「長崎六景」 丘の青楼	竹久夢二 原画	昭和12年(1937)	木版/紙	加藤版画研究所	金沢湯浦夢二館
複製版画 「長崎十二景」 化粧台	竹久夢二 原画	昭和15年(1940)	木版/紙	加藤版画研究所	金沢湯浦夢二館
複製版画 「女十題」 木場の娘	竹久夢二 原画	昭和12年(1937)	木版/紙	加藤版画研究所	金沢湯浦夢二館
勇敢な恋人	竹久夢二	大正13年(1924)	木版/紙	「婦人グラフ」 大正13年8月号 挿絵	個人
「わが心は」 (初版)	竹久夢二	大正11年(1922)	石版/紙	セノオ楽譜 No.252	個人
「ただよふ小舟」 (初版)	竹久夢二	大正13年(1924)	石版/紙	セノオ楽譜 No.332	個人
麻利耶観音	竹久夢二	大正13年(1924)	木版/紙	「婦人グラフ」 大正13年11月号 挿絵	個人
「夕の鐘」 (初版)	竹久夢二	大正9年(1920)	木版/紙	セノオ新小唄 第14編	個人
絵封筒雪もやう	竹久夢二	大正期	木版/紙		金沢湯浦夢二館
絵封筒川辺	竹久夢二	大正期	木版/紙	柳屋版	金沢湯浦夢二館
「平生の恋と餓」 (上巻)(初版)	西出朝風著 竹久夢二装幀	大正7年(1918)	書籍	朝風詩歌集第一篇 純正詩社	金沢湯浦夢二館
「平生の恋と餓」 (下巻「少年の歌」 (初版)	西出朝風著 竹久夢二装幀	大正7年(1918)	書籍	朝風詩歌集第二篇 純正詩社	金沢湯浦夢二館
手描き看板 「夢二抒情小品」	竹久夢二	大正6年(1917)	水彩・鉛筆 /紙・布紐		金沢湯浦夢二館

資料(作品)名	作者	年代	技法・材料、 形態	備考	所蔵
竹久夢二抒情画 展覧会目録	竹久夢二	大正7年(1918)	印刷		金沢湯浦夢二館
「青い船」 (初版)	竹久夢二	大正7年(1918)	書籍	実業之日本社	金沢湯浦夢二館
「嗜好」	竹久夢二	明治末期か	印刷/紙		金沢湯浦夢二館
姉と妹	竹久夢二	明治42年(1909)	印刷/紙	「ホトトギス」 12巻8号コマ絵	金沢湯浦夢二館
「夢二エデホン」 (初版)	竹久夢二	大正3年(1914)	書籍	岡村書店	金沢湯浦夢二館
「めぐりあひ」 (複製)	徳田秋聲著 竹久夢二装幀	大正2年(1913) 初版	複製書籍	実業之日本社 (ほるぶ出版)	個人
「夢二画集 夏の巻」 (三版)	竹久夢二	明治43年(1910)	書籍	洛陽堂	金沢湯浦夢二館
不二彦を抱く たまき	竹久夢二	明治45年(1912)	鉛筆/紙		金沢湯浦夢二館
草分けの家	竹久夢二	明治41年(1908)	鉛筆・水彩/紙		金沢湯浦夢二館寄託
SAYONARA	竹久夢二	明治43年(1910)	水彩/紙		金沢湯浦夢二館
後園新菓	竹久夢二	大正4年(1915)頃	絹本着色		金沢湯浦夢二館
1915 Toyama画帖	竹久夢二	大正4年(1915)	レプリカ	画帖より額4点	朝日町立ふさと美術館
有磯の海岸	竹久夢二	大正4年(1915)頃	絹本淡彩		当館
有磯海	竹久夢二	大正4年(1915)	複写物	「富山日報」 大正4年1月26日 3面	原品富山県立図書館
「小夜曲」 (初版)	竹久夢二著 恩地孝四郎 装幀	大正4年(1915)	書籍	新潮社	当館

資料(作品)名	作者	年代	技法・材料、 形態	備考	所蔵
『唾蟬坊流生記』	添田唾蟬坊	昭和31年(1956)	書籍	添田唾蟬坊 顕彰会	個人
はぎのや飛だんご 包装紙	竹久夢二	大正4年(1915)	木版/紙		個人
書『青山河』	竹久夢二	昭和3年(1928)	墨/紙	金沢湯涌夢二館	
翁久允宛書簡 「お手紙拝見」	竹久夢二	昭和3年(1928)	墨/紙	個人	
翁久允宛書簡 「しばらく(兄の)」	竹久夢二	昭和5年(1930)	墨/紙	2月19日消印	個人
黒部峡谷	大泉黒石	昭和5年(1930)	書籍	『峡谷と温泉』 二松堂書店	個人
翁久允宛書簡 「御下問のえ」	竹久夢二	昭和2年(1927)か	墨/紙	11月13日付	個人
翁久允宛書簡 「さしる三葉」	竹久夢二	昭和3年(1928) 以前	墨/紙		個人
『翁久允全集 第4 巻「帰国篇」』	翁久允	昭和47年(1972)	書籍	翁久允全集刊行会	当館
『道なき道(初版)』	翁久允著・ 竹久夢二装幀	昭和3年(1928)	書籍	甲子社書房	当館
翁久允著 『道なき道』 再版用表紙原画	竹久夢二	昭和3年(1928)か	水彩・墨・ 鉛筆/紙	未出版	個人
翁君に送る	竹久夢二	昭和3年(1928)	雑誌	『民謡詩人』 昭和3年9月号	当館
翁久允宛書簡 「先日藤田君」	竹久夢二	昭和2年(1927)か	墨/紙	12月5日付	個人
赤城山にて	撮影者不明	昭和4年(1929)	複写物	麻生豊、翁久允、 竹久夢二、 西條八十、 藤田健次他写真	原品個人
『道なき道(再版)』	翁久允著・ 竹久夢二挿画	昭和25年(1950)	書籍	高志人社	当館
夢二の思出	翁久允	昭和25年(1950)	雑誌	『高志人』 昭和25年11月号	当館

資料(作品)名	作者	年代	技法・材料、 形態	備考	所蔵
夢二を送る歌	翁久允	昭和6年(1931)	複写物	『北陸タイムス』 昭和6年4月16日 2面	原品 富山県立図書館
翁久允宛書簡 「昨夜君を」	竹久夢二	昭和6年(1931)	墨/紙	4月29日消印	個人
葉書「しばらく」	翁久允、 竹久夢二	昭和6年(1931)	複写物	原品個人	
翁久允 竹久夢二 送別会芳名録	発起人 有島生馬他	昭和6年(1931)	墨/紙	昭和6年4月25日	個人
秩父丸横浜港出帆 後海上にて	撮影者不明	昭和6年(1931)	複写物	竹久夢二、 翁久允他写真 昭和6年5月7日	原品個人
キラウエア火山にて	撮影者不明	昭和6年(1931)	複写物	竹久夢二、 翁久允写真	原品個人
ハワイにて	撮影者不明	昭和6年(1931)	写真	竹久夢二、 翁久允写真2枚	個人
龍田丸船上仮装 パーティ	撮影者不明	昭和6年(1931)	複写物	竹久夢二、翁久允、 早川雪洲、 伊藤道郎他写真	原品個人
『翁久允全集 第6巻 『道なき道』』	翁久允	昭和48年(1973)	書籍	翁久允全集刊行会	当館
龍田丸送別晩餐会 メニュー	竹久夢二	昭和6年(1931)	木版/紙	竹久夢二、早川雪洲、 伊藤道郎らのサイ ンあり	個人
日美・久美	竹久夢二	昭和6年(1931)	鉛筆/絹	昭和6年6月21日	個人
民謡曲「旅人の唄」	竹久夢二	昭和5年(1930)	水彩・墨・ 鉛筆/紙	中山晋平楽譜の原 画	個人
民謡曲「旅人の唄」	竹久夢二	昭和5年(1930)	木版/紙	中山晋平楽譜の枚 正刷り	個人
民謡曲「旅人の唄」	竹久夢二	昭和5年(1930)	木版/紙	中山晋平作曲全集	個人
中山晋平作曲全集 目次	竹久夢二	昭和5年(1930)	木版/紙	中山晋平作曲全集	個人
堀内清宛葉書 「なんしろはやく」	竹久夢二	大正3年(1914)	インク・鉛 筆/紙	金沢湯涌夢二館	

手	晶子ちゃん	あやめ	小米桜	ベルリンの婦人	書「花満径」と花満径図	資料(作品)名
竹久夢二	竹久夢二	竹久夢二	竹久夢二	竹久夢二	竹久夢二	作者
昭和6年(1931)	昭和7年(1932)	昭和8年(1933)	昭和8年(1933)	昭和8年(1933)	昭和6年(1931)	年代
紙本着色	紙本淡彩	墨/紙	墨/紙	鉛筆・パス テル/紙	紙 墨・水彩/	技法・材料、 形態
トガワ コレクシヨン	トガワ コレクシヨン	イッテン・ シュールレ絵手本	イッテン・ シュールレ絵手本		「秩父丸芳名帖」 より	備考
金沢湯浦夢二館	金沢湯浦夢二館	金沢湯浦夢二館	金沢湯浦夢二館	金沢湯浦夢二館	金沢湯浦夢二館	所蔵

平成27年度高志の国文学館紀要第1号

平成29年1月13日発行

編集 高志の国文学館

富山県富山市舟橋南町2-22

TEL 076-431-5492

印刷 北日本印刷株式会社

発行 高志の国文学館

※許可なく転載、複製を禁じます。